



ひろがり つながる

ESD

実践事例

48

平成22年度文部科学省「日本／ユネスコパートナーシップ事業」
ユネスコスクールにおけるESD普及促進活動
学校＆みんなのESDプロジェクト活動報告書



ひろがり つながる

ESD 実践事例

48

平成22年度文部科学省「日本／ユネスコパートナーシップ事業」
ユネスコスクールにおけるESD普及促進活動
学校&みんなのESDプロジェクト活動報告書

はじめに

この小冊子を手にとっていただきましたことを心より感謝申し上げます。

財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、文部科学省の委託を受け、平成22年度「日本／ユネスコパートナーシップ事業」のもと、ユネスコスクールにおけるESD普及促進活動「学校&みんなのESD*プロジェクト」を実施しました。

全国279校（平成23年1月時点）に及ぶユネスコスクールは、ESDの推進拠点として位置づけられ、さまざまな実践を推進しています。

このプロジェクトでは、ユネスコスクールにおけるESD実践事例を収集・記録・整理し、今後必要とされる支援策を検討するために、ESD実践とそれを強化する活動を行うプロジェクト協力校を公募し、選考の結果、全国48校のユネスコスクールがプロジェクト協力校として平成22年9月1日から平成23年1月14日の期間、事業を実施しました。そして、1校あたり上限200,000円をこのための経費にあてていただきました。

本冊子はこのプロジェクト協力校48校におけるESD活動を実践事例集としてまとめたものです。

* ESD : Education for Sustainable Development (持続発展教育／持続可能な開発のための教育)

プロジェクト協力校から提出された事前の応募用紙（兼事業計画書）、および事後の活動報告書と経費報告書をもとに各学校のプロジェクトからESD活動を一つか二つを選択し、活動の概要とスケジュールを中心に、活動をした児童・生徒や教員、活動に携わった保護者・地域の方の声や経費の使い道についてまとめるとともに、ここに掲載された事例が学校および地域に与える効果と影響を可視化できるよう努めました。

また、これらの実践事例につき、専門家の分析による客観的な評価を掲載することにより、実践の現状と課題を明らかにし、ESD活動を進めていく上でのヒントとなるように心掛けました。

本冊子は、ユネスコスクールの諸活動およびESD実践を身近に感じてもらい、ESD活動の裾野を広げることを目的としています。また、48校の実践事例をウェブサイトで国内外に公開しています。

掲載されている事例を今後の活動の参考にさせていただくのはもちろんのこと、学校、あるいは地域でESDに取り組む方々の交流手段のひとつとしても活用していただければと願っています。

2011年3月
財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

はじめに..... 2
プロジェクト協力校一覧..... 6
48実践事例3つのアプローチ..... 8

第1部

ESD実践事例48..... 11

北海道・東北地区..... 13
関東地区..... 49
北陸・中部地区..... 71
近畿地区..... 93
中国・四国・九州地区..... 133
実践事例からの考察..... 147

Teacher's Column

プロジェクトから感じたこと

人とのつながりの大切さ..... 43
身近なマンガでESDを推進..... 59
視野を広めて意識を広める..... 83
幼稚園児の変容と家庭の取り組み..... 99
地域交流の楽しさや達成感を実感..... 137
あなたにとってのESDとは..... 89, 113, 143

第2部

ユネスコスクール
発展のために..... 167

ESDとユネスコスクール..... 168

「学校と地域の連携」で育む未来の市民..... 174

ESDの質保証とHOPE評価の可能性..... 181

ESD普及におけるユネスコスクールの役割と
指導行政上の課題..... 191

ユネスコスクールとは..... 198

【資料】応募用紙（兼事業計画書） 書式..... 200

【資料】活動報告書・経費報告書 書式..... 204

プロジェクト協力校一覧

事例通し
番号

北海道・東北地区		
1	北海道	石狩市立生振小学校 We Shall Overcome～みんなが幸せな社会をめざして～
2	北海道	斜里町立ウトロ小中学校 ふるさと知床半島に共生し、自他の生命を尊重し、児童生徒の自立の精神を培う授業
3	北海道	札幌市立札幌大通高等学校 大通-ルイジアナ教科横断ピースプロジェクト
4	北海道	清里高等学校 ユネスコスクールへの歩みのために ～ボランティアや国際交流を中心に～
5	宮城県	気仙沼市立月立小学校 ふるさと八瀬のよさを見つけよう
6	宮城県	気仙沼市立小原木小学校 地域の特性を生かした体験活動を通して、ふるさとの良さを知る。
7	宮城県	気仙沼市立馬籠小学校 人・自然・地域に学ぶ馬籠つ子
8	宮城県	仙台市立中野小学校 子どもの心を動かす環境教育とESD
9	宮城県	宮城教育大学附属小学校 小学校低学年からの防災意識を育む 実践事例の研究と創造
10	宮城県	富谷町立日吉台小学校 笑顔いっぱい、夢いっぱい、元気いっぱい
11	宮城県	気仙沼市立大島中学校 ホタテ貝の養殖体験活動を通した海洋環境学習
12	宮城県	白石市立南中学校 社会人・海外の人から生き方を学ぼう
13	宮城県	仙台二華中学校・高等学校 仙台二華のIS・SR
14	秋田県	大仙市立大曲南中学校 未来の地球、今私たちにできること
関東地区		
15	埼玉県	越谷市立富士中学校 教育過程におけるESDの位置付けと ユーラシアESDネットワーク構築に向けた取り組み
16	埼玉県	国際学院高等学校 多文化共生社会の精神理解への取組み
17	千葉県	市川市立稲越小学校 つながりのある学校文化の構築をめざして
18	千葉県	市原中央高等学校 英語ガイドマップで地域交流
19	千葉県	千葉県立市川西高等学校 外国から見たニッポン
20	東京都	江東区立東雲小学校 いのちかがやけ ～ユニセフミュージアムへようこそ～
21	東京都	渋谷教育学園 渋谷中学高等学校 ESD普及のための書籍づくり
22	神奈川県	神奈川県立有馬高等学校 国際理解教育の実践を通し「持続可能な開発」を考える
北陸・中部地区		
23	富山県	富山市立寒江小学校 主体的に学び、地域に働きかける子どもを 育成する持続発展教育
24	石川県	金沢市立浅野川小学校 大好きな校区・じまんの金沢を広めよう ～地域へ、世界への発信を通して～
25	石川県	金沢市立四十万小学校 世界の人と手をつなごう ～国際理解教育～

26	石川県	金沢市立西小学校	食でつながる地球プロジェクト 「つなげよう! わたしたちと世界」
27	新潟県	新潟市立巻東中学校	ほたるの保護活動からみる環境問題と 米百俵を送った側からの地域遺産
28	新潟県	新潟市立白新中学校	総合的な学習の時間
29	新潟県	新潟県立燕中等教育学校	GMプロジェクト: 地域を知り、地域から学び、世界を知ろう!
30	愛知県	名古屋大学教育学部 附属中・高等学校	「共生と平和の科学」21世紀の主役である私たち

近畿地区

31	京都	NPO法人 京田辺シュタイナー学校	高等部生徒のための伝統技術体験実習
32	大阪府	豊中市立上野小学校	世界の人と歩む子どもの育成 ～いろいろな友だち、世界から世界へ～
33	大阪府	松原市立松原第七中学校	「出会い」「生き方」「学び愛」! イキイキ七中 ESD展
34	大阪府	大阪府立住吉高等学校	足元からの国際理解—住吉から世界へ
35	大阪府	大阪府立長野高等学校	地域と進める国際交流、留学生と取り組む ESDカリキュラム
36	大阪府	羽衣学園高等学校	ICTを活用した海外の学校や機関との ESDをテーマにした学び合い
37	奈良県	奈良市立富雄北幼稚園	はじめの第一歩
38	奈良県	奈良市立飛鳥小学校	飛鳥から世界へ、世界から飛鳥へ
39	奈良県	奈良市立済美小学校	世界遺産学習「地域に学び、地域に誇りと愛着を」
40	奈良県	奈良市立椿井小学校	世界にはばたく椿井っ子
41	奈良県	奈良教育大学附属中学校	ホールスクールアプローチによる ESD理念にもとづく学校づくり
42	奈良県	奈良市立月ヶ瀬中学校	地域ぐるみのESD活動
43	奈良県	奈良女子大学 附属中等教育学校	海外のユネスコスクールとのESDをテーマとした 交流プロジェクト
44	和歌山県	和歌山県立串本古座 高等学校古座校舎	世界遺産教育及び地域と連携したふるさと教育

中国・四国・九州地区

45	広島県	福山市立内海小学校	エネルギー・環境教育を基軸としたESD
46	広島県	広島大学附属中・高等学校	クラブ活動・生徒会活動を中心に、 生徒にESDの精神の涵養をはかる取り組み
47	福岡県	福岡県立武蔵台高等学校	武蔵台高校ユネスコスクールプロジェクト
48	福岡県	福岡県立城南高等学校	今津干潟の環境に関する調査・研究と保全活動

表中の数字は、事例通し番号です。

アプローチ別に、ダイレクトに事例を検索できます。

アプローチ1

気になるキーワード

	 幼稚園	 小学校	 中学校	 高校
平和		1 32 40	41	3 30
国際理解		1 20 24 25 26 32	12 13 14 28 29	3 13 16 18 19 22 29 30 34 35 36 43 46
人権		20 32		30 34 43
環境	37	6 7 8 9 10 23 32	2 11 13 14 15 27 28 29 33 41 42	13 29 36 48
福祉		7	12 28 42	4
郷土愛		5 6 7 8 23 24 38 39 40 45	2 27 42	4 29 44 47

アプローチ2

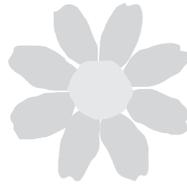
〇〇がしたい

	 幼稚園	 小学校	 中学校	 高校
地域や保護者の方々と一緒に活動をしたい!	37	5 6 7 10 17 23 32 39 40 45	2 11 15 27 33 42	4 18 31 35 44 46 48
学校での実践を地域へ発信したい!		1 5 7 10 17 20 32 40	11 13 14 21 28 33	13 18 19 21 34 35 36 44 46
留学生と一緒に活動をしたい!		26		18 22 35
学校間交流をしたい!		24 25 40	14 27	3 19 35 36 43 48
伝統文化体験をしたい!	37	5	42	31 47
自分の住む町を理解する活動がしたい!		7 9 23 24 32 38 39	2 11 27 29 42	18 29 48

アプローチ3

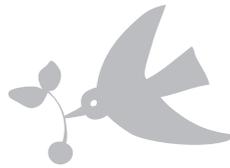
どうしたらいいの?

	 幼稚園	 小学校	 中学校	 高校
ESDの具体的なイメージがわからない...	37	8 20 32 38 39	21	21 44 46
海外と交流をしたいけど、語学に自信がなくて...		24 26		3 34
ESDをみんなに知ってほしいけど...		5	11 13 21 28 33 42	13 19 21 44 46 48
教職員の共通理解・ESD認識を深めたいけど...		10 17 45	13 21 33	13 16 21 22 30 44 45 46



第 1 部

ESD 実践事例 48





右の図は、持続可能な未来への希望を育むために、各教科・領域等が生徒とつながり存在していることを示しています。本冊子では中学校と高校の事例に登場します。

学校では、様々な教科・領域等の教育活動が時間割で区切られ、それぞれに展開されています。

もちろん、各教科・領域等にはそれぞれ専門性や特性があり、また個別にねらいがあり、子どもたちは、様々な知識やスキルを学んでいくわけですが、未来につながる暮らしや学びのためには、子どもたちの内面で各教科・領域で学んだ知識やスキルがつながりかわり合って作用していく必要があります。

新しい学習指導要領とその解説の中で、持続可能な未来を担う子どもたちの育成に関する記述は、総則、社会、理科、生活科、技術・家庭科、道徳、総合的な学習の時間などに見られますが、持続可能な未来を構築するのに必要な知識・知恵、リテラシー・スキル、生きる希望や自己肯定感の育成については、それらの教科・領域を超えてすべての教科・領域のつながりかわりの中で扱っていききたいものです。



ESD対応 教科・領域

持続可能な未来の希望のための
教材活用概念図(Ⅱ)

平成21年度文部科学省委託「日本／ユネスコパートナーシップ事業」『ESD教材活用ガイド 持続可能な未来への希望』より



ESD 実践事例 48

北海道・東北

- 1 北海道石狩市立生振小学校
- 2 北海道斜里町立ウトロ小中学校
- 3 北海道札幌市立札幌大通高等学校
- 4 北海道清里高等学校
- 5 宮城県気仙沼市立月立小学校
- 6 宮城県気仙沼市立小原木小学校
- 7 宮城県気仙沼市立馬籠小学校
- 8 宮城県仙台市立中野小学校
- 9 宮城教育大学附属小学校
- 10 宮城県富谷町立日吉台小学校
- 11 宮城県気仙沼市立大島中学校
- 12 宮城県白石市立南中学校
- 13 宮城県仙台二華中学校・高等学校
- 14 秋田県大仙市立大曲南中学校

We Shall Overcome

～みんなが幸せな社会をめざして～

代々6年生が取り組んでいる世界寺子屋運動。自分たちの社会を見つめ直し、よりよい社会へするためには何が出来たかを考え、実践する力を育むことを目的としている。仲間と協力して活動し、その輪を広げることで問題解決できることを体験する。また世界の問題に目を広げ、いじめなどの身近な問題も同じように解決していこうと活動に取り組んでいる。



Activity 世界寺子屋運動を広めよう

6年生
16人

世界の現状と自分たちが生きる社会の様々な問題を調べる。世界寺子屋運動を行うにあたり、活動を広めるためのリーフレットを作り学校・保護者・地域へ配布する。

11月 自分たちと世界の現状における違いや問題、寺子屋運動について調べる

寺子屋運動について調べたことを、学校・保護者・

12月 地域の方に伝え、理解と協力を求める
「書き損じはがき」収集を呼びかけるリーフレットの作成、配布

リーフレットの手直しと再配布

2月 石狩ユネスコ協会の出前授業
「幸せな社会をつくるために」何が出来たかを卒業へのまとめ学習とする

Supporters

石狩市役所
ユネスコ本部
石狩ユネスコ協会
地域の方、保護者
石狩市教育委員会

担当教員の声

調べ学習で、疑問が広がり深まるうちにユネスコ本部へ直接電話で質問をしていたことに、意欲的な児童の姿勢を見ることが出来た。



様々な写真と色で10種のリーフレットを作成



プロジェクト経費の使いみち

世界寺子屋運動を広めよう▶▶リーフレット作成のインク・ラミネート代、リーフレット送付のための郵送料

つがやき・想い

「リーフレットを配った
児童のどきどき」

緊張してなかなかうまく説明できなかったけど、うまく説明できて相手が「わかりました」と言ってくれた時は気持ちが伝わったのかなと思いました。

Data 北海道石狩市立生振小学校

学校長	<small>たかやまりゅうじ</small> 高山隆二
所在地	〒061-3245 <small>ほっかいどういしかりしおやふる</small> 北海道石狩市生振375-1
TEL	0133-64-2018
FAX	0133-64-6427
E-MAIL	ikc_oyafuru_e@infosnow.ne.jp
HP	http://www.infosnow.ne.jp/ikc_oyafuru_e/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年3月
プロジェクト担当教員	<small>だいさかかおり</small> 台坂香織

ふるさと知床半島に共生し、 自他の生命を尊重し、 児童生徒の自立の精神を 培う授業

地域の教育資源を生かした体験・交流活動や、地域の方との関わりを通して豊かな人間性と郷土愛を育てる。また体験活動を通して、現代社会の課題を見出し追求することで、課題解決力を育てる。



Activity 環境保全意見発表会

中学3年生
9人

義務教育最上級生として、ふるさと知床に自然と共有する生徒たちが豊かな自然環境をどのように保全していったら良いかを課題に意見をまとめる。発表原稿は学校ホームページに掲載しESD活動を発信していく。

Supporters

世界遺産センター
地域の方

9月 世界遺産センターで知床の自然環境資料を収集

10月 海岸漂着物の調査

11月 意見発表資料の作成

12月 環境保全意見発表会
学校HPに意見を掲載

担当教員の 声

意見発表を通じて大人が実践している環境保全活動を知り、より良い環境を実現する興味・関心が高まってきた。ホームページに掲載した意見には流水やエゾシカ、外来種について等の貴重な意見も見られた。



意見発表会の様子



世界遺産センターで知床の自然環境を調査

プロジェクト経費の使いみち

環境保全意見発表会▶▶

つぶやき・想い

「まとめ作業の効果」

意見発表にまとめる作業を通して、生徒が資料を検証したり言葉の使い方を工夫したりすることで、外に向かって自分の意見を発する基礎的な力がついたと感じました。



意見発表会の資料を収集

Data 北海道斜里町立ウトロ小中学校

学校長	よこやますまさ 横山泰昌
所在地	〒099-4352 北海道斜里郡斜里町ウトロ高原 20
TEL	0152-24-2838
FAX	0152-24-2395
E-MAIL	shiretoko@utoroej.knc.ne.jp
HP	http://www.utoroej.knc.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年7月
プロジェクト担当教員	とどうたまみ 登藤珠実 [担当教科:美術・技術家庭・総合学習・特別活動]

大通—ルイジアナ 教科横断ピースプロジェクト

「自分以外の目から“いのち”を見つめる～価値観の違いを超え、平和について考える～」を共通テーマにした、米国ルイジアナ州立大学附属高校と二校間での平和教育プロジェクト。このプロジェクトはESD日米教員交流プログラム*日米合同会議（2010年7月）での国際理解をテーマにした分科会に参加した日本人とアメリカ人の教員2名が発端となったプロジェクトである。教科横断型学習により多角的アプローチで平和の大切さを日米高校生で対話する。メールやビデオ交換、ビデオ会議等を用い、国や教科の枠を越えた継続的共同作業、共生教育を行い、生徒達の今までの「物事の捉え方」を少しでも変革することを目指している。

*フルブライト・ジャパン（日米教育委員会）が日米両国の共同出資により米国のInstitute of International EducationとACCUの協力で実施

Activity 大通ルイジアナ間、教科横断交流活動

1-4年生
200人

双方から提示する教材を共同で使用し、可能な限り多くの頻度で交流した。ビデオ対話等を通し、日米の共通点・差異を発見させる等、課題発見学習とクリティカルシンキングの醸成を目指した。参加講座は計7教科・19講座、参加教員は25名。プロジェクトのまとめとして、二校共同で千羽鶴を折り、3年次が広島平和記念公園に献納する。

Supporters

ルイジアナ州立大学
附属高等学校、
広島市立大学
平和研究所、
広島の被爆経験者

10月 教科横断授業開始（19講座）
米国高校とのネット交換学習開始

12月 プレゼンテーション大会、
大会の様子を米国高校へネット配信

1月 広島取材旅行
ネット配信・交流継続

担当教員の 声

米国との平和教育はどうしても英語科メインで競争等を取り扱うイメージがあるが、日本史・世界史に加え国際クラス・商業情報科・数学科・書道科・美術科・2年次総合も参加し、それぞれの

特色を活かした斬新な切り口で広くテーマに迫ることができた。



数学基礎講座で線を解析し、折った千羽鶴をルイジアナに送る



In our opinion, war is a definite evil.



プロジェクト経費の使いみち

大通ルイジアナ間、教科横断交流活動▶▶ 広島への旅費、電子文具費、ルイジアナへの千羽鶴・芸術科作品等の郵送料

つがやき・想い

「生徒の変化」

国の枠を超えての交流活動に生き生きとしていました。また機会があれば参加してルイジアナの生徒と直接話したいとも言っています。ルイジアナの生徒の変容も担当教員から伝え聞くのみではなく、生徒とのやり取りからも大きくうかがえました。

Data 北海道札幌市立大通高等学校

学校長	もり や びく 守屋 開
所在地	〒060-0002 北海道札幌市中央区北2条西11丁目 <small>ほっかいどうさつぽろし ちゆうおうく きたにじゅうじ</small>
TEL	011-251-0229
FAX	011-261-1449
E-MAIL	aki.nishihara@sapporo-c.ed.jp
HP	http://www.odori-h.sapporo-c.ed.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年10月
プロジェクト担当教員	にしはら あ き 西原明希 [担当教科:外国語(英語)]

ユネスコスクールへの 歩みのために

～ボランティアや国際交流を中心に～

長年にわたる駅の清掃や花壇作り、高齢者施設でのボランティア活動、平成3年からのニュージーランド短期留学やモトエカ高校生との交流等を実施。今年度はこれまでの活動を充実させながら、来年度のユネスコスクールとして持続可能な社会の担い手を育む教育を推進する準備時期と捉える。

Activity 福祉・ボランティア活動

1-3年生
95人

地域での福祉・ボランティア活動。公共施設や高齢者施設で地域の方々と交流し、地域と学校の連携を深めると共に、地域への愛着を育成する。また募金活動や奉仕活動も積極的に行う。

4月 緑の羽募金活動

6-9月 清里町駅の花壇作り

7月 町内老人福祉施設にて交流活動

8月 離乳食教室で育児体験・ボランティア活動
老人福祉施設清楽園にて交流・ボランティア活動
清里神社祭典にて全校生徒による御神輿パレード

10月 清里町駅と駅周辺の清掃活動

11月 赤い羽根協働募金活動

1月 社会福祉協議会主催「ヤングボランティア講習会」参加

Supporters

緑の羽募金活動関係者、
JR北海道本社、
JR北海道釧路支社、
清里駅、社会福祉協議会、
「ふれあい広場」関係者、
「離乳食教室」関係者、
老人福祉施設清楽園、
清里神社、
赤い羽根協働募金活動
関係者、
「ヤングボランティア
講習会」関係者、
地域の方

担当教員の 声

ユネスコス
クールとして
承認された
こともあり、
地域の学校
活動への理解や協力が深ま
り、生徒もこれまでの活動に
自信が持てるようになった。

ふるさと八瀬の よさを見つけよう

ふるさとの良さを知り、ふるさとの環境を大切に、人とのつながりを尊重できる児童の育成を目指す。「自然」「伝統と文化」「人との関わり」を柱に地域で活動し、その学びを一人ひとりの、また地域の未来作りへとつなげ、「地域遺産」を世界のユネスコスクールへ発信していく。



繭細工

Activity 繭細工づくり

3-4年生
10人

学区はかつて養蚕の盛んな地域であった。そこで蚕の幼虫を一人10匹ずつ飼育・観察し、生体を学習する。飼育した蚕の繭を使って昔ながらの糸取り作業を体験し、地域の繭細工職人を招き作り方を教わる。地域交流を深め、感謝の心を育む。

Supporters

地域の繭農家、
地域の繭細工職人

9月 蚕の飼育を始める

1月 地域の方を講師に招き、繭から絹糸を取り出す作業を体験
地域の方を講師に招き、飼育した繭を使って繭細工を作る

担当教員の 声

地域の方の温かい支えをいただきながら活動を進められることに喜びを感じる。児童と地域の方は活動を通じて親しみを増し、児童が地域の中で安心して生活できる環境作りにつながると思う。



繭の糸取り作業



塚澤神楽

Activity 地域伝統芸能発表会

5-6年生
10人

地域伝統芸能「早稲谷鹿踊り」は年間を通して全校で練習し、5、6年生は年間10回ほど保全会の指導を受け、夜練習を実施している。「塚澤神楽」は6年生が学芸会での発表に向け、保全会の指導の下、1ヶ月程度練習している。様々な場所で発表すると共に、他地区の神楽との比較学習を行い、共通点や違い、踊りに込められた願いなどを学習する。

Supporters

地域の保全会、
宮城教育大学舞踊
発表会、
子ども伝承芸能
発表交流会

9月 仙台市若林区文化センターでの宮城教育大学舞踊発表会に参加、早稲谷鹿踊りを披露

10月 6年生が学芸会で塚澤神楽を披露

12月 気仙沼市中央公民館での子ども伝承芸能発表交流会に参加、早稲谷鹿踊り、塚澤神楽を披露
羽田地区の神楽との比較学習

担当教員の 声

複数の団体から招待を受け、発表する機会をいただき外部の多くの方に披露する事が出来た。多くのお褒めの言葉をいただき、児童も教員も喜びを感じ今後の活動の励みとなった。



早稲谷鹿踊り

つばやき・想い

「保護者の喜び」

積極的に地域の方が活動に関わっていただけるのは嬉しいです。ESD活動は地域と学校と家庭の結びつきを強めてくれるので、今後もESD活動を大切にしながら子どもたちの伸長を進めてほしいです。



炭焼き体験

プロジェクト経費の使いみち

繭細工づくり▶▶講師謝礼

地域伝統芸能発表会▶▶講師謝礼、バス借上げ代、案内状送付のための文具費・郵送費

その他のActivity

サツマイモの収穫▶▶講師謝礼

そばの収穫、そば作り体験▶▶講師謝礼、バス借上げ代

大豆の収穫、大豆を使った料理▶▶講師謝礼

炭焼き体験▶▶バス借上げ代

Data 宮城県気仙沼市立月立小学校

学校長	やまもとまさみ 山本正美
所在地	〒988-0864 宮城県気仙沼市塚沢65
TEL	0226-55-2260
FAX	0226-55-2713
E-MAIL	tuki-s10@k-macs.ne.jp
HP	http://www.k-macs.ne.jp/~tuki-s10/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年10月
プロジェクト担当教員	きくち たけお 菊地丈夫

地域の特性を生かした 体験活動を通して、 ふるさとをの良さを知る。

気仙沼市立小原木小学校では地域の豊かな自然環境、伝統文化へ意識を向ける事により、地域全体への関心を高める体験活動を行っている。「育てて・つくって・食べて」では、実際に地域の土地を活用し、サツマイモや大豆の栽培から地域の料理（はっとう）を味わうまでを1つの学習としている。児童は自然のありがたさ、収穫の喜び、食の大切さを学ぶ。学年ごとに全学年で活動する事で、教員、児童ともに次年度への準備を整える事へと繋がっている。

Activity

育てて・つくって・食べて

1-6年生
67人

学校近くの田畑を利用し地域料理を調理実習することで、地域への関心を高める。

- 5月 5年生—田植え
田んぼに入り自分たちで土起こし、耕し、水はり、代かきをし、豊作を祈って1苗ずつ植える
- 6月 1・2年生—サツマイモの苗植え
校庭の落ち葉でつくった腐葉土を利用
- 8月 6年生—昨秋に植えた小麦の収穫
小麦粉に製粉し後日「かにぱっとう」の調理実習
- 10月 1・2年生—サツマイモの収穫

担当教員の 声

学級担任が実践報告をA4数枚の冊子にまとめ、全職員に配布した。そこから今年度の成果と反省を共有し次年度へ引継げる。児童は画用紙や模造紙での発表会を行い、自分の成果と反省を振り返り、次の学習へと生かせる。

Supporters

地元高校教員、
地域の方、
保護者



5年生の草取り



ホタテ・カキの養殖場見学。海の上の養殖いかだで

Activity ふるさと学習会

1-6年生
67人

学社連携事業として公民館の協力のもと実施する。学年ごとに、地域の施設見学などの様々な体験をする。1・2年生は漁港を見学し、鮭の稚魚を放流する。3・4年生は公共施設を見学して地域の様々な施設を知る。6年生は座禅体験や住職の講話を受ける。5年生は網起こしをし、日の出前から地域漁師と船に乗る。

4月 6年生—江戸時代に利用されていた旧道を歩く

6月 4年生—「水と環境」をテーマにダムや浄水場の見学
5年生—ホタテやカキなどの養殖場を見学

10月 5年生—早朝からの網起こし体験

Supporters

地域公共施設・
漁業場・養殖場、
公民館、地域の方

担当教員の 声

船に挙げられた魚を夢中で掴もうとする児童の姿に、人間の逞しさと生き物の命をもらって生きていることを実感した。魚の鱗や臭い、船上に出来た魚の血だまり…体験することの素晴らしさ、バーチャルにはないものがここにはありました。



6年生の旧道めぐり

つばやき・想い

「網起こしを体験して」

船がポイントに着くと漁師さんたちは大きな掛け声で網を引きました。魚がピチャピチャと跳ねて胸がワクワクしてきました。みんなから顔に血がついているよと言われてビックリ。その後にサケの血だということが分かりました！

プロジェクト経費の使いみち

育てて・作って・食べて▶▶実践報告冊子作成のためのインク、ラミネート代

ふるさと学習会▶▶—

その他のActivity

海に親しむつどい▶▶—



Data 宮城県気仙沼市立小原木小学校

学校長	<small>くまがいよう こ</small> 熊谷洋子
所在地	〒988-0512 <small>みやぎけん けせんぬまし からくわらとういわい さわ</small> 宮城県気仙沼市唐桑町岩井沢97-3
TEL	0226-34-3201
FAX	0226-34-3281
E-MAIL	harasho@chorus.ocn.ne.jp
HP	—
ユネスコスクール 加盟時期	2010年7月
プロジェクト担当教員	<small>お がたとしあき</small> 尾形俊明

人・自然・地域に 学ぶ馬籠っ子

豊かな森林に囲まれた馬籠地域の特性を生かし、地域の自然環境、歴史・文化、福祉などの学習を、地域の協力を得ながら全校挙げて実施し、地域とともに進んで学び考え、実践する児童を育成する。



Activity 馬籠の森と林

1-6年生
28人

豊かな森林に囲まれている特性を生かし、森林についての環境や経済など多面的な理解を深め、地域を愛する児童を育てる。また馬籠地区の未来を考えながら、その良さを他に発信し表現力を身に付ける。

4-9月 地域合同で学校林への施肥や草刈を行う

「地域の人と一緒に」

10月 地域の林業従事者を講師に、仕事内容や木材活用などの講話を聞く
一緒に学校林の下草刈を行う

「地域に発信しよう」

11月 保護者、地域の方、お世話になった方を対象に学んだことを発表

「木材の活用方法を知ろう」

12月 林業振興施設での体験学習

「環境教室」

外部専門家を講師に環境面から森林の役割を捉える調査活動を行う

1月 「みんなに伝えよう」

ポスターの作成、発信・広報活動を行う

Supporters

地域の老人クラブ、
津山町木工芸品事業
協同組合、
宮城教育大学環境教育
実践研究センター、
地域の方、保護者

保護者・ 地域の 声

学校の教育活動には日頃から協力しているが、今回の新たなESD活動を通じて学校に対する理解や信頼がより深まった。



プロジェクト経費の使いみち

馬籠の森と林▶▶ 講師謝礼、バス借り上げ代、発表会・研究会の文具費、広報用ポスターの印刷費

その他のActivity

みんなの馬籠川▶▶ 校外学習バス借り上げ代

つぶやき・想い

「地域高齢者からの温かい気持ち」

自分の孫のように色々聴いてくれて、とても楽しく和やかに参加いたしました。

Data 宮城県気仙沼市立馬籠小学校

学校長	すとうかつこ 須藤勝子
所在地	〒988-0364 <small>みやぎけん けせんぬまし もとよしちょう こがねやま</small> 宮城県気仙沼市本吉町小金山 1-1
TEL	0226-43-2222
FAX	0226-43-2223
E-MAIL	magome@motoyoshi.ed.jp
HP	http://www.motoyoshi.ed.jp/magome-sho/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年7月
プロジェクト担当教員	<small>よこやませいいち</small> 横山清一

子どもの心を動かす 環境教育とESD

仙台市の東端にあり、南に七北田川、東に蒲生干潟と豊かな自然に囲まれた仙台市立中野小学校。この素晴らしい自然環境と五感を働かせて学んだ体験学習で、「比較・分類・関連付け・類推」といったものの見方を総合的に活用し、言葉で伝える力が身につくよう授業実践を通じて環境教育に取り組む。「コアジサシ」を学校のシンボルバードとし、児童は干潟でのバードスタディに親しみを持っている。



Activity バードスタディ・観察カード制作

1-6年生
155人

学区の蒲生干潟にて年に2回、全校児童が季節の野鳥を観察する。七北田川や蒲生干潟など地域の自然に愛着を持たせるための活動。「水辺の鳥」という冊子を使用した。実際の観察、写真を日常的に見られるように、学生ボランティアの協力で観察カードを作成した。

Supporters

環境省、
地域の科学館、
学生ボランティア

5月 春のバードスタディ

11月 秋のバードスタディ

杉の子文集・観察カード作成

12月 1年間の学習成果を学校文集にする
蒲生干潟で見られる野鳥の写真をカードにして全校に配布

担当教員の 声

環境学習で児童に地域の環境に目を向けさせた。野鳥や水生生物の調べ学習で、未来に残したい環境について考えさせた。



蒲生干潟にてバードスタディ



つがやき・想い

「大好き! 蒲生干潟」

観察をしていると環境省の人が「めずらしい鳥がいるよ」と教えてくれました。鳥の名前は「ミヤコドリ」でくちばしは赤く、体は黒かったです。初めて見た鳥でとてもきれいな鳥だと思いました。本当にうれしくて、蒲生干潟がまた好きになりました。

プロジェクト経費の使いみち

バードスタディ・観察カード制作▶▶ 観察カードを作成する印刷費

その他のActivity

クリーン蒲生・子ども環境実践発表会▶▶ バス借り上げ代



Data 宮城県仙台市立中野小学校

学校長	いとうこういち 伊藤公一
所在地	〒983-0013 みやぎけんせんたいしみやぎのくなかのあざにしはら 宮城県仙台市宮城野区中野字西原152
TEL	022-258-2365
FAX	022-258-6813
E-MAIL	nakano@sendai-c.ed.jp
HP	http://www.sendai-c.ed.jp/~nakano/
ユネスコスクール 加盟時期	2008年10月
プロジェクト担当教員	まつしたたけし 松下武士

小学校低学年からの 防災意識を育む 実践事例の研究と創造

宮城県沖地震が取り大きく上げられる中、小学生段階から自分自身で身を守る意識を高めておく必要がある。人・社会・自然に働きかけながら横断的・総合的・探求的に学び、自分らしく生きる豊かな人間性を育みながら防災について学ぶことを目的とする。



Activity 防災マップづくり

5年生
143人

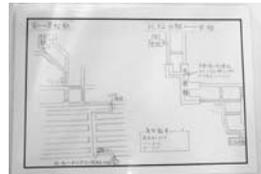
防災教育は3年生から6年生まで体系的に取り組んでおり、5年生では身近に起こった地震の学習から防災マップを作成する。講師から体験談を聞き、地震の恐ろしさや防災の必要性に気づかせる授業を設定する。第2回ユネスコスクール全国大会“サイドイベント・防災”にて公開授業とした。

Supporters

宮城県栗原市
総務部危機管理室、
公開授業参会者、
地域新聞社

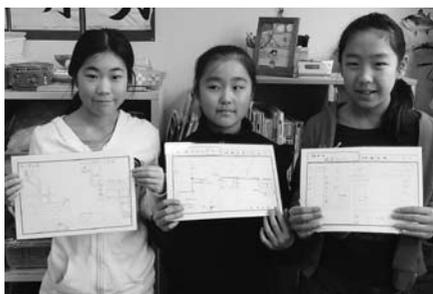
10月 4年生までの防災学習を振り返り、講師の体験談を聞く

11月 防災マップ作成



担当教員の 声

児童それぞれが住んでいる地域を想定することで、地域や家庭に目を向ける良いきっかけにもなっている。また3年生からの積み上げの大切さも感じる。



プロジェクト経費の使いみち

防災マップづくり▶▶講師謝礼、マップ作成費

つがやき・想い

「活動の広報について」

本校のESD活動は新聞社と連携し地域社会へアピールしている。新聞社と提携し学校の取り組みを発信し、地域に広く受け入れてもらい、地域のすべきことを真剣に考える社会作りまで発展しなければ、今までの学校教育と何ら変わらないということが見えてきた。

Data 宮城教育大学附属小学校

学校長	<small>いけやまたけし</small> 池山剛
所在地	〒980-0011 <small>みやぎけんせんたいしあおばくかみすぎ</small> 宮城県仙台市青葉区上杉6-4-1
TEL	022-234-0318
FAX	022-234-0303
E-MAIL	kansou@fu-syou.miyakyo-u.ac.jp
HP	http://fu-syou.miyakyo-u.ac.jp
ユネスコスクール 加盟時期	2007年10月
プロジェクト担当教員	<small>きのしんや</small> 佐野真哉

笑顔いっぱい、 夢いっぱい、 元気いっぱい

「笑顔いっぱい、夢いっぱい、元気いっぱい」という開校以来のスローガンのもと、共生を目指し将来にわたって持続可能な社会形成ができる人間育成に重点を置く。大切な日本文化「MOTTAINAI」の精神風土を醸成させ、省エネや循環型社会に関心を持たせ、地球に住む一員としての意識づくりを実践していく。

Activity エコランタン・ページェント

1-6年生
383人

空き缶を利用しての手作りのランタンやエコキャンドルを作成し、地域の協力のもと時間を決めて消灯し一斉にろうそくに火をともし。電気エネルギーを使わない生活を体験させるとともに、再利用や省エネ、CO2の排出削減について考えさせる。

12月 全学年各学級でエコについて考える
エコランタン作り(3-6年生)、エコキャンドル作り(1-2年生)

1月 エコランタン・ページェント
6年生による「エコランタン・ページェント」ミニコンサート

Supporters

町の生涯学習課、
協業組合「富谷環境」、
町内会、地域の方、
保護者



エコランタン・ページェント

担当教員の 声

この活動を地域に発信することで、家庭生活での再利用、省エネの取り組みを考える機会となったようである。



Activity ESD 講習会

教職員
20人

ESD教育推進のためユネスコスクールに登録、「学校&みんなのESDプロジェクト」委託校になっての本格的な職員研修。宮城教育大学より講師を招き講義を受ける。

9月

宮城教育大学にて2名の講師より、ESD活動に関する講義、バタフライガーデンについての講義を受ける

10月

バタフライガーデンの設計の仕方について講義

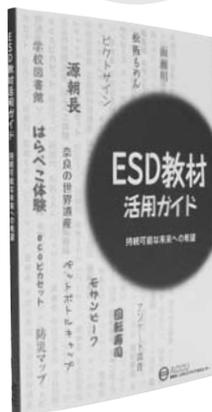
担当教員の
声

全職員が共通理解のもと、ESDに取り組んでいこうとする良い機会となった。

『ESD教材活用ガイド』を用いて講義が行われた

Supporters

宮城教育大学講師



つばやき・想い

「ランタン・ページェントの
ぽかぽか」

学校のランタンは、とってもきれいで、
外は寒かったのにすごく暖かい感じ
で心がぽかぽかになりました。



「感謝の気持ちを表そう」活動にて

プロジェクト経費の使いみち

エコランタン・ページェント▶▶ 講師
謝礼

ESD講習会▶▶ 講師謝礼・旅費、教職
員旅費

その他のActivity

3R(リユース、リデュース、リサイク
ル)▶▶ー

だめだっちゃ温暖化▶▶ー

ようこそ日吉台小へ▶▶ー

みんなのために(EM菌の培養と活
用)▶▶ー

ゆめのもりに蝶を呼ぼう▶▶ 苗木・肥
料代

第2回ユネスコスクール全国大会参
加▶▶ 教員参加旅費

感謝の気持ちを表そう▶▶ー

エコクッキング▶▶ー

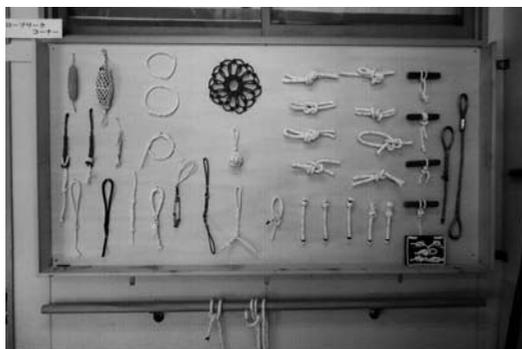
明かりをつけよう▶▶ー

Data 宮城県富谷町立日吉台小学校

学校長	さとうかずひろ 佐藤和宏
所在地	〒981-3362 みやぎけんくろかわぐんとみやまひよしだい 宮城県黒川郡富谷町日吉台 1-13-1
TEL	022-358-1486
FAX	022-358-0614
E-MAIL	hiyoshisyou@hello.odn.ne.jp
HP	http://www.town.tomiya.miyagi.jp/html/school/ ele_scl_hiyosidai/ele_scl_hiyosidai_index2.htm
ユネスコスクール 加盟時期	2010年3月
プロジェクト担当教員	あとべひでゆき 跡部英行

ホタテ貝の養殖体験活動 を通じた海洋環境学習

気仙沼市立大島中学校は気仙沼湾内の離島に位置している。海洋と関わる生活が色濃く根付いている地域である。総合的な学習の時間を使い島内で盛んな養殖業を体験させ、地域の海洋環境・産業・海洋文化について広く学び、持続発展的な社会のあり方を見つめさせている。



地元の漁師が作ったロープワークのボード。これを参考に下のバーで練習する

Activity

ホタテ貝の養殖体験活動を通じた
海洋環境学習

1-3年生
88人

平成17年度から取り組むホタテ貝の養殖体験と環境学習の拠点作り。活動の様子をパネル展示し、道具の模型や作業体験コーナー、記録の展示を行い、活動紹介パンフレットを配布。

体験活動と環境学習のデータベースとして資料室を設置

10月

資料室の内容構成、そのレイアウト・展示物品の作成

担当教員の 声

展示室を作ることで作業の追体験ができた。学習の流れを感じ取りながら今後の地域のあるべき姿や環境保全へのアプローチにまで発展させたい。

Supporters

大島観光協会等
関係団体、
ホタテ支援員、
ホタテ貝購入者、
体験学習施設来訪者



出荷にあたっての箱づめ作業

Activity ホタテ貝の養殖体験学習

1年生
31人

地域全体を対象とした環境講座から、養殖・海浜・海洋へと発展させて学習する。地域の漁業者の支援のもと、幼生の着床から中間生成・管理、販売までの養殖における工程を体験する。

Supporters

地域漁業者、
養殖従業者、
遠洋漁業者OB組織、
地域産業従業者

11月

稚貝の選別、中間育成のための耳吊り、筏への
耳吊りロープ垂下の3工程を行う
総合学習支援員による養殖の講話
養殖作業でのロープ結索技能の講習会

担当教員の 声

地域産業従業者の直接指導は経験と知識に裏打ちされ、養殖という持続型産業を取り巻く環境へのスタンスはESDに繋がるものであり、そのための環境保全活動に主体的に取り組んでいきたい。



稚貝の選別



活動の様子をパネル展示



つぶやき・想い

「地域と地場産業とESDの
つながり」

地域漁業者の支援は年々広がり組織的に支えていただけることで、第一次産業の生産現場と日常を関連づけた「生きる力」を育む軸が出来ました。

プロジェクト経費の使いみち

ホタテ貝の養殖体験活動を通した海洋環境学習▶▶展示室作成費

ホタテ貝の養殖体験学習▶▶—

Data 宮城県気仙沼市立大島中学校

学校長	おの でのらゆういち 小野寺有一
所在地	〒988-0613 みやぎけん けせんぬま したかい 宮城県気仙沼市高井40番
TEL	0226-28-2610
FAX	0226-28-3255
E-MAIL	osim-t5@k-macs.ne.jp
HP	—
ユネスコスクール 加盟時期	2009年10月
プロジェクト担当教員	きく たひし 菊田斉 [担当教科: 国語]

社会人・海外の人から生き方を学ぼう

これからの社会を生きる生徒達に、社会科・英語科・総合的な学習の時間を核として、様々な交流を基に自分の夢を実現する方法に真剣に向き合わせる。異なった文化や考え方・価値観に触れ、相手を受容する態度や自己を理解する能力を高める。また、情報収集・分析能力や自己表現の能力を高め、生徒達の学校生活や人生に反映させる。



Activity 生き方セミナー

1-3年生
64人

「心理的競技能力診断テスト」で自己精神面を知り、講話や体験を通して日常生活を見直し前向きに自己鍛錬をする方法を学ぶ。スコットランド人ALTとジンジャークッキー作りをし、小さな文化の違いから国際理解への一歩を踏み出す。JICAから講師を招き講話を受け、国際的に活躍する人から自分自身の生き方を考える。

12月

大阪より講師を招き、セルフトークや呼吸法について受講
英語によるALTとの母国のおやつ作り

2月

国境を越えて活動している人の体験を聞き、その生き方を学ぶ

担当教員の声

メンタルトレーニングでは、自己を知りコントロールすることを学んだ。日常に応用でき、素直に自己を表現する力や前向きに生きていく方法を学んだと思う。

Supporters

スポーツメンタル
トレーニング指導士、
ALT、JICA



ALTとのおやつ作り



Activity 福祉体験学習

1-3年生
64人

視覚障害者の講話、盲導犬とのふれあい、白杖体験を行い、障害者の大変さ・怖さ、盲導犬の意義等を肌で感じる。まとめ学習で日本盲導犬協会制作のDVDを鑑賞し、感想を書く。

9月

盲導犬協会より盲導犬トレーナー・視覚障害者・盲導犬を招き、講話・体験学習を行う

Supporters

盲導犬協会、
視覚障害者の方、
手話協会

担当教員の 声

この他に点字体験・手話体験学習を行っている。これら

の学習を通して福祉の心を育てることが出来たと思う。



盲導犬と体験学習

つばやき・想い

「次回の取り組みへの課題」

今年度初めてESD活動に参加したこともあり、学内での活動にとどまってしまう。来年度は保護者や地域を意識して、広く地域へ働きかけ計画的に活動を進めていきます。

プロジェクト経費の使いみち

生き方セミナー▶講師謝礼・旅費、
寄付金、調理実習材料費、文具費

福祉体験学習▶文具費



生き方セミナーでの講話

Data 宮城県白石市立南中学校

学校長	すがわら よひと 菅原誉人
所在地	〒989-0112 みやぎけんしろいししこすごうたけらあざへいごう 宮城県白石市越河平字平合 23 番 1
TEL	0224-28-2013
FAX	0224-28-2016
E-MAIL	chief@sirominami-j.myswan.ne.jp
HP	http://www.shirominami-j.myswan.ne.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年7月
プロジェクト担当教員	さいく みこ 齋久美子 [担当教科: 国語]

人とのつながりの大切さ

今回の活動を通して、一番に感じたことは人とのつながりの大切さだった。私自身、口では簡単に人とのつながりが大切だと言い、子供たちにも話したりする。しかしながら、今回、プロジェクト協力校となり、改めてそれを心から実感させられた。校内の先生方の協力はもとより、地域の方々、その道の専門家の協力なしには成し遂げられなかったものばかりである。

Activity「エコランタン・ページェント」では、協業組合富谷環境の堀籠太一氏のご協力、ご支援がなければ成し得なかった活動である。回収してきた廃材（空き缶、ろうそく、デザートのカップ等）を利用し、長年地域のイベントを盛り上げてきた方である。この活動を通して、子供からは地球にやさしい生活を送っていきたい、という声があがった。

ESD活動を継続していけば、もっともっと、こちらが満足できる成果が現れるだろうと思う。とはいえ、一番学習し、そして、身に付けたものが多かったのは、主担当である私自身である。

宮城県富谷町立日吉台小学校 跡部英行



仙台二華のIS・SR

中高
貴校

主に中学1年から高校2年までの総合的な学習の時間で、地球環境をテーマにIS (international study) とSR (scientific research) を実施している。ISでは外部講師を招きゼミ形式で異文化や国際協力への理解を深め、SRでは山海でのフィールドワークを積極的に行っている。同時にユネスコスクールとしての自覚を持ち、これらの活動を学校内外の人に紹介し、生徒・保護者、教職員のESDへの関心を高め、理解を深めることが目的である。



Activity

仙台二華のIS・SRを紹介する
パンフレットづくり

中1、高1、教職員、周辺小学校
校内1000、校外500

IS・SR活動を学校内外に発信するためにパンフレットを作成する。各学年の持つESD関連行事の情報を各学年間で共有し、情報共有を踏まえて学内での意識調査やメッセージ発信をする。近隣の小・中学校にパンフレットを配布し、本校ESD活動への理解を広め、興味関心を深めていく。

Supporters

近隣小・中学校、
地域の方

10月 原稿募集成作

11月 生徒意識調査実施・集計

12月 パンフレット詳細編集・発注

1月 発行・配布

プロジェクト経費の使いみち

仙台二華のIS・SRを紹介するパンフレットづくり▶▶紹介パンフレットの印刷費

つぶやき・想い

「教員間の意見すり合わせ」

パンフレット作成で多くの教科の教員に校正してもらったため、教員間でのISやSRの意見すり合わせをする良い機会となりました。

担当教員の 声

全校生徒に向けた標語の募集と発表をこのパンフレットで行えれば、生徒自身が学んだことを実際の行動に移すきっかけを作ることも出来たと思う。

未来の地球、 今私たちに できること

環境教育の柱を「連携」と「発信」とし、環境教育を通して現在そして未来の自分と地球環境を学習する。外部団体との連携や交流から将来の自分を考え、今できることを学び持続可能な社会の構築のために行動できる生徒の育成を目指す。



Activity

学校祭環境ブース、オフセットカフェ運営

1-3年生
118人

学校祭でこれまでの環境学習の成果を展示し、ESD活動を広く発信する。自転車発電装置や燃料電池、手回し発電装置を設置し、来場者が体験できる工夫をする。同時にNGO法人RACICAと連携し、「オフセットカフェ*」を運営。コーヒー一杯で30グラムのCO₂削減にもなることを説明して販売した。

*オフセットカフェとは、フェアトレードコーヒーを販売し、収益金を途上国の発展に寄附するもの

Supporters

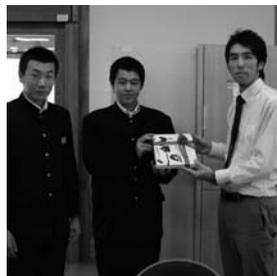
ひのでや
エコライフ研究所、
NGO法人RACICA

11月

生徒会主体で学校祭「環境ブース」を設置・
運営
オフセットカフェの運営

担当教員の 声

オフセットカフェでは5000円の収益を出してNGO法人RACICAに寄贈した。環境教育と国際理解教育を連携させた取り組みとなった。



オフセットカフェの収益を寄附



Activity

国際理解から環境を考えるワークショップ

3年生
43人

ユネスコスクールである秋田市立秋田商業高等学校の生徒11名が来校し「富の格差」「水の格差」（オリジナル）というワークショップを中学3年生43名対象に行う。国際理解に力を入れる秋田商業高校と環境教育に力を入れる大曲南中学校との連携となる。

Supporters

秋田商業高校、
秋田県地球温暖化
防止活動推進
センター

11月 秋田商業高校との連携でワークショップを行う

担当教員の 声

秋田商業高校とはお互いにESDを深めていこうという意図での開催であった。別の月にも交流会を開き、今後も連携を深めESDに取り組んで生きたいと考えている。



ワークショップの様子

つばやき・想い

「ESD活動の実践を通して」

環境教育からスタートした本校ですが、ESDを実践していくと環境教育＝ESDではなく、国際理解やエネルギー等も学ぶ必要を感じました。



小学生対象環境講座にて

プロジェクト経費の使いみち

学校祭環境ブース、オフセットカフェ運営▶▶展示物・掲示物作成費、借用物送料

国際理解から環境を考えるワークショップ▶▶—

その他のActivity

ユネスコスクール研修会 in 秋田▶▶—

ユネスコスクール全国大会参加▶▶教員旅費

全国小中学校環境教育研究大会▶▶教員旅費

大曲南地区オープンスクール▶▶講師謝礼・旅費、AV記録メディア、文具費

Data 秋田県大仙市立大曲南中学校

学校長	くろたきよし 黒田清志
所在地	〒014-1412 <small>あきたけんたいせんしふじきあざかみのなか</small> 秋田県大仙市藤木字上野中70-2
TEL	0187-65-2001
FAX	0187-65-2051
E-MAIL	om-minamityu@edu.city.daisen.akita.jp
HP	http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~om-minamityu/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年10月
プロジェクト担当教員	<small>しまださとる</small> 島田智 [担当教科:理科]



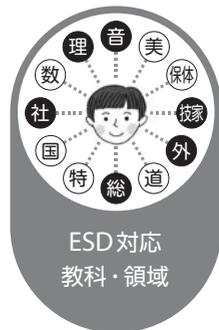
ESD 実践事例 48

関東

- 15 埼玉県越谷市立富士中学校
- 16 国際学院高等学校
- 17 千葉県市川市立稲越小学校
- 18 市原中央高等学校
- 19 千葉県立市川西高等学校
- 20 東京都江東区立東雲小学校
- 21 東京都渋谷教育学園渋谷中学高等学校
- 22 神奈川県立有馬高等学校

教育課程におけるESD位置付けと ユーラシアESDネットワーク 構築に向けた取り組み

越谷市立富士中学校ではE-cubeという独自の持続発展教育活動と部活動を中心にESDを進めてきたが、現在は更に各教科・領域での具体的なESD活動への取り組み、ESD観点を盛り込んだ教育計画の作成に取り組んでいる。その成果を日本のESD実現に役立てたいと考える。



Activity 絶滅危惧生物の保護と再生

1-3年生
70人

持続発展教育で重要な課題の1つ、持続可能な未来を実現するための実践力を育成する。E-cubeを中心に越谷市に自生する希少生物「キタミソウ」とかつては越谷市にも自生しており、野生絶滅状態の「コシガヤホシクサ」の生体調査、保護・増殖、再生活動を通し、生物多様性の保全活動を行う。

Supporters

地域の保全活動関係者

4-3月

キタミソウ・コシガヤホシクサなどの絶滅危惧種の保護と増殖

担当教員の 声

市レベルではESDの知識や概念が十分に浸透していないため協力を得るのは困難であった。早急な対応を必要と感じる。県の対応は、文科省からESDの取り組みへの具体的な指示が出ていたため変化が見られた。



全滅危惧種キタミソウの生態調査の様子



野生絶滅種コシガヤホシクサの保護増殖の様子

Activity ESDを学習目標に加えた授業実践

1-2年生
200人

23年前より環境教育・持続可能性の実現のESD視点を加えた年間指導計画作成と授業を行っている。1年生は植物の生活・日常の物理現象・地震の学習を中心に、2年生は動物の生活・物質と原子分子・気象を中心に、多様性生物の保全・地球環境・エネルギーの活用等ESD視点を加え学習する。

4-3月

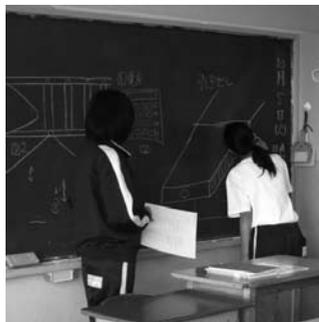
理科教育におけるESDの観点を加えた授業実践

担当教員の
声

ESDにおいて最も重要なことは知識の習得ではなく、知識を持続可能性のために具体的にどう使っていくかを考えさせることである。従ってESD実践は常に実用的なものでなければならない。

Supporters

理科教育関係者



「エネルギー資源教育」の授業風景

15

埼玉県越谷市立富士中学校

つばやき・想い

「生徒・保護者と教職員の
ESD 認識の較差」

持続発展教育への生徒・保護者の
認識は想像以上に高まっています。
ESDを進めるためには、実際に担う
教職員教育に力を注がなければなら
ないと感じております。



植樹活動「グリーンウェーブ
プロジェクト2010」に参加

プロジェクト経費の使いみち

絶滅危惧生物の保護と再生▶▶—

ESDを学習目標に加えた授業実践
▶▶—

その他のActivity

GLOBEプログラム▶▶生徒参加旅費

植樹活動▶▶—

ユーラシアESDネットワークの構築
▶▶—

環境教育カリキュラム研究会議参加
▶▶教員参加旅費

Data 埼玉県越谷市立富士中学校

学校長	すずき ひで き 鈴木秀希
所在地	〒343-0851 さいたまけんこしがや ししち ぎちよう 埼玉県越谷市七左町2-85
TEL	048-966-0317
FAX	048-966-0836
E-MAIL	fuji-j2@school.city.koshigaya.saitama.jp
HP	http://school.city.koshigaya.saitama.jp/fuji-j/
ユネスコスクール 加盟時期	2006年2月
プロジェクト担当教員	いいじま まこと 飯島真 [担当教科:理科]

多文化共生社会の 精神理解への取り組み

異文化の紹介・視察により、生徒に多文化共生社会の精神を理解させ、持続可能な共生社会の担い手を育成する。具体的にはカナダでの語学研修、帰国後の専門家による講義で多様な価値観を理解させ、将来多文化と触れ合う糸口をつかませるのが目的である。



Activity みんなの地球・共生社会

2年生
230人

多文化共生社会の精神を理解するため、カナダでの先住民との共生について講義を受講。

11月

国立民族博物館・岸上伸啓教授による「カナダにおける多文化共生について」の講義を受講
受講後にレポート提出

生徒の
声

カナダは既に、相手を尊重することで多文化社会を実現していることに感心しました。日本にもグローバル化に向けて多文化社会を築き上げる番が来ていると思います。

Supporters

国立民族博物館・
岸上伸啓教授





参加者が一同に会して記念撮影

Activity	第9回アジア・ヨーロッパクラスルームネットワーク会議参加	1-3年生 695人

第9回アジア・ヨーロッパクラスルームネットワーク会議に校長が参加し、その内容を全校集会で生徒たちに講話する。

- 11月 インド・デリー開催の第9回アジア・ヨーロッパクラスルームネットワーク会議に校長が参加
- 12月 全校集会にて校長より、多文化共生について会議から得た知見を講話

Supporters

第9回アジア・ヨーロッパクラスルームネットワーク会議関係者

先生の声

持続可能な社会の担い手へと成長するための、多文化共生の理解促進と共に、人間性の向上、他者や社会、自然環境との関係性の重要性を認識しながら、全校集会で生徒たちはメモを取り、興味深く聴講していた。



各国の参加者とともにプレゼンテーションに聞き入る

つぶやき・想い

「ある女子生徒の気づき」

将来自分に出来ることを考えたとき、
まず、知ることから始める必要がある
ということが分かりました。



プロジェクト経費の使いみち

みんなの地球・共生社会▶▶ 講師旅費・謝礼、レポート(冊子)印刷費

第9回アジア・ヨーロッパクラスルームネットワーク会議参加▶▶ インドへの旅費

その他のActivity

海外語学研修▶▶ —



海外語学研修にて、先住民の方と

Data 国際学院高等学校

学校長	おおの ひろゆき 大野博之
所在地	〒362-0806 さいたまけんきた あだちぐん い なまち こむろ 埼玉県北足立郡伊奈町小室 10474
TEL	048-721-5931
FAX	048-721-5903
E-MAIL	kghs@kgef.ac.jp
HP	http://www.kgef.ac.jp/kghs/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年7月
プロジェクト担当教員	おおの まんな 大野満奈 [担当教科:外国語(英語)]



Activity 先進校視察

教職員
4人

すでにユネスコスクールとして活動している他校の視察を学校の活動に役立てる。

10月

宮城県仙台市立七北田小学校 公開授業参加

11月

奈良教育大学附属中学校 公開授業参加

12月

大阪府松原市立恵我南小学校 インタビュー、ヒアリング
新潟県新潟市立新潟小学校 公開授業参加

担当教員の声

本校は小規模校のため出張研修が難しく、校内だけでは外部からの刺激が少ない。これを機に視野を広め、児童への学習に役立てたい。

先進校の取り組みから学べるポイントを要約し、教職員に共有

Supporters

各視察学校



つばやき・想い

「6年女子の達成感」

ひばりまつりが成功できたのは、周りの支えや協力があつたからだと思います。チーム全員で協力して大きな喜びが生まれたので、とってもうれしいです。協力する心はとってもすてきだと思いました。



足踏み脱穀機を使って、地域の方から脱穀作業を教わる

プロジェクト経費の使いみち

縦割り活動“ひばりまつり”▶▶案内状送付のための郵送費

先進校視察▶▶先進校への旅費

その他のActivity

全校歩き遠足、バス遠足▶▶—

給食残菜率8%以下を目指して▶▶—

地域ふれあい写真展▶▶写真印刷費

地域安全確認大作戦▶▶お礼状送付のための郵送費

米から広がる世界▶▶—

学校環境整備▶▶掲示のための文具費

障害を持つ児童との交流、地域との交流▶▶—

天体観望会▶▶講師謝礼

ともだちいっぱい名人テスト▶▶—

Data 千葉県市川市立稲越小学校

学校長	ほんだ なりひと 本多成人
所在地	〒272-0831 千葉県市川市稲越町518-2
TEL	047-373-8401
FAX	047-373-8402
E-MAIL	work2-inagoshi@ichikawa-school.ed.jp
HP	http://www.inagoshi-syo.ichikawa-school.ed.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年7月
プロジェクト担当教員	いわはしいくろう 岩橋郁郎

身近なマンガでESDを推進

国連ESDの10年の真ん中だというのに「ESD」という言葉を知っている、あるいは、説明できる人はほとんどいません。ESDを推進してきた本校の生徒達もそれは同じでした。ESDの主人公である彼らが見て、すぐ理解できるものはどこにもありませんでした。そこで作成したのがマンガ『ぐるぐる～ESDって何?』です。(Activity「ESD普及のための書籍づくり」)

理解し易く親しみ易いので手にした途端に読み始める。また読めば印象がいつまでも残る。これによりESDが自然に意識され行動も変わっていく。そう考えてマンガという形をとりました。生徒たちが最初に言った感想は「面白かった」です。このマンガを読んだ後は、同じテーマで授業をしても明らかに聞き方が変わりました。

年齢国籍に関係なくESDのことを理解してもらえる作品ができたので、できるだけ多くの人に読んでもらい、このマンガに描かれている理想を現実化するためにともに頑張っていきたいと思います。

渋谷教育学園渋谷中学高等学校 北原隆志



英語ガイドマップで 地域交流

千葉県市原市には5200人の外国人が住んでおり、国際交流協会などを中心に様々な国際交流事業が行われている。しかし、町をより良く知るための観光名所などが載ったガイドマップがあまりない。そこで「実際の英語運用能力の育成」と「異文化理解の修得」を目指す英語コースを対象に、「英語ガイドマップ」の作成に取り組む。地域との交流を視野に入れながら現場取材から編集・配布まで、すべて学生が主体となって行う。



Activity 英語ガイドマップ作成・配布

1-2年生、英語科、英語クラブ
26人

英語学習に力を入れている英語コースの授業の一環として、「英語ガイドマップ」の作成を行う。周辺地域への取材、英文での記事編集・校正は英語学習だけでなく、学校周辺地域への関心・理解を深め、更には地域の方との交流を通じて自己確立の一助となる。

11月 外国人講師を交えて掲載記事についての会議
取材と英文原稿作成

12月 15名の生徒を4グループに分け現地取材、英文原稿作成

外国人講師、留学生を交えて英文チェック
1月 コミュニティ新聞社の協力で紙面校正印刷後、市内各所に配布

Supporters

市原市国際交流協会、
コミュニティ新聞、
市の公共施設及び駅、
ロータリークラブ、市の観光部署、
観光協会、地域在住の外国人、
市内中学校、外国人講師、
留学生、地域の方

担当教員の 声

市内各所に配布する印刷物のため、記事や写真の掲載許可を一つ一つの団体から取ることは多くの時間を要したが、そのための訪問活動によって活動への深い理解、積極的な協力を受ける機会となった。

プロジェクト経費の使いみち

英語ガイドマップ作成・配布▶▶ガイドマップの印刷費



英文をチェックし、より簡潔で分かりやすい英語表現について検討中

つばやき・想い

「受験勉強から地域貢献へ」

普段は受験を意識して勉強している英語が、地域社会で役に立つことを実感しました。今後も同じような活動に参加していきたいです。



グループごとにできあがった校正を確認

Data 市原中央高等学校

学校長	まいたます お 真板益夫
所在地	〒290-0215 ちばけんいちほらしつちう 千葉県市原市土宇1481-1
TEL	0436-36-7131
FAX	0436-36-7141
E-MAIL	i-chuo@ny.airnet.ne.jp
HP	http://www.kimigaku.ed.jp/ich/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年7月
プロジェクト担当教員	きしまゆついち 木嶋勇一 [担当教科:外国語(英語)]

外国から見たニッポン

アジア諸国からの留学生を招き、シンポジウムを行う。日本の若者文化や生活様式が、アジア諸国の同世代はどのように見ているのかを知る機会とする。また留学生が自国紹介をし、異文化理解の促進と地球規模の共生について考える一助とする。近隣中学や県内の高校に広報し、ESD教育の周知、活動の参加と理解を図る。



Activity

異文化理解のためのパネルディスカッション

1-2年生
320人

近在の大学や専門学校より10数名の留学生を招き、本校代表生徒とともに「外国から見たニッポン」をテーマにディスカッションを行う。文化の違いを理解するとともに、アジア各国の正しい知識修得、「アジアの中の日本」の意識、討論から相互理解と伝達能力の伸長を図る、また、これまでのESD活動を様々な方法で広報し理解を深めていく。

近隣小中学校や県教育委員会などに広報、ディスカッションへの参観を募る

12月

パネリストの選出

留学生と情報交換をし、ディスカッションのテーマについて質問を募る

寄せられた質問からテーマにあったものを抽出し、回答のための調べ学習を行う

留学生パネリストの出身国の位置・人口・面積・政治経済状況・教育事情・言語を調べる
ディスカッション終了後の交流会について、運営方法を話し合う

1月

ディスカッション本番と放課後にフリートーク形式の意見交換会を行う

Supporters

県教育委員会、
市川市ユネスコ協会、
市教委生涯学習課、
近隣小中学校、
都内日本語学校、
各国留学生、専門講師

担当教員の
声

生徒の語学力には幅があり当初は日本語が話せる外国人の

講演を考えたが、より多くの生徒の参画意識を望みディスカッション形式とした。年齢が近い方が意識も高まると考え、都内日本語学校のアジア留学生をパネリストとした。



プロジェクト経費の使いみち

異文化理解のためのパネルディスカッション▶▶講師謝礼・旅費、配布資料の印刷費、文具費

つぶやき・想い

「学校統合後の意識・意欲」
23年度に学校統合が決まっているが、新しい学校に生まれ変わってからも、このディスカッションを糸口にしたユネスコスクールの活動を活性化させていきたいです。

Data 千葉県立市川西高等学校

学校長	<small>さいとうたかし</small> 齊藤 孝
所在地	〒272-0833 <small>ちばけんいちかわしひがしこくぶん</small> 千葉県市川市東国分1-1-1
TEL	047-371-2841
FAX	047-373-2360
E-MAIL	ichikawanishi-h@chiba-c.ed.jp
HP	http://www.chiba-c.ed.jp/ichikawanishi-h/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年7月
プロジェクト担当教員	<small>おかだよしや</small> 岡田 佳也

いのちかがやけ

～ユニセフミュージアムへようこそ～

「いのち」の大切さを実感し、一人ひとりが人間として個性的・主体的に生きる意味を考え、深めることで人権・民主主義の理解促進を促す。そのためにユニセフについて学習する。ユニセフハウス見学や調べ学習からユニセフの活動を理解し、世界の現状を知る。そこから地球規模の問題への国際システムを学び、日常生活や命の学習へ繋げる。「生きる」「いのち」を深く考え、「いのち」の大切さを実感し相手の思いを受けながら聞く体験を通して互いを大切にする心情を育成する。



Activity ユニセフについて学び発表する

5年生
74人

4年生で世界遺産や地球環境を学習したことを生かし、5年生では世界の「人」、特に同世代の子どもに焦点をあて現状を学ぶ。この問題に取り組むユニセフについて活動の調べ学習・報告交流会、ユニセフハウス見学を行う。学習内容を全校に発信し、ユニセフ募金を呼びかける。

10月 ユニセフについて調べ学習

調べたことを発表

「保健・栄養・水・教育・困難な状況にある子どもの保護・緊急支援」から課題を見つける

11月

テーマごとにグループをつくり、各自で調べ学習、発表

ユニセフハウス見学

12月

ユニセフ集会で発表

全校集会でユニセフについて発表、募金の呼びかけ

1月

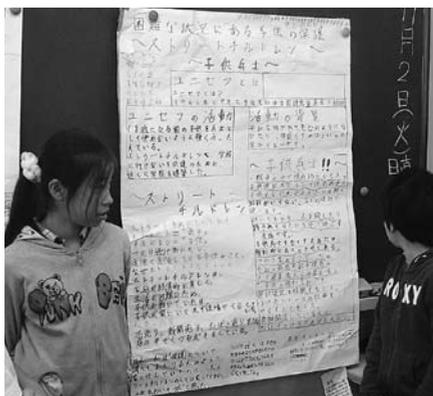
「東雲フェスティバル」でユニセフミュージアムを作り、来場者に発表

Supporters

ユニセフ、
ユニセフハウス、
東雲フェスティバル
来場者、
地域の方

児童の
声

ユニセフハウスの見学では、現地の子どもが使っている薬やビン、実際の教科書や住んでいる TENT などを見学し、調べ学習では分からなかったことまで理解できた。



グループで調べたことを発表

プロジェクト経費の使いみち

ユニセフについて学び発表する▶▶
バス借り上げ代

つがやき・想い

「ユネスコスクールへの深まる
理解をこれからに」

ユネスコスクールならではの国際システム理解が本活動を通し深まっています。総合的な学習の時間・生活科学学習と他教科・領域とのリンクを更に検討し、深めていきたいです。

Data 東京都江東区立東雲小学校

学校長	きみつかきよはる 君塚清春
所在地	〒135-0062 とうきょうとこうとうくしのめ 東京都江東区東雲2-4-11
TEL	03-3529-1451
FAX	03-3528-1768
E-MAIL	shinonome-st@mx.koto.ed.jp
HP	http://www.koto.ed.jp/shinonome-sho
ユネスコスクール 加盟時期	2006年2月
プロジェクト担当教員	ひろせしゅうや 廣瀬修也

ESD 普及のための 書籍づくり

「ESDとは何か、それが目指すものは何か」を明確にし、生徒・職員の共通認識とし、今まで以上に積極的な取り組みを促進させることを目的とする。各教科や校外研修、生徒会でのESD活動などの際にその方向性を分かりやすく示す本があれば、活動は個々であっても共通の目標に向かっていくと考え『ESDまんがぐるぐる』を作成、配布しESDの浸透・普及活動を行う。



Activity ESD 普及のための書籍づくり

中学1年生-高校3年生
1236人

『ESDまんがぐるぐる』を作成し、ESDの大きなゴールを「全人類が幸せに生きていくことができる新エコシステムの構築」と明確化する。また英語版を作成し世界への発信をしていく。浸透・普及活動と同時に、学校での様々な活動の意味を認識し取り組み方、行動や変化も視野に入れる。

『ESDまんがぐるぐる』日本語版を図書室のESDコーナーに設置

本校外国人数員、関連校教員の協力で『ぐるぐる』英語版を改訂

11月

ユネスコのボコバ事務局長来校、ESDについて世界遺産保存の観点からの演説を聴講『ぐるぐる』英語版草案をまとめ冊子にし、ボコバ事務局長に贈呈

『ぐるぐる』英語版を高校生に配布、意見・感想をもとに改訂版の作成開始
現代用語検定協会主催「第10回自己表現力コンクール」で『ぐるぐる』が大賞を受賞

12月

自己表現力コンクールホームページにESD普及の文章を寄稿

1月

『ぐるぐる』日本語版、英語版の原稿完成

Supporters

本校外国人数員、
関連高ブリティッシュ
スクールin東京教員、
ユネスコ・ボコバ事務局長

担当教員の 声

年齢国籍に関係なくESDを理解できる作品ができたので、より多くの人に読んでもらいマンガに描かれている理想の現実化に向けて頑張っていきたい。



つばやき・想い

「英語版を読んだハーバード大に進学した卒業生の反応」
 国際社会に貢献したいという気持ちが強烈になり勇気ができました。他の学生たちも感動していました。



プロジェクト経費の使いみち

ESD普及のための書籍づくり▶書籍作成費

Data 渋谷教育学園渋谷中学高等学校	
学校長	たむらてつお 田村哲夫
所在地	〒150-0002 とうきょうとしがや くしぶや 東京都渋谷区渋谷1-21-18
TEL	03-3400-6363
FAX	03-3486-1033
E-MAIL	webmaster@shibuya-shibuya-jh.ed.jp
HP	http://www.shibuya-shibuya-jh.ed.jp/
ユネスコスクール加盟時期	2009年10月
プロジェクト担当教員	きたはらりゅうじ 北原隆志 [担当教科:外国語(英語)]

21
 渋谷教育学園渋谷中学高等学校

国際理解教育の実践を通し 「持続可能な開発」を 考える

有馬高等学校には外国語コースがあり、在県外国籍生徒特別募集枠も設置され様々な国の生徒が学んでいる。国際理解教育にも積極的に取り組み、生徒一人ひとりが異文化社会への理解を深め、国際社会の一員として「持続可能な社会」の形成者として駆動できる力の推進を図る。同時に教職員もESDへの理解を深め、国際社会で生き抜く生徒の育成を図る。



Activity

外国語コース異文化交流体験授業

2年生
39人

外国語コースの生徒が英語を使って直接、同世代の外国人生徒との交流を通して会話し、外国の文化・社会を学び理解を深める。同時に日本文化を紹介し互いの国民に対する認識を身に付け、平和で安定した社会構築の一步を踏み出す。

Supporters

厚木YMCA日本語学校の
外国人生徒、講師

12月

厚木YMCA日本語学校所属の外国人生徒と講師を招き、出身国のゲームなどを行う
日本の文化を紹介する

担当教員の 声

当初は同世代の海外留学生を招いて授業を行う予定であったが、YMCAとの協議するうちにYMCAの授業プログラムが興味深いものであったためそのプログラムに沿って交流体験授業を行った。



外国人講師による異文化理解ワークショップ



韓国修学旅行の学校訪問で日本のゆかたを紹介

Activity

第2回ユネスコスクール全国大会での活動発表

1-2年生
80人

ユネスコスクール全国大会で実際に取り組んだ活動を報告する。

10月

ダブルネット推進ワークショップにて「たんぼ（稲作や農業の理解を深める活動）」、「寺子屋運動ポスター作成」のESD活動を発表

Supporters

ユネスコスクール
全国大会
大会事務局

生徒の 声

稲作を通して日本の農家の姿、食料の安定供給、世界の食料問題へと考えを広げ、食料供給に関わる持続可能な社会への形勢について考えることが出来た。



ユネスコスクール全国大会で総合学習「たんぼ」の取り組みを発表



異文化理解ワークショップ

つぶやき・想い

「発展的な新たな取り組み」

国際理解教育は以前から学校行事や教科学習に様々な角度で取り組んでいましたが、今回も従来の活動をベースに新しい試みを取り入れてみました。

プロジェクト経費の使いみち

外国語コース異文化交流体験授業

▶▶ 講師謝礼

第2回ユネスコスクール全国大会での活動発表 ▶▶ 参加教員の旅費

その他のActivity

世界寺子屋運動支援キャンペーン ▶▶
リーフレット作成費

Data 神奈川県立有馬高等学校

学校長	つのだ いっぺい 角田一平
所在地	〒243-0424 <small>かながわけん えび なししゃけ</small> 神奈川県海老名市社家240
TEL	046-238-1333
FAX	046-238-7980
E-MAIL	event-arima-h@pen-kanagawa.ed.jp
HP	http://www.arima-h.pen-kanagawa.ed.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2008年8月
プロジェクト担当教員	<small>もちつきひろあき</small> 望月浩明 [担当教科: 社会]

ESD 实践事例 48

北陸・中部

- 23 富山県富山市立寒江小学校
- 24 石川県金沢市立浅野川小学校
- 25 石川県金沢市立四十万小学校
- 26 石川県金沢市立西小学校
- 27 新潟県新潟市立巻東中学校
- 28 新潟県新潟市立白新中学校
- 29 新潟県立燕中等教育学校
- 30 名古屋大学教育学部附属中・高等学校



主体的に学び、 地域に働きかける子どもを 育成する持続発展教育

寒江地区の自然と社会、人、文化との関わりを深めることで郷土愛を育み、共生社会での実現を目指す担い手としての児童を育成する。各学年に合った内容の地域活動を行い、次学年へと繋がり発展していく教育活動を行う。5年生では多くの環境問題に対応し様々な環境活動がある中で、食環境を取り上げる。生活に直結した食環境の問題点を切り口に食育や世界の環境問題へと広げられる視野を育成する。

Activity

米作りから見つめよう！ わたしたちの
食環境～食の提案書をつくらう～

5年生
21人

地域の農家に協力いただき、米作りについての講話や作業見学を行う。バケツ稲栽培や校庭隅に作ったミニ田んぼでの土起こしから鳥害対策、収穫、精米作業を通して実感を伴う活動とする。また蛭の飼育や餅つき、縄ないでは地域の方や保護者の協力で行い、学校活動を発信する機会とする。



5月	地域農家の水田へ行き講話を聞き、質疑応答 代掻き前の田んぼ遊び 田植え見学、バケツ稲栽培に向けて種籾の芽出しを行う
6月	校庭隅にミニ田んぼを作成、代掻き後苗を植える 有機農家、農林振興センター職員、「自然農」専門家から講義を受ける 大豆を植える
6-8月	草取り、防虫、水の管理など必要な世話を行う
9月	鳥害対策、バケツ稲の稲刈り かかし作り
10月	田んぼの稲刈り ファミリーパークより蛭の幼虫を譲り受け、教室で飼育
10-11月	収穫した米の脱穀、粳すり、精米作業 大豆の収穫、脱穀、選別作業 きな粉作りを行う
12月	収穫したもち米での餅つき 収穫した米できな粉餅を食べる 藁を使つての縄ない体験活動、正月飾り作成 米作り体験を通して各自課題を設定し、調べ学習 学級内での発表会
1月	地域の方と味噌作り体験、自給率についての講義を受ける
2月	食環境について各自課題を設定し「食の提案書」を作る 保護者に向けて「食の提案書」発表会を行う



Supporters

地域農家、
農林振興センター、
「自然農」実践家、
ファミリーパーク、
地域の方、保護者

担任の 声

「田んぼで遊ぶ」「自分たちで田んぼを作る」という体を使った活動は、児童を大変意欲的に取り組ませ、問題意識・探究意欲を生み出した。

その結果「安全・安心な米作り」「生き物が安心して暮らせる田んぼ作り」といった必要感や切実感を持って活動を進められた。

つぶやき・想い

「家庭への影響」

自分たちの手で米作りをしたおかげで、お茶碗についた米粒をきれいに食べるようになりました。食べ物の大切さを実感しているようです。

プロジェクト経費の使いみち

米作りから見つめよう！ わたしたちの食環境～食の提案書をつくらう～
▶▶ 虫飼育費、掲示物作成のための文具費

その他のActivity

さむえとなかよしだいさくせん▶▶—

さむえのすてき見つけ隊▶▶—

寒江・人じまん▶▶—

デイケアハウスの利用者さんと交流しよう▶▶—

挑戦！ よりよい寒江のふるさとづくり▶▶—

Data 富山県富山市立寒江小学校

学校長	やまとしげる 山本茂
所在地	〒930-0108 <small>とやまけん とやまし ほんごうちゅうぶ</small> 富山県富山市本郷中部427
TEL	076-436-5594
FAX	076-436-2629
E-MAIL	samue-es@tym.ed.jp
HP	http://swa.toyama-city-ed.jp/weblog/index.php?id=toyama038
ユネスコスクール 加盟時期	2010年3月
プロジェクト担当教員	ながいぶんご 永井文吾

大好きな校区・じまんの 金沢を広めよう

～地域へ、世界への発信を通して～

小学校6年間で自分と家族・友達・地域の方・ふるさとの産業、伝統や文化に目を向け、それを大切に作る心とその素晴らしさを知り、学年の発達段階に沿って、その素晴らしさを捉え直す場を設ける。人との繋がりから、社会・自然・世界との関わりを深め、思いや願いを持って、表現・思考・実践できる力の育成をめざしている。

描いた絵を台湾に送り、残り半分を台南市のじまんに描いてもらい完成!



Activity じまんの金沢を世界へ広める

6年生
48人

学区に住む「加賀友禪」作家と交流活動を行い、伝統工芸に込められた想いや生き方、需要の現状を学習する。その学習をもとに台湾の交流校とTV会議を通し金沢を紹介する。またアートマイルプロジェクトを開始し、壁画を作成し台湾へ送った。

11月

「加賀友禪」作家を講師に招き講義を受ける
台湾の交流校とTV会議で交流を開始

メールを使って交流校との交流を深める

12月

壁画の作成

交流相手に手紙を書き、仕上がった壁画と一緒に送る

1月

中国や台湾等について調べ、個人でレポートを作成

これまでの学習に対する自分自身の学びをまとめ、振り返る

Supporters

「加賀友禪」作家、
台湾交流校、
TV会議システム支援者
国際交流コーディネーター



交流相手を決め、自己紹介カードを郵送し、友達になる

担当教員の 声

双方の国で1枚の壁画を作成する活動を通して、目に見え形に残る交流内容となったことが、小学生には大変効果的だと感じた。



じまんの自分たちの町を壁画の半分に描く

プロジェクト経費の使いみち

大好きな校区・じまんの金沢を世界へ広める▶▶ 講師謝礼、壁画作成の画材費

その他のActivity

大好きな校区・じまんの地産地消の加賀野菜を広めよう▶▶ 講師謝礼

大好きな校区・じまんの金沢を広めよう～金沢ユネスコスクールを含むESD学習の公開授業研究～▶▶ 研究紀要印刷費

つぶやき・想い

「交流相手との対話の大切さ」

台湾の友達はこちらが答えることに「OK!」とか名前を呼んでくれたりして、とても嬉しかったです。伝えたい心があれば、必ず相手とつながると思いました。

Data 石川県金沢市立浅野川小学校

学校長	<small>ひがしみのる</small> 東実
所在地	〒920-0207 <small>いしかわけんかなざわし すさきまち</small> 石川県金沢市須崎町チ42
TEL	076-238-2034
FAX	076-237-1432
E-MAIL	asanogawa-e@kanazawa-city.ed.jp
HP	http://www.kanazawa-city.ed.jp/asanogawa-e/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年5月
プロジェクト担当教員	<small>にし の さと こ</small> 西野聡子

世界の人と手をつなごう

～国際理解教育～

自分たちにできることがないかを探し、計画・実行できる活動を考え実践していく。また活動の中で自分たちの生活を見直せる児童を育成する。海外の国との交流を通して、自分たちの文化を見直し受け継ごうとする心情を育て、相手に伝え相手と分かり合おうとする態度を養う。更に協同して1つのことをやり遂げられる力をつける。これらを根幹とし地域での活動を行っている。

Activity アートマイル活動への参加

6年生
93人

異国間2校でネットを介した共同作業を行い、1枚の大きな絵を仕上げるアートマイル活動に参加。製作過程で文化紹介・構図の合意等、様々な情報交換を通じた交流活動がされる。台湾や東エルサレムとの交流で金沢地域の伝統や文化の魅力を大きな1枚の絵にする。活動を通して将来にわたる国際人としての表現力を育て、他を認めながら自分の地域を大切にす人へと育てていく。

6月 交流の準備、自己紹介カードの作成

9月 相手国の場所や文化を調べる
講師を招きアートマイル活動の説明を受ける

10月 交流校と連絡を取り、絵のテーマを決定

ぬいぐるみの交換を行い、ぬいぐるみを交換留学生とし生徒それぞれが家に持ち帰る
生活の様子や写真を日記に書く
テレビ会議を行う
絵の下書き・色塗りをし、完成
絵を交流校へ送る

11-12月

Supporters

英語インストラクター
国際交流コーディネーター
石川県ユネスコ協会

担当教員の声

当初はイスラエルが相手国だったが東エルサレムとなった。

講師より東エルサレムはパレスチナ自治区でイスラエルとは敵対しており紛争も絶えないと聞き、アートマイル活動の目的を知ることにより更に交流を深めたいという意欲が湧いてきたと感じた。



プロジェクト経費の使いみち

アートマイル活動への参加▶▶講師謝礼、絵画制作費、絵画送付のための郵送費

その他のActivity

世界寺子屋運動への参加▶▶リーフレット作成のための文具費

つぶやき・想い

「これが世界とのつながってる感!」

相手に話が伝わったとき英語ってすごいと思いました。また歌で外国とつながることができるんだと学びました。

Data 石川県金沢市立四十万小学校

学校長	よしもとかつし 吉本克司
所在地	〒921-3135 いしかわけんかなざわしししま 石川県金沢市四十万3-185
TEL	075-298-3015
FAX	075-298-3037
E-MAIL	shijima-e@kanazawa-city.ed.jp
HP	http://www.kanazawa-city.ed.jp/shijima-e/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年5月
プロジェクト担当教員	さかがみのりこ 坂上則子

食でつながる地球プロジェクト 「つなげよう！ わたしたちと世界」

金沢市立西小学校は「つなげよう！ わたしたちと世界」をテーマに活動をしている。地域での米作りから日本の食文化、さらに留学生や国際交流員との交流から世界の食へ、食を通して世界とのつながりを考えてきた。また、国際理解・国際交流は、世界を知ると同時に未来を共に生きる同世代の子どもたちとどのように生きるかを考える重要な活動と捉えている。

Activity ロシアとの食文化交流

5年生
71人

ロシア人留学生との交流会を実施する。児童と留学生が言葉を多く使わなくても交流できる料理作りやゲームをする。ロシアの美しい映像を見たりロシア料理や本校児童が田植えから稲刈りまで行った米でおにぎりを作ったり、食文化の交流で新しい食の世界へとつながることを目的とする。

11月

姉妹都市ロシア・イルクーツク市からロシア留学生を招く
ロシア料理やロシアのゲームを一緒に行う

1月

ロシアンティーとボルシチの調理実習

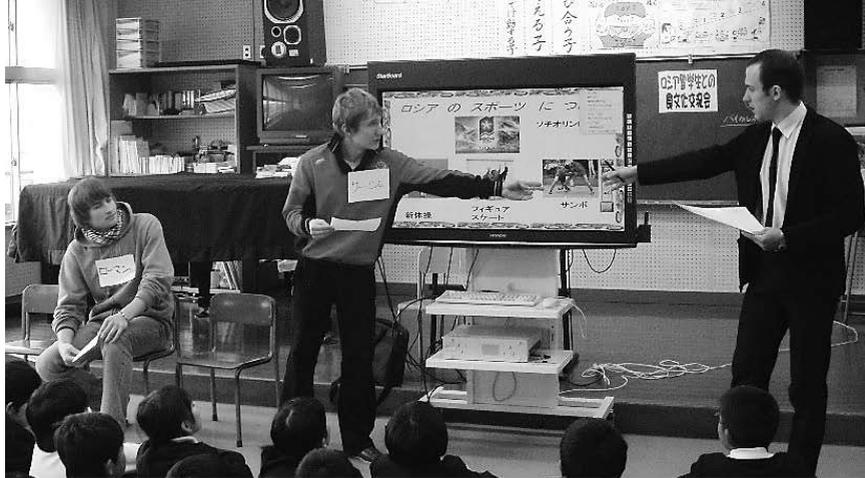
Supporters

姉妹都市公園国際
交流員、
ロシアからの留学生、
保護者

担当教員の 声

調理実習では保護者にもお手伝いいただいた。児童も保護者も、日本とは異なる味・食べ方に大いに驚き、興味を示していた。ゲームでは日本にないロシアの様々なゲームをし、あっという間に時間が過ぎてしまった。





プロジェクト経費の使いみち

ロシアとの食文化交流▶▶ 留学生謝礼、食材

その他のActivity

アートマイルプロジェクト参加▶▶ 絵画送付のための郵送費

先進校視察▶▶ 教職員旅費

つばやき・想い

「国際交流で深まるクラス内交流」

国際交流は「いろんな国について調べる」「海外と関わる」というイメージでしたが、活動を進めていくうちに学級の児童同士が関わりあう事、自分たちの国や学校の良さを改めて発見することに繋がっていると感じました。

Data 石川県金沢市立西小学校

学校長	かわぎしのりこ 川岸典子
所在地	〒920-0027 いしかわけんかなざわ し えきにししんまち 石川県金沢市駅西新町3-15-1
TEL	076-263-5338
FAX	076-263-5340
E-MAIL	nishi-e@kanazawa-city.ed.jp
HP	http://www.kanazawa-city.ed.jp/nishi-e/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年7月
プロジェクト担当教員	むらさきひろこ すぎやまあさこ 村澤弘子 / 杉山麻子

ほたるの保護活動から みる環境問題と 米百俵を送った側からの 地域遺産

田園が広がる自然豊かな学区内の福井や隣接する岩室では、ほたるの保護活動に取り組んでいる。巻東中学校では両地域を訪問し、ホテルにかかわる環境保護として森のボランティア活動を体験し、環境問題について考えた。また地域の米俵にまつわる史実を背景に、当時の人々の思いや歴史、藁から見える環境問題、俵作りの技術の伝承を地域のお年寄りと一緒に体験した。



Activity ほたるの保護活動学習授業

1年生
114人

学年全体を2つに分け福井と岩室を訪問。ほたるの保護活動をしている地元の方の講話を聴き、森の環境保護活動をボランティア体験や森林伐採の丸太処理体験、川の整備活動の様子を見た。事前・事後のまとめ作業をし、環境保護活動や経済活動について考える。

10月

環境保護やほたる、地域についての事前学習

11月

ほたるの生息地の福井、岩室を訪問
地域の方の講話と体験活動

12月

保護活動のあり方をテーマとし、レポート作成

Supporters

地域の方・専門家

担当教員の
声

事前・事後のまとめ作業の成果もありましたが、実際に現地へ行き活動

に加わることで、児童たちはより強く保護活動や自然について考えることが出来ました。



Activity 米俵を送った側からの地域遺産

3年生
123人

事前に「米百俵」の逸話や米俵を作る意義、現状などを学習し地域の歴史を知る。実践では米俵や藁細工を作る地域の方を招き、講習を通して交流を図る。完成した米俵はユネスコスクールである新潟県長岡市長岡南中学校へ運び、贈呈式を行う。

10月 三根山藩の歴史と米百俵に関わる事前学習

11月 地域のお年寄りと共にワラから作る俵作りの実践

12月 俵をユネスコスクールの長岡市立南中学校へ運び、贈呈式への参加

担当教員の声

米俵を作る人たちはすでに80歳を超え、指導する人材が集まるか不安でしたが、地域の協力のもと、集まった指導者と教師で共同試作の俵を作ってみて、実際の活動計画に踏み切ることができました。



俵の前後の傘の部分を作っている様子



森の整備活動



俵作りの胴体部分を作っている様子

プロジェクト経費の使いみち

ほたるの保護活動学習▶▶講師謝礼・旅費

米俵を送った側からの地域遺産▶▶講師謝礼、俵作成費

つぶやき・想い

「先人の想いはとぎを超えて…」

出来上がった俵に一部米を詰めて長岡城のあった長岡南中学校に送り、毎年行っている米百俵にまつわる劇中でその俵を使ってもらいました。本校生徒と長岡南中学校生徒は贈呈式という形で交流を行い、その様子は、新聞3社で取り上げられ地域の話題となりました。

Data 新潟県新潟市立巻東中学校

学校長	<small>おおば まさお</small> 大場雅夫
所在地	〒953-0067 <small>にいがたけん にいがた し にしかん く かたがしら</small> 新潟県新潟市西蒲区潟頭1493
TEL	0256-72-3332
FAX	0256-72-3932
E-MAIL	j805mhk@city-niigata.ed.jp
HP	http://www.makihigasi.city-niigata.ed.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年10月
プロジェクト担当教員	<small>おおや ゆうじ</small> 大屋雄二 [担当教科: 技術家庭・総合学習]

視野を広めて意識を高める

Activity「地域発見そして世界的な視野へ」では、新潟県燕市の産業・文化・歴史について、そのすばらしさや価値に気がつき、生徒たちはそれらを大切にしていこうという意識が高まった。「今後の学習や将来を考える上で、とてもよい体験をした」「もっと調べたり、交流をしたりしていきたい」という生徒の感想があった。新聞にも生徒たちの実践が掲載され、生徒は学習の重み、地域伝統文化の大切さまでも感じ取ることができた。

Activity「海外研修旅行」では、生徒たちは自分の適性を考え、今後の自分の卒業後の進路について考えを深めた様子だった。進路実現に必要な科目に対してさらに粘り強く学び、興味・関心を持って学習をするようになった。

地域の方々からは当校の実践を理解し、さらには多大なるご協力を頂いた。書籍やホームページでは得られない、生の体験談や技を披露していただくことで生徒たちは具体的な手段で学習を進めることができた。

新潟県立燕中等教育学校 滝田貴紀



総合的な 学習の時間

課題を設定し必要な情報を活用し、解決への
追究を進める。自己を他者との関わりで高め、
他者や地域環境を変えていこうとする。多様な
価値観を理解し、自己のあるべき姿・とるべき
行動を考え実現へ努力する。社会現象の本質
を捉え、自己の生き方の自分知を獲得する。こ
れらを育成するために世界の諸問題に取り組
み、調べ学習、まとめ学習をしていく。



Activity

総合的な学習の時間での調べ・まとめ学習

1-3年生
223人

自然環境・社会福祉・地域国際の中から問題意識
に合わせたゼミに分かれ、それぞれで事実の調
査・問題提起・解決活動を行う。最後にレポートや
文章にまとめ、活動を振り返る。

9月

各ゼミに分かれ課題を設定し、問題点につ
いてネット・書籍で調べる

10月

ゼミごとに官公庁・大学教授・商店街・
NPOへ訪問し、問題点について取材活動を行
う

11月

問題解決への街頭活動(1年生)
問題となる事実が起きる原因追究をし、解
決を図る(2-3年生)

12月

問題と社会の関わりをまとめ、発表し活動
を振り返る
総合的な学習の時間における取り組みやユ
ネスコスクールとしての活動を纏めたリー
フレットを制作
リーフレットを県内の学校に送付

Supporters

東京電力、ごみ処分場、
酸性雨センター、
環境カウンセラー、
農協、福祉協議会、老人施設、
授産施設、水俣病資料館、
新潟県警・市役所・県庁、
児童相談所

担当教員の 声

社会は様々な
問題が複雑に
絡み合ってお
り簡単には解
決できないが、
それを解決しようと努力している
人々の生き方にふれ、多くを学ん
でいた。



つばやき・想い

「大きく見通す力の大切さ」

人類が目先の利益を追求すれば必ずどこかで影響は出てしまいます。これから自分は目先のことにのみ目を向けるのではなく、全体を見て生活していきたいです。

プロジェクト経費の使いみち

総合的な学習の時間▶▶リーフレット
印刷費・送付のための郵送料

Data 新潟県新潟市立白新中学校

学校長	よしむらまさふみ 吉村正史
所在地	〒951-8133 <small>にいがたけんにいがたし ちゅうおうく かわぎしちよう</small> 新潟県新潟市中央区川岸町2-4
TEL	025-266-2136
FAX	025-266-2137
E-MAIL	j303hakushin@city-niigata.ed.jp
HP	http://www.hakushin.city-niigata.ed.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年3月
プロジェクト担当教員	ふしみ しろう 伏見史朗 [担当教科:数学]

GMプロジェクト： 地域を知り、地域から学び、 世界を知ろう！

教育目標に「地域に立脚しつつ地球的視野で活躍できる人材の育成」掲げる。その実現に向けGM（グローバル・マインド）プロジェクトとして「地域を知り、地域から学び、世界を知る」活動を展開している。また、「国際理解教育」と「環境教育」をユネスコスクールとしての活動の中心としている。

*グローバルとはグローバルとローカルを組み合わせた語。



Activity 地域発見そして世界的な視野へ

グローバル部員
9人

自分たちの地域の文化や美しいものを調べ探求し、まとめたプレゼンテーションを「わたしのまちのたからもの」コンテストに応募。また、地域在住の外国人に來校いただき諸外国の食や言語などの文化に触れる。

9月 住んでいる地域の文化や歴史的建造物、美しいものを調べ、疑問を探求

10-11月 プレゼンテーションソフトを使い、まとめる

12月 「わたしのまちのたからもの」コンテストに応募

1月 地域在住の外国人に來校いただき、諸外国の食や言語などの文化に触れる国際交流講演会を開催

Supporters

市役所、図書館、
地域在住の外国人、
地域の小学校、
地元大学留学生、
地域の方



ロシア文化の紹介

担当教員の 声

生徒たちは多くの体験活動から、地域の大切さやありがたみを感じ、誇りを持って自分の町を考える姿勢が生まれた。またその素晴らしさから、教科書の内容以外での地域への愛着を持つようになった。



Activity 海外研修旅行

4年
78人

海外研修を視野に、外国人を招き海外の文化、生活習慣、マナーを学ぶ。同時に、自分たちが住んでいる地域のことを外国人に伝える方法を調べる。海外研修後に体験や学習を振り返り、英文でのスピーチコンテストを行う。

- 7月 外国人を招き、海外の文化、生活習慣、マナーなどを学ぶ。
- 8-9月 住んでいる地域、日本の文化や歴史を外国人に伝えるための表現を調べる
- 10月 オーストラリア海外研修
- 11-12月 海外研修を振り返り、今後どのように経験を生かしていくかを考える
- 1月 英語でのスピーチコンテスト

Supporters

地域在住の外国人、
ホストファミリー、
オーストラリアの
子どもたち

生徒の 声

海外研修で学習した英語力を発揮し体験したことを通じて、自分の適性や卒業後の進路について考えを深めた。進路実現に必要な科目に対して更に粘り強く学ぼうと思う。



オーストラリアの子どもたちに書道を教えている様子



地域学習での再発見



燕の伝統工芸 鉗起銅器 (ついきどうき) の制作体験

プロジェクト経費の使いみち

地域発見そして世界的な視野へ▶▶
講師謝礼、AV記録メディア、文具費

海外研修旅行▶▶ 研修まとめ誌の印刷代

その他のActivity

教員研修(奈良県奈良教育大学附属
中学校見学)▶▶ 研修校への旅費

伝統工芸学習▶▶—

つばやき・想い

「地域での外国人交流を経た
滝田先生の発見」

書籍やネットでは得られない、生の
体験談や技の披露は生徒たちの心を
グッと引き寄せました。

Data 新潟県立燕中等教育学校

学校長	おの しまけいじ 小野島恵次
所在地	〒959-1201 <small>にいがたけんつばめし はいがた</small> 新潟県燕市灰方815
TEL	0256-63-9319
FAX	0256-66-1293
E-MAIL	school@tsubame-ss.nein.ed.jp
HP	http://www.tsubame-ss.nein.ed.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年10月
プロジェクト担当教員	<small>たき た たかのり</small> 滝田貴紀 [担当教科: 外国語(英語)]

あなたにとっての ESDとは

教員同士・生徒同士をつなげ、閉塞的な社会状況に対し、一石を投じてくれるもの
（北海道札幌市立札幌大通高等学校 西原明希）

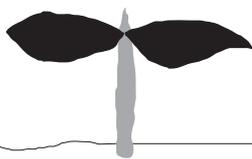
生徒の心の中に"Global citizenship"を形成すること
（宮城県亘谷町立日吉台小学校 跡部英行）

今まで続けている実践をさらに深め、高めていくもの
（千葉県市川市立稲越小学校 飯島眞）

すべての教科を総合的に学ぶ手立てを考えるきっかけ
（東京都江東区東豊小学校 岩橋郁郎）

人はなぜ学ぶのか。その答えはすべてESDにあると思う
（渋谷教育学園渋谷中学高等学校 廣瀬修也）

自分育て
（石川県金沢市立浅野川小学校 西野聡子）



「共生と平和の科学」

21世紀の主演である私たち

中高一貫校

直接的コミュニケーション不足が他人への無関心となる現代において、大切なことは人間・環境・動植物への関心を持ち、いかに共生していくかである。現状を知ることから始め、疑問・関心から問題解決の仮説を立て、検証していく授業を展開する。この過程で自らの考えを述べ、類推・検証する力を養う。



Activity 共生と平和の科学 グループ合同活動

高校2年生
120人

1クラス40名に対し教員3名が担当し、「共生と平和」に関する3つのテーマを設定する。テーマごとに分かれた生徒は「共生と平和のためにしなければいけないこと」の仮説を立て、様々な専門家の講話を聞き、各テーマの理解を深める。

10月 「共生と平和の科学」の授業目的の理解
生徒の希望をとり「子どもの人権」「ジェンダー」「貧困と国際協力」の3グループに分ける

11月 グループごとに「共生と平和のためにしなければいけないこと」に関する仮説を立てマインドマップを作成し、グループ間で共有する

12月 エゴグラムを使い今の自分を問い直す
青年海外協力隊OB・OG（情報隊員、音楽隊員、看護医療隊員）の講話

1月 名古屋大学の社会心理学専門家の講話

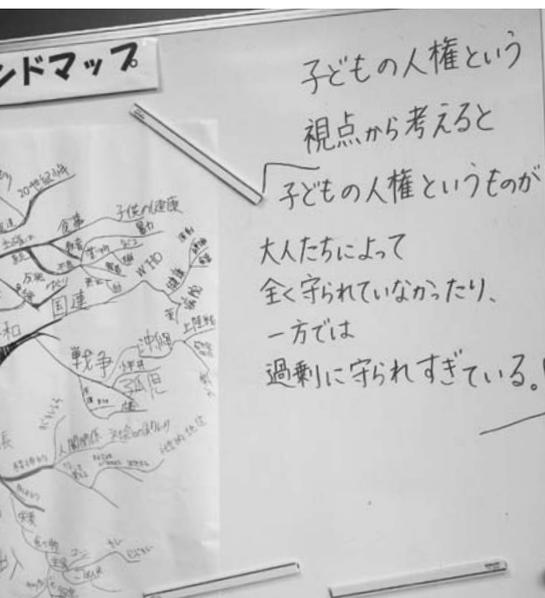
Supporters

青年海外協力隊OB・OG、
大学講師

担当教員の
声

授業での学びをどのように実際の行動に移してい

くか、生活に生かしていくかが今後の課題である。



Activity ESD実践先進校視察

教職員
2人

ESDで先進的な活動を行っている筑波大学附属駒場中学・高等学校と奈良女子大学附属中等教育学校を視察し、担当教員から話を伺う。次年度以降の本校ESD活動に生かし、繋げていく計画である。

11月 筑波大学附属駒場中学・高等学校視察

12月 奈良女子大学附属中等教育学校視察

担当教員の声

筑波大学附属駒場中学・高等学校ではESD日米教員交流プログラムでの学びとその後の活動について詳しい説明を受け、奈良女子大学附属中等教育学校ではYES for ESDの活動を準備段階・現地での活動・振り返り活動と細かく、写真等も参考に説明していただいた。

Supporters

筑波大学附属駒場中学・高等学校、奈良女子大学附属中等教育学校



奈良女子大学附属中等教育学校の先生とESDに関する話し合いを終えて



筑波大学附属駒場中学・高等学校の先生とESDのあり方について語る

プロジェクト経費の使いみち

共生と平和の科学 グループ合同活動▶▶ 講師謝礼・旅費、グループワークの文具費

ESD実践先進校視察▶▶ 視察校への旅費

つぶやき・想い

「複数で行うマインドマップの効果」

自分の信じているものが本当に正しいのかは、一方向からではなく複数絡んでくることで、より理解が深まると思いました。

Data 名古屋大学教育学部附属中・高等学校

学校長	おおたにたかし 大谷尚
所在地	〒464-8601 <small>あいちけん なごやしちくさくふろうちよう</small> 愛知県名古屋市千種区不老町
TEL	052-789-2680
FAX	052-789-2696
E-MAIL	nkf@highschl.educa.nagoya-u.ac.jp
HP	http://highschl.educa.nagoya-u.ac.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年7月
プロジェクト担当教員	<small>さんこだひろあき</small> 三小田博昭 [担当教科: 外国語 (英語)] <small>はらじゅんこ</small> 原順子 [担当教科: 技術家庭] <small>なかむらあきひこ</small> 中村明彦 [担当教科: 保健体育]

ESD 実践事例 48

近畿

- 31 NPO 法人京田辺シュタイナー学校
- 32 大阪府豊中市立上野小学校
- 33 大阪府松原市立松原第七中学校
- 34 大阪府立住吉高等学校
- 35 大阪府立長野高等学校
- 36 羽衣学園高等学校
- 37 奈良県奈良市立富雄北幼稚園
- 38 奈良県奈良市立飛鳥小学校
- 39 奈良県奈良市立済美小学校
- 40 奈良県奈良市立椿井小学校
- 41 奈良教育大学附属中学校
- 42 奈良県奈良市立月ヶ瀬中学校
- 43 奈良女子大学附属中等教育学校
- 44 和歌山県立串本古座高等学校古座校舎



高等部生徒のための 伝統技術体験実習

京田辺シュタイナー学校では、長年伝統工芸に携わっておられる職人の方にご指導頂き、中学3年で鉄打ち、高校1年で銅鍛造、高校2年で銀細工と、3種類の金属加工体験実習を行っている。生徒たちは学年が上がる毎に一層細やかさと集中力を必要とする作業に取り組み、地域の伝統技術に触れ体験する中で、力を制御し繊細で緻密な作品を仕上げることを学んでいる。



Activity 銅鍛造体験実習

高校1年生
19人

明日香の工芸家を講師としてお招きし、仕事のお話を伺うとともに銅の鍛造作業を直接ご指導頂く。生徒が伝統的な技術を直に体験できるこの3日間の実習では職人が技術を学ぶように実際に作業に取り組み、作品を作り上げることに学びの重点を置いている。

Supporters

明日香工芸家
佐土浩一・玲子ご夫妻

9月

地域に住む工芸家を講師に招き、伝統工芸や仕事についての講義を受ける
クラスを二つに分け、一つのグループが最初に銅鍛造を体験

11月

体験後に考えたこと・感じたことをレポートにまとめ、クラスで共有

12月

もう一つのグループも銅鍛造を体験

担当教員の 声

体験学習を経た生徒たちは、様々な工芸品を見る際にも「ただ漠然と見る」以上の何か、尊敬の念や継承する大切さ等を感じているようだ。そうした実感が生まれることは、一過性の衝動に動かされず、真に価値あるものを守っていく行動へと生徒を導いていると思う。





プロジェクト経費の使いみち

銅鍛造体験実習▶講師謝礼・旅費

つぶやき・想い

「職人への羨望」

時間が経つにつれ雑になるのが僕でした。佐土先生はこの仕事を毎日しています。本当にすごいと思います。体験を通して集中力と体力と気力がとても重要だと分かりました。

Data NPO法人京田辺シュタイナー学校

学校長	うつみ まりこ 内海真理子
所在地	〒610-0332 <small>きょうと ふたばたなべしこう どうみほりこたて</small> 京都府京田辺市興戸南鉾立94
TEL	0774-64-3158
FAX	0774-64-3334
E-MAIL	info@ktsj.jp
HP	http://ktsj.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年10月
プロジェクト担当教員	<small>やまだ ちる</small> 山田充 [担当教科:理科]

世界の人と歩む 子どもの育成

～いろいろな友だち、世界から世界へ～

国際社会において、地球的視野に立ち主体的行動に必要な態度・能力の基礎を育成するという国際教育理念に沿って、児童ひとりひとりに広い視野と主体的行動力が培う取り組みを進める。国際社会に通用する学力・豊かな心を育み、交流体験でその力の活用を図りたい。

Activity

『なかよし、大好き!』…日本ってどんな国?

1年生
181人

色々な国の挨拶を学び、韓国・朝鮮語、タイ語で童謡を歌う。日本の昔話の読み聞かせから、日本語の味わい・人々の暮らしや価値観を学ぶ。地域の方にけん玉や百人一首、羽根つきなどの遊びを教わり、楽しく遊び昔の遊びに親しみを持つ。

Supporters

地域の方

5月 ひらがな学習

10月 昔話の読み聞かせ

11月 韓国について学ぶ

1月 地域の方と正月遊び・昔の遊びをする

児童の
声

隣の国の遊びや昔話や生活などを知り、親しみを持った。



上野小全学年のESDの取り組み



Activity みつめよう日本、広げよう世界へ

6年生
172人

国際交流センターから講師を迎えての学習。様々な背景を持つ人々が自分とは異なる社会でどのような気持ちで生活しているか立場を変えて体験する。日本がアジアの一員であることを自覚し、アジア各国の文化・環境・戦争について、また子ども権利条約についての講話を受ける。世界に向けて出来ることを考え世界寺子屋運動のリーフレットを作成。

9月

国際交流センター外国人講師による、立場を変えて考えることについての学習

10月

国際交流センター講師による、日本を含むアジアについての講話

11月

子ども権利条約についての学習

12月

世界寺子屋運動リーフレット作成

Supporters

国際交流センター
講師

児童の 声

世界中のすべての人が読み書き計算を学べるように、自分たち

に出来ることを考え世界寺子屋運動リーフレットを作った。

つばやき・想い

「特別ではないESD活動」

ESDは特別な取り組みではなく、毎日のあらゆる教科の中に存在しています。それに気づけばごく自然にESDを実践できます。また、素晴らしい取り組みも持続させることが大切で、私たちは常に思い付きではない全教育課程に根ざした実践を積み重ねています。



立場を変えて考える学習

プロジェクト経費の使いみち

『なかよし、大好き!』…日本ってどんな国?▶▶講師謝礼

みつめよう日本、広げよう世界へ▶▶講師謝礼

その他のActivity

いろいろな国を知ろう▶▶講師謝礼

やさしい町 上野▶▶講師謝礼

広げよう! エコライフ▶▶郵送費

生命を支える食▶▶—

みつめよう日本! 広げよう世界へ▶▶—

私の幸せから私たちの幸せへ▶▶文具費

教職員研修▶▶研修先への旅費

Data 大阪府豊中市立上野小学校

学校長	なかきつねお 中木常雄
所在地	〒560-0013 おおさかふとよなかしうえのりがし 大阪府豊中市上野東2-8-8
TEL	06-6848-4021
FAX	06-6846-9650
E-MAIL	t_uenosho@city.toyonaka.osaka.jp
HP	http://www.toyonaka-osa.ed.jp/cms/ueno/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年6月
プロジェクト担当教員	ますかわなおこ 益川直子

幼稚園児の変容と家庭の取り組み

Activity「お茶はどのようにして作られるの?」では、茶道教室の体験から生まれた疑問に答えたことが、幼稚園児であっても、内容に深まりのある疑問が次々と生まれ、その応えに理解を深め、それに真摯に応えてくれる大人に信頼をもつようになった。園児の変容に、教師集団も、真摯に向き合うことの大切さを学んだ。また、保護者も子どもたちが学んだことを日々の家庭生活でも実践していることから、環境問題にも取り組まざるを得ないという感想をいただいた。

Activity「CO₂を増やさない、CO₂を減らそう」では、最初は子どもにとって難しすぎるのではないかとの危惧もあったが、以前から幼稚園で少しずつ継続的に話していたこともあり、予想以上に子どもが関心を持って取り組み、その後の生活にも良い影響が見られた。例えば、「葉がCO₂を食べてくれる」との認識から、掲示物の木の葉がはずれていたならそれをつけようとしたり、植物を大切にしている様子が見られたりした。その後、同じ内容を保護者向けにも実施したところ、保護者どうしが家庭でCO₂削減のために行っていることや、子どもの様子について情報交換したことで、各家庭での取り組みが進んだと思われる。

奈良市立富雄北幼稚園 桐野ゆみ



「出会い」「生き方」「学び愛」!

イキイキ七中 ESD展

多文化共生、国際理解教育の取り組みと人間関係づくりを主たる骨子としており、その活動を地域で分かち合うことも大きな意味があると考えます。また全国のユネスコスクールの取り組みを学区で発信し、本校のESD理念を地域に定着させる。生徒は企画・活動に参加し、達成感・自己肯定感を高めていく。



Activity 地域を映すESD展

1-3年生
295人

学区での行事・取り組み・季節の移り変わりを写真や絵で表現し、校内展示を行う「ESD展」を開催。生徒・教職員・保護者・地域の方から作品を募り、喫茶室を設け開放した校内一部に自由観覧できる場所を確保し、従来大切にしている地域との交流を更に進める。同時に本校や世界のESD活動紹介スペースも設け、ESDの取り組みを地域で共有し持続可能な社会につなげていく。

Supporters

講師、審査員、
地域の方、保護者

10月 「ESD展」の企画・意見の集約・概要決定

教職員・地域への事業説明

11月 作品募集の告知
校内でのESD活動理解を推進

ESD展実行委員会を組織し、作品募集、展示・公開の準備

12月 ESDのイメージについて学校と地域ですり合わせ

1月 ESD展公開
アンケートをもとに反省、リーフレット作成

担当教員の声

世界との関わりは隣にいる1人から始まり、地域社会でも人間関係づくりが大切である。その意味でも共生や伝統など地域ぐるみで繋がり、次世代を育むことがたいせつである。



プロジェクト経費の使いみち

地域を映す ESD 展 ▶ 講師・審査員謝礼、展示物作成のための文具費

つがやき・想い

「保護者・地域の学校理解」

ESD 活動はすぐには理解できないが、写真や作品を通して興味がわき様々なことを身近に感じるようになった。また昼間の学校の様子から日常の活動が垣間見られて良かった。今後も、毎年のように継続してほしい。

Data 大阪府松原市立松原第七中学校

学校長	<small>いとうがわたかゆき</small> 系井川孝之
所在地	〒580-0003 <small>おおさかふまつばらしひとつや</small> 大阪府松原市一津屋 2-1-9
TEL	072-332-2517
FAX	072-339-2517
E-MAIL	matsu7@matsubara.e-kokoro.ed.jp
HP	http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/matsu7/
ユネスコスクール 加盟時期	2008年10月
プロジェクト担当教員	<small>ひらいよしひろ</small> 平井義弘 [担当教科: 外国語 (英語)]

足元からの国際理解

—住吉から世界へ

住吉高等学校には在日韓国・朝鮮人、留学生等日本国籍以外の生徒が多く在籍している。この環境の中でまず身近な異文化を理解し、共感する心を育てたい。そしてその延長上にある世界の人々と交流できるようにしたい。また理解・共感を周囲にも働きかけ共感の輪を広げ、そのための具体的な行動を教員・生徒ともに考え実行し、「共に生きる社会」を大きくしていくことを目指している。



Activity

KCS (Korean Culture Studies) 活動

1-3年生
12人

KCS活動を通して自分のルーツ・生き方を考え、在日問題を「難しい差別問題」ではなく身近な友達のこととして考える機会とする。KCSは韓国朝鮮の民族音楽・舞踊を、伝統衣装を着て発表しており、当たり前にも固有の文化を表現することで、日本人を含め様々なルーツを持った生徒がお互いの多様性を理解し認め合えるようにしている。

Supporters

大阪府立学校
在日外国人教育研究会、
朝鮮奨学会、
民族講師

新入生歓迎会で韓国朝鮮の伝統音楽「プンムル」を演奏

4-5月

新入生に対し本名を名乗る大切さ、在日問題等の人権問題について話す

6-9月

「プンムル」を練習し文化祭で発表

10-12月

大阪府立学校在日外国人教育研究会「中国の集い」「ワンワールド」、朝鮮奨学会「ウリ高校奨学生文化祭」に参加・交流し、「プンムル」を演奏

1月

人権文化発表会で「プンムル」を演奏

担当教員の

声

生徒たちは様々なことに対して興味・関心を持ち、積極的に活動に加わった。多くの協力・交流・研修会への参加など、様々な機会を大いに活用し、色々なことに気づき学んでいる。



つぶやき・想い

「生徒の自発性を尊重して」

KCS活動を通して教員が「教える」人権教育ではなく、生徒が「自ら考える」人権活動となっていることが素晴らしいと思います。

プロジェクト経費の使いみち

KCS活動▶▶ 講師謝礼、生徒旅費、民族楽器

Data 大阪府立住吉高等学校

学校長	<small>こんの のほる</small> 紺野昇
所在地	〒545-0035 <small>おおさか ふ おおさかし あべのくきたけ</small> 大阪府大阪市阿倍野区北畠2-4-1
TEL	06-6651-0525
FAX	06-6653-9163
E-MAIL	yamanaka@sumiyoshi.osaka-c.ed.jp
HP	http://www.osaka-c.ed.jp/sumiyoshi/
ユネスコスクール 加盟時期	2008年10月
プロジェクト担当教員	<small>やまなかけい こ</small> 山中啓子 [担当教科:国語・総合学習]

地域と進める国際交流、 留学生と取り組む ESDカリキュラム

地域の小中高生が集まり英語で意見を述べる機会を作り、校種・年齢を超えた連帯感・学び合いの意識を養う。また昨年度日・中・韓・タイ・フィリピン5カ国の教員が開発したESDカリキュラムを使い、海外と日本の若者が共に学び合い、自らの行動こそが世界的な規模の問題を解く鍵であると気づかせる。



イングリッシュ・フェスティバル

Activity

地域と進める国際交流・河内長野
イングリッシュ・フェスティバル

小中高校生
120人

地域イベントホールに市内の小中高校から代表生徒が集まり、年齢に応じたプレゼンテーションを行う。歌・スキット・ドラマ・暗唱・スピーチ等、優秀な発表は表彰し努力と成果を称える。

9月

河内長野市内全ての小・中・高校に
参加案内状を送付

10月

参加者の原稿締め切り、プログラムの
作成、引率教員による打ち合わせ
校内の1-2年を対象に予備選抜

11月

イングリッシュ・フェスティバル開催

12月

校内で受賞伝達式

Supporters

河内長野市内の小中高校・
教育長・国際交流協会・
ロータリークラブ・
ライオンズクラブ、
大阪府教育委員会

大学教員 審査員の 声

児童・生徒たちの英語レベルの高さに驚いた。これにより英語を国際理解のツールとして使いこなす心構えができつつある

ことを歓迎したい。

h Festival of Kawachinagano



韓国人留学生3人と2年6組の生徒との学びあい

Activity 留学生と一緒に取り組むESDカリキュラム

2年生
310人

授業者の事前研修として、他学年での「国際協力カリキュラム」を見学。それに基づき本活動カリキュラムを作成し、新たに国際交流授業を企画。交流国と日本の教育制度・就職活動について現状を報告し合う。

8月 学生を日本へ派遣できる大学を探し、日程調整

9月 バスの手配、交流内容の打ち合わせ
「ESD国際協力カリキュラム」の授業見学、国際交流授業の企画

10月 交流授業の詳細を大学に連絡、両校で事前指導

11月 留学生24名を受け入れ
国際交流授業開催

Supporters

留学生派遣大学、
留学生

担当教員の 声

専ら留学生の日本語能力に頼ることとなり、留学生の日本語レベルによっては交流の難しい場面も見られたが、これからの社会人としての人生を模索する者同士として連帯感を持たせることは出来た。また本校留学生、外国人数員ならびに大学からの引率教員の支援が有効であった。

35

大阪府立長野高等学校



2年2組にフランス人留学生3人が参加

つばやき・想い

「国を超えて共有する社会人の意識」

よその国の人もやっぱり仕事のことで悩んだりするんですね。僕も大学へ行って仕事のことをよく考えます。

プロジェクト経費の使いみち

地域と進める国際交流▶プログラム印刷費

留学生と一緒に取り組むESDカリキュラム▶留学生謝礼、バス借り上げ代

Data 大阪府立長野高等学校

学校長	やまくちよしあき 山口義昭
所在地	〒586-0021 おおさか かわち ながの しはらちょう 大阪府河内長野市原町2-1-1
TEL	0721-53-7371
FAX	0721-53-7384
E-MAIL	koho@nagano.osaka-c.ed.jp
HP	http://www.osaka-c.ed.jp/nagano/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年2月
プロジェクト担当教員	うちもとまさゆき 内本雅之 [担当教科: 外国語(英語)・総合学習]

ICTを活用した海外の 学校や機関とのESDを テーマにした学び合い

ボランティア部の3年生はアメリカ、韓国、中国、シンガポールの生徒とビデオ会議などのICT（情報通信技術 Information and Communications Technology）を活用しての交流で異文化と触れ合い、互いの文化への関心を高める活動を行っている。自分達の考えを簡潔にまとめ、相手にわかりやすく表現することや、相手を理解するといった実践的なコミュニケーション能力を習得するICTの手法を全国のユネスコスクールへ広めることを目的とする。

Activity ESD 学び合い

2-3年生
70人

海外交流校とWeb上で交流を深め、様々なテーマについてプレゼンテーション、写真やコメントのアップを互に行い、同時に青年海外協力隊との交流を含め、それぞれの国の世代の考えや違いを実感し、情報実践活用能力を深める。この活動の継続的な発展を働きかけ、国内ユネスコスクール間でも実施していきたい。

6月

アメリカ、韓国、中国、シンガポールの学校とそれぞれウェブサイト上で自己紹介

7月

ウェブサイト上で写真やプレゼンテーションの資料をアップし、各テーマについて意見交換を行う（テーマ：アメリカ-環境とエコ、韓国-食、中国-ESD、シンガポール-文化）

8月

テーマごとにプレゼンテーションを行う
発表者のプレゼンテーションについて意見を出し合う

Supporters

アメリカ・シンガポール・
韓国・中国の交流校、
大阪大学、APEC教育機関、
大阪ユネスコスクールネットワーク、
JICA、海外協力隊員、
大阪府高石市教育委員会、
高石市姉妹都市交流委員会、
韓国文部科学省

生徒の 声

ESD 学習に取り組む前は、環境や貧困の問題は規模が大きすぎて身近な事に思えなかった。学習を始めたら他人事ではなく、自分の身の回りの行動が社会や世界、地球と繋がっていると感じました。



幸せをテーマに、中国の学生と英語でプレゼン発表

Activity ESD TV会議 3年生 30人

実際にビデオ会議や掲示板などのICTを更に活用して意見交換をし、文化理解の中身を深める。考えの簡潔なまとめ、伝わる表現、相手への正しい理解など実践的コミュニケーション能力を修得し、チームでの自律性、責任、働きかけなどのリーダーシップとチームワークのバランスも身に付けさせる。

Supporters

海外交流校と
関連団体

9月 教育や貧困や環境などのテーマに関してTV会議システムを利用して各学校と意見交換

10月 ESDをテーマに協同でプレゼンテーションの資料を作成

11月 アメリカの学校とエコをテーマにTV会議を実施

担当教員の 声

生徒たちは世界との交流に対する好奇心や新しい企画（構想）・創造に向かう探究心をもち、国を超えて学ぶコラボレーション力が必要だと実感していたようだ。



アメリカNJ州のミドルスクールとエコをテーマにWeb交流



ボランティアをテーマに、台湾の学生と英語でプレゼン発表



つぶやき・想い

「米田先生の発見!」

意見交換にとどまるだけでなく、各報告をもとに各国の持続可能性に関する課題を、環境、ライフスタイル、文化を切り口として、人と人、人と自然との関係のあり方について普遍と個別(異なるもの)を発見するディスカッションの資源となりました!

プロジェクト経費の使いみち

ESD学びあい▶▶大学生への謝礼・旅費、AV記録メディア、文具費

ESD TV会議▶▶大学生への旅費、AV記録メディア

その他のActivity

玉川大学ESDセミナー▶▶教員の旅費

Data 羽衣学園高等学校

学校長	にし だけんじ 西田健二
所在地	〒592-0003 おおさか ふたかいし しむがし は ごろも 大阪府高石市東羽衣1-11-57
TEL	072-265-7561
FAX	072-262-3385
E-MAIL	hagoromo@hagoromogakuen.ed.jp
HP	http://www.hagoromogakuen.ed.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2004年4月
プロジェクト担当教員	よね だけんぞう 米田謙三 [担当教科:社会・外国語(英語)]

37

はじめの 第一歩

幼稚園はあらゆる教育の第一歩である。園児が成長し、地球上の諸問題を一緒に考えられる「なかまづくり」を目指す。食育や温暖化を環境教育とし、平和や世界への関心を国際理解の芽生えとして支援している。



Activity

お茶の話「抹茶はどのようにして作られるの？」

園児（4-5歳児）
136人

取り組んで3年目になる食育と茶道体験から、園児は抹茶の出来方を疑問に思い、それに応えるべく交流のある地域から講師・専門家を招き講話を受ける。実際に茶会、抹茶作り体験をし作法を学ぶと共に地域や伝統文化に親しみを持たせる。

5月 茶道体験

9月 お月見茶会
お茶の作法を学ぶ

10月 お茶農家を講師に招き、お茶について話を聞く
抹茶作りを体験しお茶会をする

Supporters

お茶農家、
地域の方、
保護者

担当教員の 声

茶道体験での質疑は、幼稚園児でも内容に深みのある疑問が次々と生まれた。その答えに理解を深め、真摯に応じてくれる大人に信頼を持つようになった。園児の変容に教員も真摯に向き合う大切さを学んだ。



Activity CO₂を増やさないCO₂を減らそう

園児(4-5歳児)
136人

温暖化の現状をパネルシアターで知らせ、CO₂削減について園児にも分かりやすく話していただける団体を招き講話を受け、参加型学習を行う。活動内容を保護者に知らせ、記録用の写真を残す。

9月 園長手作り「温暖化ってなあに」のパネルシアターを見る

10月 大型紙芝居「もったいないばあさん」を各クラスで見る
「もったいないばあさん音頭」を踊る

12月 奈良ストップ温暖化の会を招き、参加型学習を行う

1月 保護者対象：参加型学習会実施、標語作り

Supporters

奈良ストップ温暖化の会、
保護者

担当教員の 声

子どもが日々の生活で学んだことを実践しているから、親としても子どもと一緒に環境問題に取り組んでいる。



つぶやき・想い

「園児の質疑への対応」

園児は元々純粋に人を信頼し、共感して受け入れる力がありますが、自分の疑問に真摯に応えてくれる大人の存在は、真価への理解が素直に身に入るのだと思いました。

プロジェクト経費の使いみち

お茶の話「抹茶はどのようにして作られるの?」▶▶ 講師謝礼、文具費

CO₂を増やさないCO₂を減らそう▶▶ 講師謝礼、大型絵本、文具費

Data 奈良県奈良市立富雄北幼稚園

園長	まりの 桐野ゆみ
所在地	〒631-0074 奈良県奈良市三松1-5-6
TEL	0742-45-0515
FAX	0742-45-0515
E-MAIL	gakkoukyouiku@city.nara.lg.jp
HP	http://www.naracity.ed.jp/tomiokita-k/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年7月
プロジェクト担当教員	桐野ゆみ

生きがいであり、全教育活動の基盤となるもの
(新潟県新潟市立白新中学校 伏見史朗)

人間としての温かい心をかよわせること (大阪府松原市立松原第七中学校 明石全弘)

これまで行われてきた様々な教育実践をESDの視点に立って
再構築していくもの (奈良県奈良市立済美小学校 大西浩明)

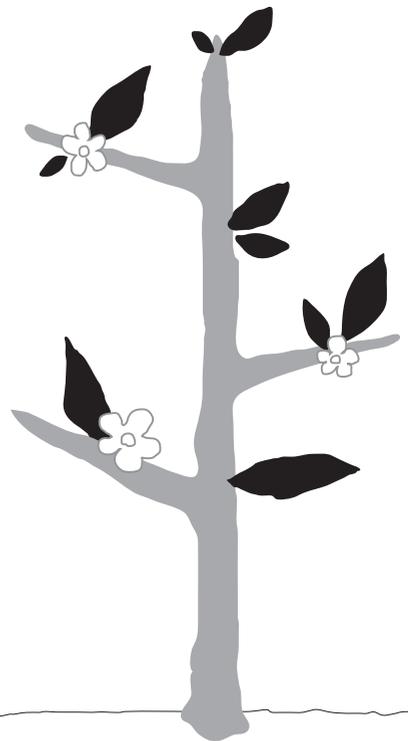
世界が持続発展するために必要なもの (奈良県奈良市立樺井小学校 中川素)

教育のあり方を変え、社会や子どもを変えていくための
重要な理念 (奈良教育大学附属中学校 小嶋祐尚郎)

人類の命をつなぎ、地球上の生命とつながる教育 (福岡県立城南高等学校 二宮浩司)

各教科学習で培った力を具現化できる教育 (広島県福山市立内浦小学校 三原健志)

日本がESDの実践を積み重ねることは、
国際社会に対して責任を果たすこと (広島大学附属中・高等学校 藤原隆範)



Teacher's Column
あなたにとっての
ESDとは

飛鳥から世界へ、 世界から飛鳥へ

毎年5年生の総合的な学習の時間では、「世界遺産学習」を主軸としている。世界遺産について学ぶと共に、自分たちの町の遺産の価値を考える。地域の方の願いや思いに触れ地域社会の過去から未来に受け継がれる思いを感じ、地域社会が抱える問題を持続発展的に捉え解決方法を探すことを目的としている。



Activity 世界遺産学習

5年生
106人

1年生から4年生までに地域に関わる学習をし、自分たちの町のこれからの考え創造していく。5年生は1学期に実際に世界遺産を訪れ、世界遺産について考える。2学期は1学期の学習をもとに、自分たちの町の遺すべき遺産や行事について探る。3学期は学習の発信とまとめを行う。

Supporters

近隣の世界遺産、
地域の方、
写真美術館からの講師

身近にある世界遺産を巡り、気づいたことや疑問をまとめる

5-7月

グループでまとめた内容を他クラスでも発表

10-11月

地域の遺産を訪問し、デジカメで撮影・フォトストーリーを作成
作成したフォトストーリーを他学年に発信

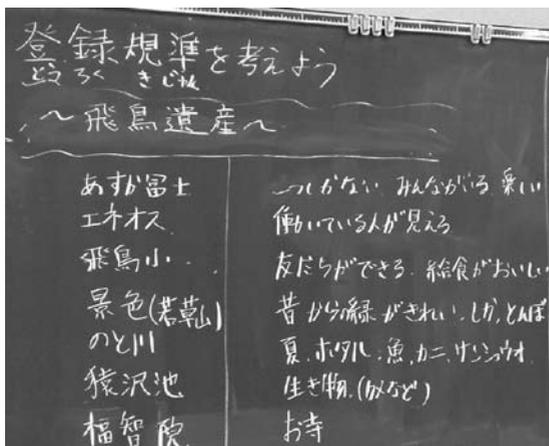
1-2月

世界遺産・地域の遺産・小学校のガイドブックを作成し、6年生に送る
世界遺産学習の成果を全校の前で発表

担当教員の 声

他教科との横断的な学びは効果的であった。国語科の「手紙の書き方」「編集の仕事」

、それらを情報科で「発信」し社会科の「CMづくり」に活かすことが出来た。児童は何のために今この学習をしているのか、具体的にイメージしながら学習できた。



プロジェクト経費の使いみち

世界遺産学習▶▶AV記録メディア、ガイドブック印刷代



つがやき・想い

「横断的学習をするために」

各教科と世界遺産学習の横断的学習を確実なものにするためには、世界遺産学習を軸とした年間カリキュラム(ESDカレンダー)の作成が急務であると感じました。

Data 奈良県奈良市立飛鳥小学校

学校長	なかい ぼる 中井 悟
所在地	〒630-8306 奈良県奈良市紀寺町785
TEL	0742-26-3201
FAX	0742-26-3203
E-MAIL	asuka-e@naracity.ed.jp
HP	http://www.naracity.ed.jp/asuka-e/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年2月
プロジェクト担当教員	まつうらしん 松浦 慎

世界遺産学習

「地域に学び、 地域に誇りと愛着を」

近隣にある世界遺産「古都奈良の文化財」をはじめ、地域に残る多くの文化遺産から地域の「もの・こと・人」を題材にできる地域的なメリットを生かし、6年間を通して様々な視点から地域を調べ、学び、考える学習を積み重ね、地域に誇りと愛着を持てるようにする。



Activity 奈良のたからものを守るということは…

5年生
103人

夏休み自由研究「済美や奈良のたからものをみつけよう」の発展として、「幻の大仏鉄道」を取り上げる。保存活動団体の講話や実際に鉄道跡を歩き、身近なところにも未来へ残すべき「たからもの」があることを実感する。

9月 大仏鉄道研究会の方を招き「幻の大仏鉄道」について講話を受ける

10月 大仏鉄道跡を歩いてたどる（加茂～奈良）

11月 大仏鉄道研究会の方がなぜ遺構を残す活動をしているのかを考え、伝える

12月 明治に造られたJR奈良駅舎が市民運動によって保存されることになったと知り、関係者から話をきく

Supporters

大仏鉄道研究会、
市民運動関係者、
地域の方

児童の 声

身近にも未来へ大切に残したいすばらしい「たからもの」が多くあると知った。残すも壊すも人なのだと思うと、ぼくたちがしっかり考えていかなければならないと思った。



Activity 奈良のお寺や仏像を描こう

5年生
103人

世界遺産見学で訪れた薬師寺、唐招提寺、東大寺、国立博物館で目にした建物や仏像を墨で絵に描き、奈良への愛着を深める。

7月

世界遺産見学のときに薬師寺や東大寺の様子などをスケッチする

10月

スケッチや写真を見ながら作品を作る

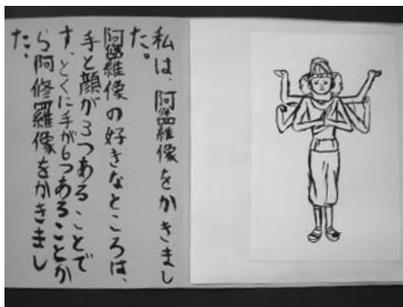
担当教員の

声

本物の建物や仏像ではなく、写真を見て描いたというのは残念だが、この活動をきっかけに身近な本物を見に行くようになってほしい。

Supporters

世界遺産関係者、
なら観光ボランティア
ガイドの会



私の好きな仏像、阿修羅像

つばやき・想い

「学習を通してのアンケートについて」

「済美や奈良のことが前より好きになった」というアンケートでの肯定的評価が、児童も保護者も年々増えています。今後も新たな実践を積み、児童とより良いESD活動を行いたいです。



大仏鉄道研究会の方からお話を聞く

プロジェクト経費の使いみち

奈良のたからものを守ること
は…▶▶バス借り上げ代

奈良のお寺や仏像を描こう▶▶写真印刷・記録用紙

その他のActivity

なかよしさんぽ▶▶—

わくわくさんぽ せいびの町▶▶—

もっと知ろうよ済美の町を▶▶—

奈良公園のひみつをさぐろう▶▶—

奈良のいいところ 再発見▶▶—

奈良の郷土料理「奈良のっぺ」をつくらう▶▶—

奈良のわらべ歌を歌おう▶▶—

Data 奈良県奈良市立済美小学校

学校長	おおはしてゐ お 大橋輝雄
所在地	〒630-8325 奈良県奈良市西木辻町5-2
TEL	0742-26-0312
FAX	0742-26-0312
E-MAIL	seibi-e@naracity.ed.jp
HP	http://www.naracity.ed.jp/seibi-e/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年2月
プロジェクト担当教員	おおにしひろあき 大西浩明

世界にはばたく椿井っ子

自国・地域や他国の他文化の理解、人間や多様性理解・人間尊重、自己表現・コミュニケーション能力、これら3つの育成をねらいとし、児童間・地域間、国を超えての関わり合いで自分の足元を見つめ今出来ることを実践する能力を身に付ける。また学習を通して、世界遺産や自分の住む地域を愛し大切にすることを身に付ける。



Activity わたしのまちのたからもの

6年生
37人

校区には世界遺産をはじめ多くの地域遺産がある。地域の特性を活かし、地域交流や現地調査を行い地域のたからものを調べ、写真スライドショーを作る。今回は伝統産業などの地域遺産が奈良の良さのひとつと考え、身近にあるものを中心に考える。

自分たちが住む町の良さを、地域交流・現地調査をして調べる

5-6月

動画とナレーションを組み合わせ、スライドショーを作成

作成したものは「わたしたちのまちのたからものコンテスト」に出品

9月

作成したスライドショーを発信

APEC 青少年交流イベントに出席し作品の手渡しを行う

10-12月

海外に向けて発信

作品のブラッシュアップ、奈良高校ESS部の生徒と英語版のスライドショーを作成

1月

海外との交流に向け準備、TV会議の研修・

英語の練習

地域の文化祭で作品を上映

Supporters

各国観光担当大臣・

国際機関代表、

TV会議講師、

奈良高校ESS部、

地域遺産関係者、地域の方

担当教員の

声

活動を通してESDとは「つながり」であると思った。児童は高校生と関

わり、数年後は自分もあのようになりたいと憧れを持った。人・地域・学校とつながり、お互いのことを知ることが持続発展することであると考える。



大阪大空襲についてのお話を聞く

Activity 平和学習・戦争体験の講話を聞く

6年生
37人

戦争体験者の話を聞き、戦争の恐ろしさを学ぶ。平和のために今出来ることを考え、将来どうすれば平和な社会が築けるか考え、実践する能力を身に付ける。

10月 大阪大空襲を体験された方を講師に招き、戦争について講話を受ける

11月 広島で原爆を体験された方を講師に招き、原爆について講話を受ける

12月 講話から学んだことや自分たちでの調べ学習をまとめる
戦争の恐ろしさを伝えるためにプレゼンテーションを作成

1月 保護者・下級生に向けプレゼンテーション発表会

Supporters

戦争体験者、
保護者



原爆についてのお話を聞く

プレゼン
テーション
参加教員の

声

児童のプレゼンテーションを発表する姿から、持続発展的な世の中であるためには世界が平和でなければならないと思わされた。



フォトストーリー作成

つばやき・想い

「保護者から感じる地域遺産活動」

当たり前のようにある世界遺産や地域遺産を学習する機会を作っていたいただき、とてもありがたいです。当たり前から色々なことを考えるようになった子どもの様子もあり、今後取り組みは続けていってほしいです。

プロジェクト経費の使いみち

わたしのまちのたからもの▶▶講師謝礼・旅費、作品送付のための郵送費

平和学習・戦争体験の講話を聞く▶▶講師謝礼

その他のActivity

世界寺子屋運動▶▶リーフレット作成費

Data 奈良県奈良市立椿井小学校

学校長	かわばた かずこ 川畑加珠子
所在地	〒630-8343 奈良県奈良市椿井町25
TEL	0742-23-7062
FAX	0742-23-7063
E-MAIL	tsubai-e@naracity.ed.jp
HP	http://www.naracity.ed.jp/tsubai-e/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年2月
プロジェクト担当教員	なかがわはじめ 中川素

ホールスクールアプローチ によるESD理念にもとづく 学校づくり

2006年より「ESDに基づく学校づくり」をテーマに教科・領域の連携・統合した学びの開発に取り組んでいる。それは先輩諸氏の「命を大切に」「地球環境・文化財を大切に」「子どもの自主性を大切に」しながら取り組んできた活動とESDの学びは合致していたことにある。今回は多様な学びの中から特に授業で学んだことを生かし、生徒の意欲・主体性を中心に取り組んだ行事や生徒会活動を取り上げる。



Activity

平和の集い、沖縄の今をしっかり見つめよう

1-3年生
500人

1988年より生徒会で取り組んでいる行事。平和を希求し自分に出来ることを積極的に考え行動する、先輩の意思を継いだ学習活動である。1年生は沖縄戦を振り返り、2年生は基地を中心に過去の沖縄を調べ修学旅行で訪問し、3年生は修学旅行を振り返り課題意識を深める。集いでは沖縄戦を題材にした演劇や講師を囲んでのシンポジウム、平和宣言等を行う。

Supporters

修学旅行での
 沖縄訪問先、
 専門講師

5-6月

リーダー研修会で活動の基本コンセプトを検討
 生徒会中央委員を中心に学習テーマを話し合う

学習テーマ決定

テーマに沿った学習を教科で指導

9-10月

総合的な学習の時間で調べ学習を繰り返し学習
 を深める

平和の集い実施

生徒の 声

「命の尊厳」
 を身近ない
 じめと関わら
 せて考えるよ
 うになった。

「全国紙に載らない沖縄の現実」を知る大切さに気づいた。具体的に「架け橋」となるために何が出来るか考えるようになった。



Activity 中庭プロジェクト

1-3年生
70人

生徒の「中庭プロジェクト実行委員会」の企画を基に、学級水田や宇宙朝顔の栽培、池の観察等、生徒自らが取り組む様々な活動。2学期以降は生徒がプロデュースした景観の整備を進める。

5月 中庭プロジェクトを発足、具体的活動を検討

6-12月 具体的な活動計画に沿って作業・観察を進める

1-3月 活動の進行と並行して来年度の活動を検討

担当教員の 声

生徒は夏休みも毎日観察や世話に登校し、自主的に活動を継続している。卒業する3年生は最後の集会で下級生に熱く伝え、下級生も意思を受け継ぎ来年度に向けて取り組んでいる。

Supporters

大学教官、
地域の方



つばやき・想い

「教員・生徒の隔たりなき活動」

1つの活動が次の活動を誘発したり、新しい仲間を呼んだりと二次的な効果も生まれています。プロジェクトには教員も自発的に参加しており、生徒のアイデアを実現するために楽しく取り組んでいます。

プロジェクト経費の使いみち

平和の集い▶▶ 講師謝礼・旅費

中庭プロジェクト▶▶ 中庭整備費



Data 奈良教育大学附属中学校

学校長	<small>たにぐちよしあき</small> 谷口義昭
所在地	〒630-8311 <small>ならけんならしほうれんちやう</small> 奈良県奈良市法蓮町 2058-2
TEL	0742-26-1410
FAX	0742-26-1413
E-MAIL	icelos.yujiro@nara-edu.ac.jp
HP	http://www.nara-edu.ac.jp/JHS/
ユネスコスクール 加盟時期	2008年7月
プロジェクト担当教員	<small>おしまゆうじろう</small> 小嶋祐伺郎 [担当教科: 社会]

地域ぐるみのESD活動

少子高齢化での小規模・へき地校にあって、保護者及び地域住民の方との連帯感と絆を大切にして、地域環境美化、地域伝統文化及び地域福祉におけるボランティア活動を行っている。地域ぐるみの体験活動を通して、地域の良さを受け継ぎ郷土の愛着と誇りを培うことで、これからの郷土を担う人材育成の継続的活動に努める。



Activity

伝統文化の継承：闘茶会

1-3年生
41人

地場産業である茶の文化を学ぶため、闘茶会の体験活動を行い、伝統文化継承の心を養う。また、地場産業の梅を採りしそ漬け、土用干しの工程を経て梅漬けプロジェクトとして製品化し、文化祭で販売する。

闘茶会

9月

地域茶振興会から講師を招き、茶の入れ方、もてなしの心、銘柄を当てる伝統的な闘茶会を体験

月ヶ瀬文化祭

11月

梅漬けプロジェクトで製品化した梅の販売

Supporters

地域茶振興会、
地域の保育所・
小学校・
万年青年クラブ・
婦人会

担当教員の

声

地域ぐるみのESD活動により、今まで見過ごされていた地域伝統文化等を継承す

る良いきっかけとなった。



Activity 地域合同行事

1-3年生
41人

地域の各団体が一堂に会し、秋の地域合同行事である体育祭と文化祭を行う。体育祭では中学生が準備・運営の中心に、日頃の学習の成果を発揮し、成長振りを地域に披露する機会としている。

また、15年間継続しているアルミ缶回収活動の深化を目指し、リサイクル工場での環境学習や収益金で車いすを寄贈するなど地域福祉の貢献に努める。

Supporters

地域の保育所・小学校・
万年青年クラブ・
婦人会、
アルミリサイクル工場

体育祭

準備・進行・運営を中学生が中心となって行う
アルミ缶リサイクル活動により
地域環境・福祉活動の推進

10月

11月 月ヶ瀬文化祭

生徒の 声

集められたアルミ缶が山積みになっており、多くの人がリサイクルに協力していることが嬉しくなった。これまで以上にアルミ缶回収、分別

に力を入れたいと思う。



毎年2月、地域福祉フェスティバルにてアルミ缶回収収益金で車いすを寄贈
(15年間継続中。のべ94台)



つぶやき・想い

「闘茶会を体験して」

お茶の味比べは難しく、ほとんど当た
らなかったけどおいしくお茶をいただき
ました。中国から伝わってきて、昔は
薬として使われていたなんてびっくりし
ました。

プロジェクト経費の使いみち

闘茶会▶▶ 講師謝礼、文化祭準備用環
境整備用品費

地域合同行事▶▶ 清掃用具費、ボラン
ティアへの飲料費、バス借上げ代

その他のActivity

地域広報活動▶▶ リーフレット作成費

Data 奈良県奈良市立月ヶ瀬中学校

学校長	うえにし ちあき 上西千秋
所在地	〒630-2302 奈良県奈良市月ヶ瀬尾山2551
TEL	0743-92-0020
FAX	0743-92-0895
E-MAIL	tsukigase-j@naracity.ed.jp
HP	http://www.naracity.ed.jp/tsukigase-j/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年2月
プロジェクト担当教員	よしかわとしみ 吉川俊美 [担当教科:外国語(英語)]

海外のユネスコスクール とのESDをテーマとした 交流プロジェクトの推進

日本・韓国・フィリピン・タイのユネスコスクールに所属する高校生が一同に集まり、定期的にESDに関わるテーマについての議論をし、友好と連携を深める。その準備として教員2名をフィリピンのカラバンへ派遣する。次年度の国際交流事業の理解を共有するために、また今後の生徒指導の共通認識を得るために、現地の教員と一緒にESDをテーマにディスカッションを行う。



Activity

海外ユネスコスクールとのESDをテーマとした交流プロジェクトの推進

2年生
6-10人

アジア各国のユネスコスクール所属の高校生が集まり、英語によるESD関連の連続した議論を行い、友好と連携を深めることを目的とし、今回はその準備段階として教員を海外に派遣する。

第1回交流事業をフィリピン・カラバン市で開催

6月

学校紹介と会議
会議テーマは「多文化共生」と「こどもの人権」

全校集会にてプログラムに参加したメンバーによる報告会

10月

参加メンバーと国際援助活動をしている外部の方とのディスカッション

教員2名がフィリピンのカラバン市へ現地教員とESDをテーマにディスカッションを行う

1月

Supporters

フィリピン・
カラバン市の参加校、
国際ボランティア団体
「地球のステージ」

担当教員の 声

今回派遣された教員の報告を中心に学内の教員研修を深め、次年度の交流事業をより発展させていく。次年度は著名な専門家を特別講師として招き、ESDをより現実レベルで取り組むと今回の教員討議で決定した。



つぶやき・想い

「痛感!」

以前の本校の国際交流はヨーロッパ先進国を拠点としていましたが、ESDの重要目標は地球的な問題への取り組みで、途上国の直面する問題を視野に入れることが重要です。単なる表面的な意見や態度ではなく、途上国の学校と積極的に直接交流をすること、その経験を周りに伝えていくことが大切であると痛感しました。

プロジェクト経費の使いみち

海外ユネスコスクールとのESDをテーマとした交流プロジェクトの推進
▶▶ フィリピンへの旅費

Data 奈良女子大学附属中等教育学校

学校長	つかもと いくよ 塚本 幾代
所在地	〒630-8305 奈良県奈良市東紀寺町 1-60-1
TEL	0742-26-2571
FAX	0742-20-3660
E-MAIL	08nwuss@roseleaf.nara-wu.ac.jp
HP	http://www.nara-wu.ac.jp/fuchuko/
ユネスコスクール 加盟時期	2006年2月
プロジェクト担当教員	きた おとむ 北尾 悟 [担当教科:社会]

世界遺産教育及び 地域と連携した ふるさと教育

世界遺産教育を通して、郷土を愛する心と国際社会に貢献する姿勢・資質の育成を目的とする。更に地域社会や日本の自然・歴史・文化の理解を基礎に、異文化理解・人間尊重の精神・国際社会の一員としての資質を養う。また体験学習、研究論文作成・発表を通して、主体的な課題発見・調査学習・判断解決の資質・能力を身に付けさせる。



Activity 第1回古座校舎ギャラリー開催

1-3年生
185人

和歌山県は教育への関心・理解を深め故郷を愛する気運を醸成するため、11月を「きのくにに学び月間」とする。この取り組みをESD理念と連結し、地域の芸術愛好家の作品を5週間にわたり週替わりで200点もの作品を展示し、生徒や地域の方が芸術に触れる機会を提供する「古座校舎ギャラリー」を開催する。芸術を愛する方々の真摯な姿に直接触れ、本物の良さを理解し感性を磨き豊かな心を育成することをねらいとする。

Supporters

地域の芸術愛好家、
来場者、地域の方、
保護者

10-11月 第1回古座校舎ギャラリー開催

担当教員の 声

期間中は193名が訪れ、地域の継続的な催しとして多くの方が来場した。週替わりの企画展示を地元新聞が毎週記事として掲載し、毎日新聞「わかやま教える育む学び合う」の特集でも取り上げられた。地域文化の発信という観点で大きな収穫があったと考えられる。



卒業生書家・田中太山(たなかたいざん)氏の作品



Activity 世界遺産学習全国サミット2010 in なら 参加

教員
1名

世界遺産学習やESDの先進的な実践報告を聞き、協議に参加することによって学校のESDや世界遺産教育の今後の在り方に役立てる。

11月

世界遺産学習全国サミット2010 in なら
奈良教育大学ユネスコスクール教育実践研究会
参加

Supporters

全国サミット事務局
関係者の方々

参加教員の 声

奈良市教育委員会の取組である奈良市教育ビジョン、奈良大好き世界遺産学習は和歌山型ESDや学校での世界遺産学習に大きな参考となった。

奈良市教育委員会の取組である奈良市教育ビジョン、奈良大好き世界遺産学習は和歌山型ESDや学校での世界遺産学習に大きな参考となった。

つばやき・想い

「芸術を通して見えた学校・地域の協調性」

5週間にわたり200点もの作品を展示していましたが、故意の破損が皆無でした。来場者や生徒が古座校舎ギャラリーに触れ、「自ら学び・考え・律しつつ、他と協調し他人を思いやる心や感動する心」が地域と学校間に醸成された期間だと感じました。

プロジェクト経費の使いみち

古座校舎ギャラリー▶▶講師謝礼、写真展示費

世界遺産学習全国サミット2010 in なら 参加▶▶教員旅費



Data 和歌山県立串本古座高等学校古座校舎

学校長	いのうえまさお 井上雅雄
所在地	〒649-4116 わかやまけんりしむろぐんくしもとこうなかなみなど 和歌山県東牟婁郡串本町中湊370
TEL	0735-72-0008
FAX	0735-72-0758
E-MAIL	vice-principal@koza-h.wakayama-c.ed.jp
HP	http://www.koza-h.wakayama-c.ed.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2007年12月
プロジェクト担当教員	つばのけんいちろう 坪野賢一郎 [担当教科:社会]



ESD実践事例48

中国・四国・九州

- 45 広島県福山市立内海小学校
- 46 広島大学附属中・高等学校
- 47 福岡県立武蔵台高等学校
- 48 福岡県立城南高等学校

エネルギー・環境教育を 基軸としたESD

学区の海が教えてくれる状況や、児童らが収集した「気象観測データ」をもとに、エネルギー・環境問題に対する豊かな感受性・見方・考え方の育成、働きかける実践力の育成を目指す。また、国内外の環境教育への取り組みを研修・調査研究方法の取得、講師招聘の研修を実施し、指導者の指導力向上を図る。

Activity

生活科・総合的な学習の時間での
エネルギー・環境教育

1-6年生
60人

低学年では生活科で、自分たちの住む内海町の自然を学習し親しみや関心を持つ。中学年では自分たちの生活地域の環境保持を現状から考え、より身近に環境問題を感じる。高学年では継続した気象観測に表れるデータ、問題点や課題を見つけ、自分にできるより広い視野での環境活動を考える。

Supporters

地域の方

各学年による、生活科・総合的な学習の時間におけるエネルギー・環境教育への取り組み

4-3月

1年生活科「うみとなかよし」 2年生活科「生きものだいすき」 3年総合的な学習の時間「内海の海はじまんの海か」 4年総合的な学習の時間「自分たちの暮らしを見つめよう」 5年総合的な学習の時間「環境とエネルギーについて考える」 6年総合的な学習の時間「世界とのつながり」



企業による出前授業を利用した地球温暖化についての学習



3年間の気象観測活動の結果、環境大臣表彰を受ける

担当教員の 声

エネルギー・環境教育の今後の継続的な取り組みが児童の力へと繋がっていくことを改めて認識し、保護者、地域への発信をより進めていく必要を感じた。



Activity 教職員対象ESD研修

教職員
12人

講師を招聘しての校内職員研修、先進校視察、全国や東京都の小中学校環境教育大会参加を行い、教職員の指導力向上を図る。

ESD校内職員研修会

11月

京都教育大学教育学教授を招聘しESD推進に関する研究会を行う

宮城県気仙沼市立面瀬小学校を視察

12月

平成22年第42回全国小中学校環境教育大会、第46回東京都小中学校環境教育大会に参加

Supporters

京都教育大学、
気仙沼市立面瀬小学校、
各小中学校環境教育大会

担当教員の 声

小中学校環境教育大会シンポジウムでの「①科学的知識の伝達は正確に②危機意識・価値観を押し付けず自分で考えさせる③取り組みを矮小化させない④多様な価値観内での合意形成努力」が心に残った。



教員のESD理解を深めるESD校内職員研修会



グリーンカーテンによる校舎のヒートダウン



地域と連携した苗木植栽のヒートダウン



4年生による環境3R学習発表

つぶやき・想い

「全学年共通の取り組みを通して」

緑化運動や海浜清掃などの地域活動では、個々の対応より協力する大切さを感じた様子が伺えました。

プロジェクト経費の使いみち

生活科・総合的な学習の時間でのエネルギー・環境教育▶▶

教職員対象 ESD 研修▶▶ 講師旅費、教員研修旅費

その他のActivity

環境保持に向けた取り組み▶▶ パソコン消耗品

Data 広島県福山市立内海小学校

学校長	さとうけいこ 佐藤敬子
所在地	〒722-2641 ひろしまけんふくやまし うつみまち 広島県福山市内海町73
TEL	084-986-2003
FAX	084-980-9120
E-MAIL	shou-utsumi@edu.city.fukuyama.hiroshima.jp
HP	http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/shou-utsumi/
ユネスコスクール 加盟時期	2008年10月
プロジェクト担当教員	みはらけんじ 三原健志

地域交流の楽しさや達成感を実感

Activity「今津干潟の環境に関する調査・研究と保全活動」では、生徒たちはとても楽しそうに作業に取り組んでいた。ボランティア活動に参加することが初めての生徒も多く、大変貴重な経験となったようだ。また、この活動を通して、生徒は自分たちの住む地域への愛着がより強くなったと思われる。生徒の感想からも、行政や大学、地域の方々と協働し、地域と交流していくことの楽しさや達成感、充実感がひしひしと伝わってきた。地域の方々からも、「自分とは世代の違う高校生と一緒に作業ができてとても楽しかった。また来年もお願いします」とのお言葉をいただいた。このように地域で高校生が活動することは、教師を含め多くの大人たちに、活力を与え、将来に対する希望をもたらすものだということを改めて感じた。

今後も、このESD活動を充実・発展させ、今津干潟のほか、里山の保全活動など体験的な活動を通して、持続可能な社会の在り方を学ぶ活動を継続していきたい。また、その情報を校内だけでなく、他の地域や学校、そしてできれば海外にも発信し、世界の人々と繋がり、情報を交換しながら、生徒たちが持続可能な社会の担い手として成長していくことを期待したい。

福岡県立城南高等学校 二宮浩司



クラブ活動・生徒会活動を 中心に、生徒にESDの精神 の涵養をはかる取り組み

1953年日本で最初のユネスコスクールに指定され、今日に至るまでユネスコの提唱する国際教育を進めている。1975年クラブ活動としてユネスコクラブが組織され、2009年生徒会の中にユネスコ委員会が組織された。授業のみならずクラブ活動や生徒会活動を通じて、生徒に様々なユネスコ活動を体験させESD精神の涵養をはかり、他校や地域へユネスコ活動の輪を広げることを目的とする。

Activity	クラブ活動・生徒会活動を中心に、生徒に	高校1-2年生
	ESDの精神の涵養をはかる取り組み	30人

ユネスコクラブ・ユネスコ委員会を中心に、全国で行われる各セミナー・行事・フィールドワークへの参加、近隣または全国の高校・大学との交流・講義、街頭募金などの地域活動、ボランティア団体協力の発展途上国への物資援助などに取り組む。

Supporters

国泰寺高校、バングラディッシュ支援チャリティーパーター関係者、アカシア会、広島ユネスコ協会、広島ホームテレビ、テレビ新広島、RCC、NHK、中国新聞、東京学芸大学附属高校、広島大学・大学院、原爆資料館、京都大学、日本ユネスコ協会連盟、ユネスコ協同学校、地域教育委員会、ドイツユネスコスクール

各教科を通してESDとは何か、なぜ今必要なのかを理解する

総合学習の枠で学校独自の科目「ESD」を設け、「持続可能」をテーマに探求学習

4-1月

スーパーサイエンススクールに所属する生徒に「持続可能な科学技術」をテーマに課題研究

ユネスコクラブ・ユネスコ委員会で使用済み切手・書き損じ葉書を集めボランティア団体へ送付

また不要になった運動靴を集め途上国に送り、教育支援を行う

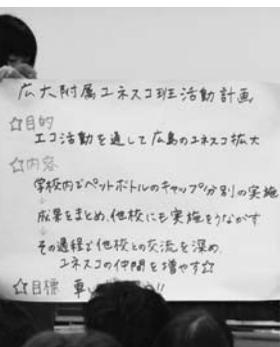
広島ユネスコ協会と連携し「世界寺子屋運動」に関わる街頭募金活動を行う

12月

他校生徒に呼びかけ「広島ユネスコ高校生集い」開催、広島大学の留学生と交流

1月

日本ユネスコ協会連盟主催「ユネスコ・ユースセミナー」に生徒・教員を派遣



担当教員の声

ESDの認知度が高まり大学・教育委員会・ユネスコ協会との連携の上に実施できたが、認知度を行動に転化させるには時間がかかると思う。

つばやき・想い

「持続可能性について」

ユネスコクラブの生徒を日本ユネスコ協会主催「ユースセミナー」やドイツのユネスコスクールへ派遣し、日本や世界の仲間たちと「持続可能性」について学んだことは大きな成果です。来年度以降、この取り組み自体を「持続可能」にする手立ての必要性を痛感します。

プロジェクト経費の使いみち

クラブ活動・生徒会活動を中心に～
▶▶生徒・教員旅費

Data 広島大学附属中・高等学校

学校長	こがずひろ 古賀一博
所在地	〒734-0005 ひろしまけんひろしましかなみくみり 広島県広島市南区翠1-1-1
TEL	082-251-9868
FAX	082-252-0725
E-MAIL	asakaze@hiroshima-u.ac.jp
HP	http://www.hiroshima-u.ac.jp/fsc/
ユネスコスクール 加盟時期	1953年
プロジェクト担当教員	ふじわらたかのり 藤原隆範 [担当教科:社会]

武蔵台高校 ユネスコスクール プロジェクト

古代から大陸の接点であった福岡県の豊かな歴史を学び、過去から現在・未来へと繋がる大きな流れの中で自らの立ち位置を認識し、肯定感を高め愛校心を育て我が国と郷土愛を育成する。



Activity 山家岩戸神楽鑑賞

1-3年生
1010人

筑紫野市山家宝満宮で江戸時代から行われている里神楽「山家岩戸神楽」を、保存員の一人である本校OBと筑紫野市歴史博物館の協力の基、校内で実演し地域伝統芸能への理解を深める。

10月

筑紫野市歴史博物館と話し合い、学校単位または少人数で出来ることを検討

11月

全学年で山家岩戸神楽鑑賞
保存員の方から神楽の説明を受ける

担当教員の 声

神楽鑑賞は生徒にとって新鮮で、伝統芸能を継承していくことの大切さや実際に神楽を目にした感動は興味・関心への大きな一歩だと感じた。中には初めて神楽を見て、リズムや演者の距離感を練習するのは難しいと言っている生徒もいた。

Supporters

保存員の一人で
ある本校OB、
筑紫野市歴史博物館



神楽保存会の方へ生徒から花束贈呈



Activity 筑紫野・太宰府フィールドツアー

1-2年生
667人

1年生は貸し切りバスでそれぞれの施設を訪れ、地域の歴史文化に触れる機会を作る。2年生は地元の歴史的地域を実際に歩いて移動し、その場所の歴史調査、「鶯」の絵付けや梅が枝餅の作成などの体験学習を行う。各学年に合わせた歴史文化への興味・関心を養う。

2年生の太宰府天満宮訪問

11月

鶯の絵付け、梅が枝餅の作成の体験学習
大宰府政庁跡・戒壇院・観世音寺・九州国立博物館の調査研修

1年生の鴻臚館・九州歴史資料館・九州国立博物館巡り

12月

地域歴史の研究
実際に訪問して感じたことを短歌に詠む

Supporters

太宰府天満宮、
太宰府政庁跡、
戒壇院、観世音寺、
九州国立博物館

担当教員の 声

これまで深く関心のなかった生徒も、この機会に自分がどのような文化背景の中で生まれ育ったのか考えることに役立ったと思う。

つばやき・想い

「研修で詠んだ1年生の短歌」

この冬に 遅れて顔出す 紅葉たち
寒空の下で 赤く燃えてる

(男子生徒)

大宰府の 歴史ただよう 政庁に
前世の私も 訪れたかな

(女子生徒)

プロジェクト経費の使いみち

山家岩戸神楽鑑賞▶▶演奏者謝礼・
旅費

筑紫野・太宰府フィールドツアー
▶▶-

その他のActivity

ユネスコ寺子屋プロジェクト▶▶活動
冊子印刷費、文具費



鴻臚館跡で説明を受ける生徒たち

Data 福岡県立武蔵台高等学校

学校長	<small>なかむらしんいち</small> 中村慎一
所在地	〒818-0053 <small>ふくおかけんちくし の し てんぱいざか</small> 福岡県筑紫野市天拝坂5-2-1
TEL	092-925-6441
FAX	092-928-0767
E-MAIL	info@musashidai.fku.ed.jp
HP	http://musashidai.fku.ed.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2009年8月
プロジェクト担当教員	<small>みぞた やすひこ</small> 溝田康彦 [担当教科:理科]



自国の文化を知り、
未来に残すべきものを
捉える機会

(NPO 法人
京田辺シュタイナー学校
山田充)

ESDを通して子どもたち
の未来を希望に満ちた
明るくものにしたい

(奈良県奈良市立富雄北幼稚園
桐野ゆみ)

ESD実践は他の機関や
学校とも交流を図ったり、
学ばせていただく機会が
ある

(羽衣学園高等学校
米田謙三)

地球環境を守るとい
うこと、今の生活を維持
するということの大切さ
を再認識するもの

(石川県金沢市立西小学校
村澤弘子)

地域の人、歴史、自然
等の良さや「つながり」
を理解するもの

(宮城県気仙沼市立馬籠小学校
横山清一)

ESD実践は学校で学ぶ
目的を明確に児童に
示すことができる

(大阪府豊中市立上野小学校
益川直子)

地域社会との関係を
深め、多文化共生理解
への糸口となるもの

(国際学院高等学校
大野満奈)

Teacher's Column
あなたにとっての
ESDとは

今津干潟の環境に関する 調査・研究と保全活動

今津干潟には「生きた化石」と呼ばれるカブトガニや絶滅危惧種ⅠA類のクロツラヘラサギなどが生息するが、近年の都市化やダム建設での環境変化で何れも個体数は減少している。全国的に干潟環境や生物多様性に関心が高まり、福岡市環境局や地域住民の保全活動は活発となっている。本校でもESD活動として実際に現地調査を行い保全活動へ協力し、生徒の身近な環境への関心や環境問題に関わる態度を育成する。



Activity

今津干潟の環境に関する調査・研究と
保全活動

1-3年生
100人

理科や公民の授業で干潟環境や生物の多様性などを事前学習。総合的な学習の時間を使い様々な講師を招き講義を受け、後日干潟での現地調査を行う。調査・研究結果をもとに地域住民との保全活動に参加し、報告書を作成。環境問題を地域から世界へ考える活動につなげる。

11月 「こうのす里山くらぶ」代表の講義を受ける

九州大学大学院特任助教の講義を受ける
今津干潟にてクロツラヘラサギ、カブトガニの観察
今津干潟カブトガニ産卵場整備活動に参加

担当教員の 声

講師探しが難航したとき、地域の様々なNPO団体、大学、行政の方々に協力していただき、何とかESD活動をスタートすることができた。ESD活動は学校と地域の人的な繋がりが大切であることを実感した。

Supporters

こうのす里山くらぶ、
九州大学大学院、
今津干潟保全協議会、
北九州市環境ミュージアム、
福岡市環境局温暖化防止部、
地域住民



九州大学での生物多様性についての講義



つばやき・想い

「環境局職員と生徒の交流」

今回初めて高校生と保全活動を行い、非常に貴重な体験をすることができ、休憩時間にも熱心に質問する生徒に感心しました。この活動をこれで終わらせるのはもったいないと感じました。

プロジェクト経費の使いみち

今津干潟の環境に関する調査・研究
と保全活動▶▶講師謝礼、バス借り上げ代、活動報告書印刷費

Data 福岡県立城南高等学校

学校長	<small>まつきのりあき</small> 松木敬明
所在地	〒814-0111 <small>ふくおかけんふくおかしじょうなんくちやま</small> 福岡県福岡市城南区茶山6-21-1
TEL	092-831-0986
FAX	092-823-0386
E-MAIL	jonan-h@pref.fukuoka.lg.jp
HP	http://jonan.fku.ed.jp/
ユネスコスクール 加盟時期	2010年7月
プロジェクト担当教員	<small>にのみやこうじ</small> 二宮浩司 [担当教科:社会]



子どもたちとおとなたちが持続可能な未来への希望を抱き、今、ここから将来世代の人々にとっても持続可能な地球・地域の暮らしや学びを継承し続けるためには、右図のような立体的な構造をイメージしながら、持続可能な未来の希望のための教材を活用し教育活動を行っていききたいものです。

広くは地球・国や地域・保護者、学校と各教科・領域の授業に支えられながら、子どもたちは持続可能な未来のための学びをしていきます。

また、わたしたちおとなは、持続可能な未来に羽ばたく子どもたちを仰ぎ見ながら、各教科・領域の授業のつながり、学校と地域・保護者とのつながりを広げ深め、子どもたちもおとなたちとともに、持続可能な未来のために必要な知識・知恵、リテラシーやスキル、生きる希望や自己肯定感を高めていくことができるのではないのでしょうか。

子どもたちはおとなより小さく見下ろすような位置にいたり、成長とともに大きくなり見上げるような位置にいたりしますが、わたしたちおとなは、常に未来への希望に羽ばたく子どもたち・年少者を見上げる位置にいて支えているというイメージを持って接したいものです。



持続可能な未来の希望のための教材活用概念図 (I)

平成21年度文部科学省委託「日本／ユネスコパートナーシップ事業」『ESD教材活用ガイド 持続可能な未来への希望』より

A grayscale world map is shown in the background. The map is centered on the Pacific Ocean, with Japan highlighted in white. The rest of the world is in shades of gray.

ESD実践事例 48

実践事例からの
考察

ユネスコスクールにおける ESD活動の成果と課題に関する 一考察 —実践前後における回答を比較して—

丸山英樹（国立教育政策研究所）

はじめに：ESDの特性と日本のユネスコスクール

本稿の目的は、今回の活動に参加した48校が経験を共有できるようフィードバックすることである。各学校は事前に応募用紙兼事業計画書（以下、計画書）（本書p.200～p.203）を、事後に活動報告書（本書p.204～p.206）を提出しており、それぞれの経験を詳しく記していた。本稿は、その中で記された貴重な意見を共有することによって、参加校のみならず他の200以上のユネスコスクール・ネットワーク加盟校や加盟を検討している学校が、自らの学校における実践を相対化し、さらに質の高い学習機会へとつなげる一助になることを望むものである。

はじめにお断りしておくが、計画書及び活動報告書で使われた質問項目には、活動的なユネスコスクールにおける実践には相応しくないものも含まれていた。また、こうした外部の者が調べる際には常に方法論上の倫理が存在し、特にESDのようなボトムアップ型アプローチが主流であるべき活動には一般化を想定した集計そのものが不適切である場合も少なくない。しかしながら、こうした限界を認識した上でも、将来にむけてユネスコスクールにおける質の高い活動経験を共有するためには、いずれかの段階である程度の一般化が必要になる。つまり、ESDに取り組む際、従来の先進的实践との違いはどこにあるのか、また国連ESDの10年（DESD）が2014年に終わるにあたりESDと捉えられる実践とはどのようなものか、を改めて確認するためにも、今回のような細かい質問項目を設定し、一度は見ておくことも無駄ではないと考えられる。また、ESD実践やユネスコスクールの量ではなく質が問われる時期にすでに入ってい

る今日、行政、研究、実践の間において建設的な協力体制をさらに構築することが求められる。今回の分析はこのことにも資する情報提供を意図したものである。

以下では、まずESDの特性とユネスコスクールについて概観した後、今回の活動の計画段階と実践後の感想をもとにESD実践の枠組みについて参加した各校の変化を大まかに捉える。

1 ESDの特性

国連DESDをレビューしたユネスコ報告書⁽¹⁾では、ESDのモニタリングと評価において次のようなESDの持つ基本的な学習を想定していることが示されている。すなわち、ESDは、ドローール報告書⁽²⁾で示された4本の柱（「知ることを学ぶ」、「人間として生きることを学ぶ」、「共に生きることを学ぶ」、「為すことを学ぶ」）に加え、「自分と社会を変えることを学ぶ」という5つ目の基本的な学習を目指している。そのため、ESDには、持続可能性についての価値観と認識を、学校だけでなく日々の生活に組み込むこと、新しい知識によって人々を力づけること、すべての生命を大切にす包括的アプローチ、既存の教育に新しい方向性を見出すこと、などが求められている。

また、同報告書には97か国がESDについての報告を寄せているわけだが、多くの国々が強調したのは、ESDが価値主導という性格を持ち、社会参加を可能とすること、そして社会経済的・生態的・文化的・論理的な要素を統合するバランスのとれたアプローチに重きを置いていることも記されている。さらに、教育学的特徴として浮かび上がっている点には、1) 知識・態度・価値・行動を伝える手段としてのESDと2) 持続可能性の問題とそれに関わる能力・機会を開発するための手段としてのESDがある。どちらも「万能薬」としての普遍的な教育としてのESDではなく、地域や文脈に従った教育のあり方を強調しており、同時に学校教育の枠に限定せず、生涯学習としての人の成長を重視していることは、注目すべきであろう。

2 ユネスコスクールの質保証

日本においてはユネスコスクールがESD実践の先進事例を行う立場にあると言っても過言ではない⁽³⁾。それは国連DESD最終年（2014年）に向け、文部科学省が2008年以降ユネスコスクールを強く推進していることでも明らかである。一般的に教育の量的拡大に伴って、あるいは続いて発生する課題の中に、

その質の保証がある。先行研究⁽⁴⁾の成果によると、日本に限らず、他国においてもユネスコスクールの質保証が課題になっている。例えば、ユネスコスクール・ネットワーク (ASPnet) の構築と発展を扱った研究では、1980年代の冷戦時代に自主的に開始されたバルト海プロジェクト (the Baltic Sea Project: BSP) が取り上げられている。BSPは、その活動の継続性と質の高い取り組みによってユネスコ本部からも高く評価されている。質保証について、調査研究からは、内容自身よりも、次のような枠組みに関する示唆深い知見がある：

- ESD実践の手法は、実践する教員たちが校内の協力体制を構築した上で、ボトムアップ型の意思決定を行い、行政はその活動の支援に特化した業務を担う。
- 環境問題から始められた教育実践ネットワークだったが、関連課題を各自持ち寄り、協議を重ね、シンプルなものから共同で始めているため、実践コンテツより枠組みを重視する。
- 実践を行う者は理科の教員が大半を占めるが、理科教育だけを強めるのではなく、歴史学や地理学、文化人類学など他学問も用いた包括的アプローチを取る。
- BSP教員研修は実践的ニーズに対応する半構造化の参加型で、参加教員が各校へ有益な共有知識・体験を持ち帰ることができ、交流を継続できるネットワークを構築している。
- BSPへの参加には一定の義務が発生し、活動ができなくなった場合には、自主的に外れる場合がある。しかし、排除の性格はない。

こうした、それ自身が持続可能となる特徴を持つ取り組みは、すでに日本でも展開されている。例えば、著者の観察⁽⁵⁾によると、大阪ユネスコスクール・ネットワークによる「学び合い」実践では、BSPと同様のアプローチが取られ、主体的な活動の広がりを見せている。特にアジアの6か国からの参加者自らが国際的な教材を共同開発し、それを各国における地元のネットワークで学習を相互作用的に行っている点は、今後の他のユネスコスクール・ネットワークにおける実践の際に参考となるアプローチであろう。

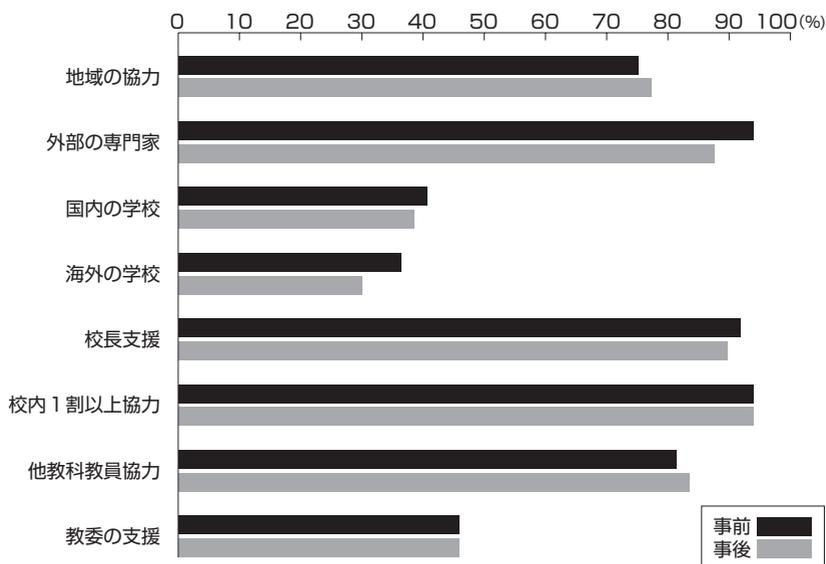
ユネスコスクールにおけるESD活動の様子

それでは、今回の活動の様子を参加校からの報告をもとに見ていこう。まず、計画書及び活動報告書における質問群の構成を紹介しておく。計画書には活動時期や予算といった計画の他、実践内容や手法に関する設問が多く設置され、各校の担当者はこれらに回答した。その設問には、大きく次のような関連事項が含まれた：1) 実施体制、2) 地域社会との関係、3) 子どもたち及び大人への影響、4) 活動のキーワード、5) 活動の教育（成果）目標、6) 自由記述である。これらの質問内容は、上記『ESDの10年中間年レビュー』及び著者の参加する共同研究⁽⁶⁾で議論されている枠組み、教育手法・内容、課題をもとに構成された。特に分析枠として、その共同研究の成果を援用している。以下、6点を順にみていこう。

1 実施体制について

ESDは教室の中だけで完結する実践ではない。また一人の教師だけが努力すれば良いものでもない。そのため、まず学校内外における協力体制につい

図1：実施体制



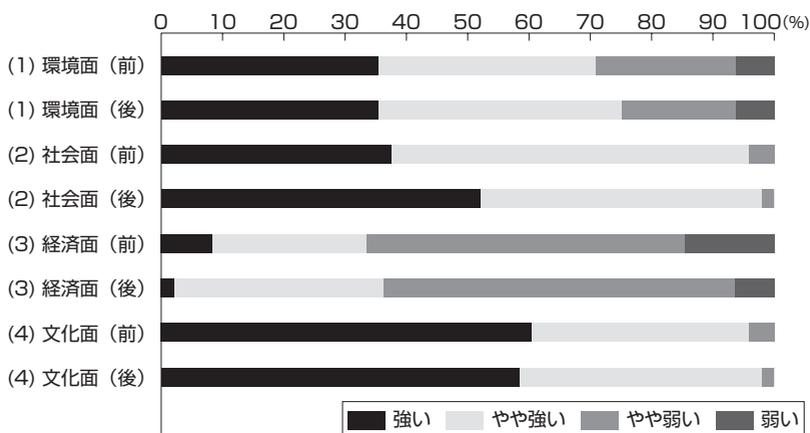
てた。その結果、地域や外部の関係者との協力体制がすでに存在しており、それは数か月の実践の後も大きく変化しなかったことが分かる(図1)。図中、棒グラフは実践を行った48校中の回答比率を示し、「事前」は計画書で寄せられた回答、「事後」は実践後の活動報告書での回答である。

これらの項目では、ESD実践に必要な協力体制を想定していた。地域や外部専門家からの協力の他、ドイツで実施した調査結果⁽⁷⁾でも見られたように、学校内における協力体制も重要であることから、校長からの支持に加え、約1割の同僚と他教科の教員との協力体制をたずねた。これらに関する回答比率は70%を常に越えて、中には90%を越えるほど高く、多くの申請校がすでに協力体制を持った上で申請し、それらは活動中も維持されていたことが考えられる。また、国内外の学校との連携は30～40%と、それほど多くは見られなかった。ただし、半数弱の学校が教育委員会からの支援を受けていたことも分かった。

2 地域社会との関係

ESD実践における大きな特徴は、教科横断的アプローチが求められるだけでなく、環境面に加えて、社会的・経済的・文化的側面も扱う点にある。この点について、今回のESD活動が各側面で学校・地域社会に与えるインパクトがどれほどかをたずねた結果が、次の図2である。質問では「強い」、「やや強い」、「やや弱い」、「弱い」という4段階での回答を求めた。図中では事前と事後を

図2: 活動が与える地域社会へのインパクト

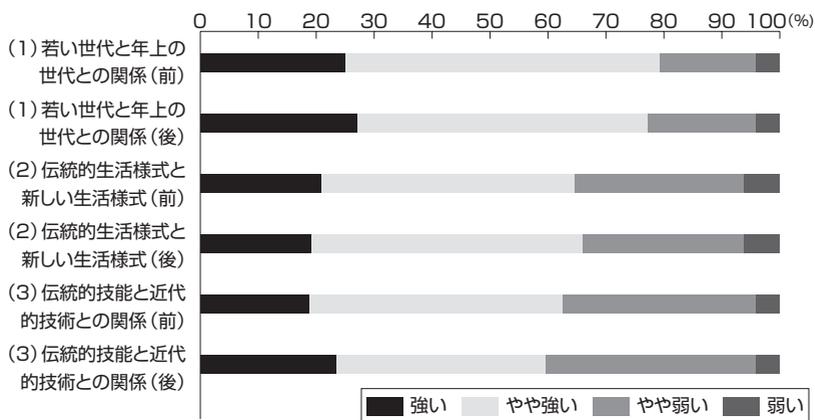


それぞれ「(前)」と「(後)」で示している。

想定されたインパクトは、文化面、社会面、環境面という順番で強く、経済面は比較的弱いことがここでは分かった。これは、バルト海プロジェクト (BSP) での調査結果と同様の傾向であり、ESDをはじめとする教育実践の課題でもある。しかし、事後の経済面でわずかながら「やや強い」が増え、「弱い」が減った。他方では、文化面におけるインパクトを想定し、想定通りに近い実践成果も見られたことを各校が報告していることも注目すべきである。それに比べ、環境面では大きな違いは見られず、環境教育で自然環境に特化した取り組みとはアプローチが異なっていたことが想像される。

ところで、ESD実践において扱うべき大きな概念に「デベロップメント(開発、発展)」がある。上の各側面は経済的發展だけがデベロップメントではないことを示し、バランスの重要性としてのESDの横軸だとすると、次にたずねた質問は縦軸に該当する。すなわち、時間軸である。基本的に教育では短期的成果を見るものではないが、近年の教育実践においてはそうした観点は置き去りにされがちである現実も存在する。持続可能な開発のためにはより長期的のスパンで取り組む必要が多くの場合で指摘されるように、また開発によって伝統が失われるという抵抗感、あるいは近代技術の方が常に優れているという観点を、どこまで意識しているかをたずねた。その結果が、次の図3である。まず、少子高齢化や後継者不足などの課題性を含む世代間の関係について、与える影響を「強

図3: 時間軸を意識したデベロップメント



い」及び「やや強い」との回答は、約8割の活動が意識していた。次に、伝統的生活様式と新しいものについては約6割が、そして伝統的技能と近代技術についても同様であったが、それぞれわずかに少ないことがわかった。

実践前後で大きな変化は見られなかったが、「強い」と「やや弱い」が増加した場合が見て取れる。例えば、世代間の関係について、事後の方でそれらが増加し、「やや強い」が減少した。個別の実践を詳しく見ないといけませんが、予想される背景としては、実践後に結果がより明確になったことが考えられる。伝統技能と近代技術の関係においても同様の結果が見られるが、いずれもわずかな変化である。

3 子どもたち及び大人への影響

ESDでは、持続可能な社会の構築のため、自分自身のためだけでなく、自分に加えて社会を変える教育という視点を他の教育実践よりも強く持つ。そのため、この活動によって参加する子どもたちへの影響と、教育実践ではあまり意識されることのない大人たちへの影響について、ライフスタイル、行動、価値観の3つについて、ここではたずねた。これらの点は、持続可能な開発をテーマに掲げたヨハネスブルク・サミットのオープニングでも言及されていた⁽⁸⁾。また、ESD実践を行う小学校では環境教育との違いを実際に行動に移せるか否かであると語られていた⁽⁹⁾ことから、ライフスタイルや行動への影響は重要である。

生徒の変容についての結果は図4、大人である教員については図5のとおりである。これらの結果から、すべてについて強く意識されていたことが分かるが、その度合は価値観により強い注意が払われており、それは教員も対象に想定されていたことが分かる。設問項目として、ライフスタイルという単語、また行動変容についても必ずしも共通の理解のもとで回答されたとは限らないことも想定されることから、すべての回答をまとめた後の平均値には高度な信憑性があるとは言えない。しかしながら、時間を経た活動前後の回答であるにもかかわらず、ほぼ同じような回答が寄せられた点において、各校の担当者における各校の解釈には大きな揺れはなかったと想像される。

今回は短い期間での実践であったことから、この結果が大きな変化を示すとは言いがたい。しかし、当初からこれらの側面について主体となる生徒の変容に期待が寄せられ、実践結果を見ても、回答した担当教員にはそれらの期待に応えたと捉えることができるだろう。

他方、教員に対する期待は、数校が「やや弱い」と報告したに過ぎないが、わずかに実践後で減少傾向が見られたといえる。これは大人の場合、変容にはさらに時間を要するという解釈も可能かもしれない。

図4:活動主体の変容に対する意識(生徒)

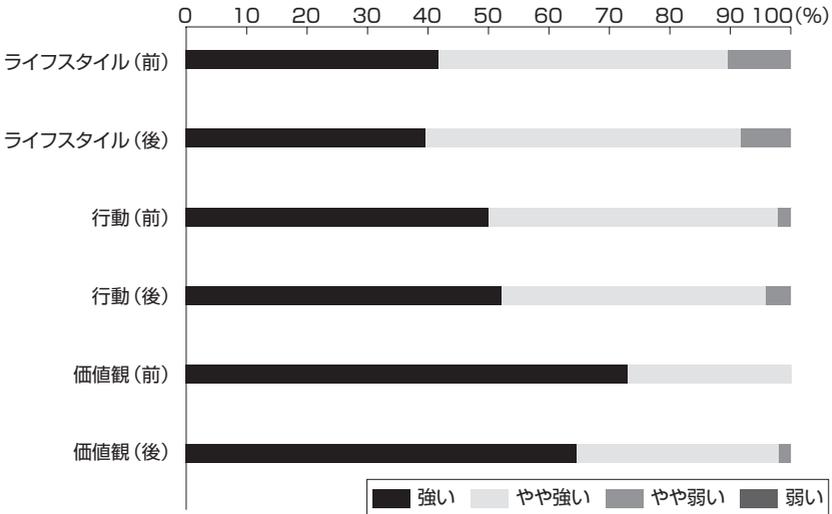


図5:活動主体の変容に対する意識(教員)

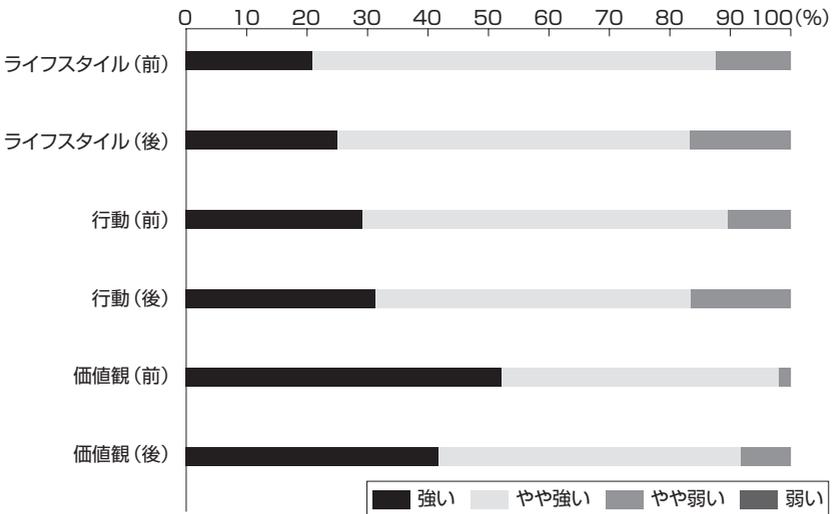
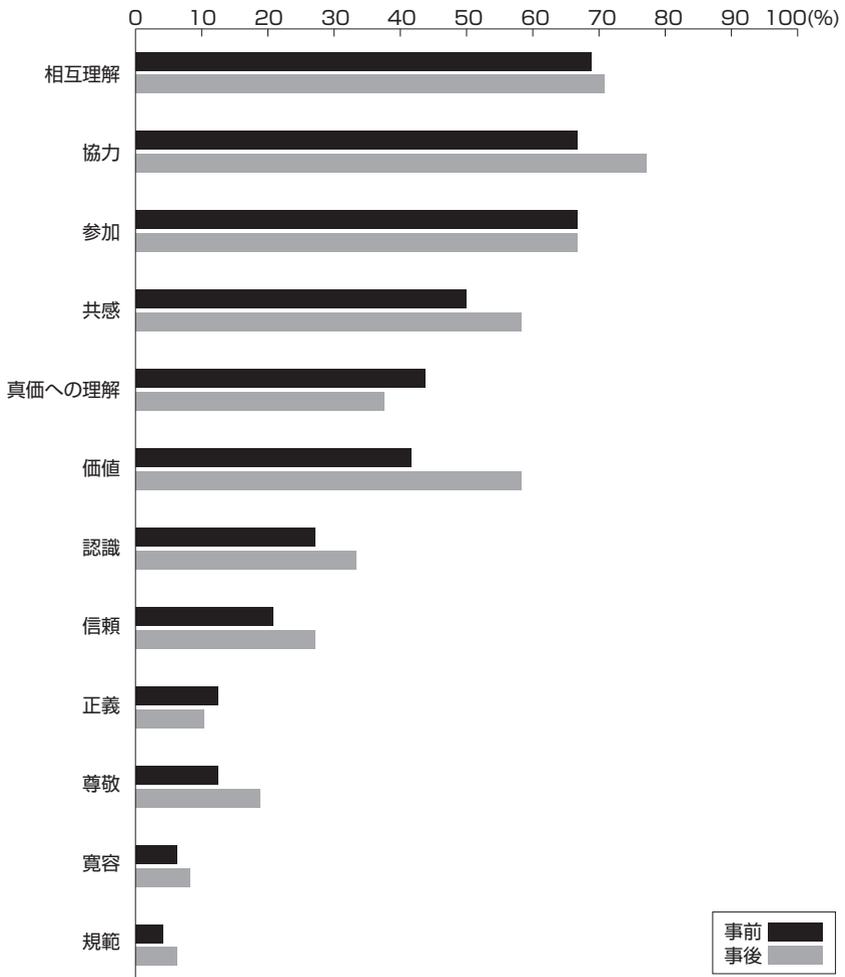


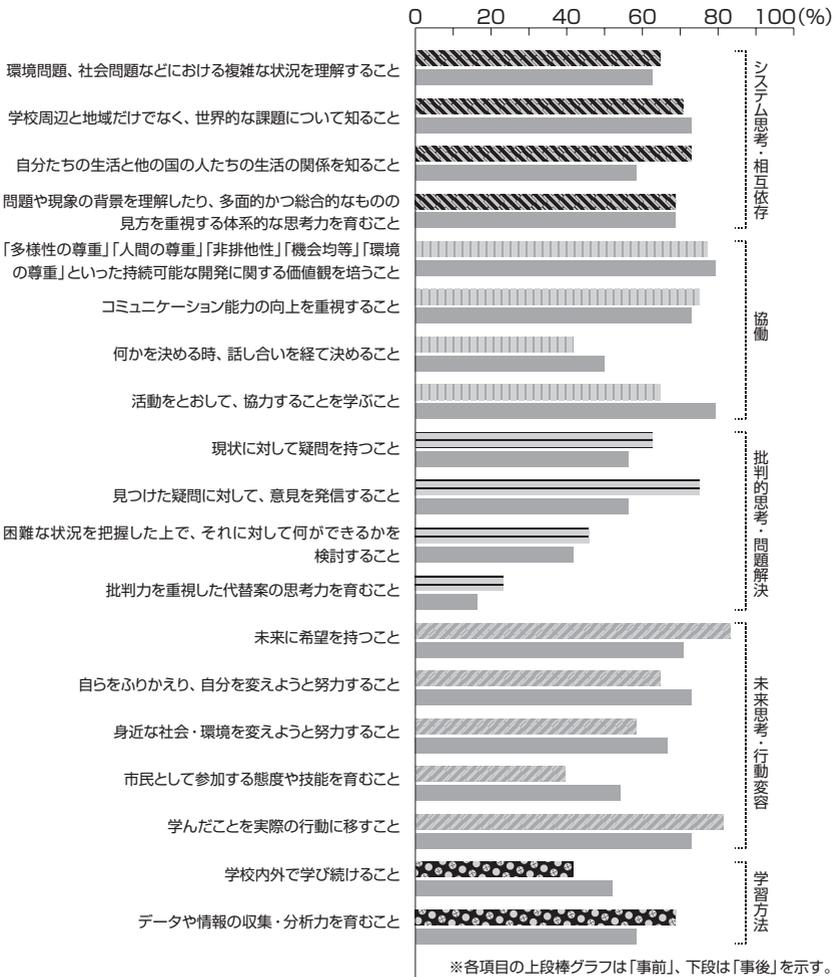
図6:活動における重要なキーワード



4 活動のキーワード

よりESDをイメージするために、図6で示される項目で示される活動の重要なキーワード群から選んでもらった。中には抽象的な単語があるものの、アプローチに関するものが高い割合を占めており、正義、寛容、規範といった内容的なものは低いことが分かる。実践前後を比べると、ほとんどの項目で増加が見られた。目立つのは、「協力」、「共感」、「価値」の増加であろう。

図7:学習効果と方法に関する概念



5 活動の教育(成果)目標

最後に、活動の目標として達成したい(事前)・達成した(事後)内容をたずねた。それぞれの質問項目は図7で示されるが、模様分けされているように、5つの構成概念をたずねた。各概念の分類は、で示される「システム思考・相互依存」、の「協働」、「批判的思考・問題解決」、「未来志向・行動変容」、「学習方法」である。また、各項目の棒グラフに続く下の棒グラ

フは、報告による「事後」の比率を示している。

図7の各項目を見てみると、約7割の実践が複雑な状況を把握するための包括的アプローチを取っており、6割以上の実践がコミュニケーションなどの共に学ぶ・活動すること、自らの行動を変えることを想定していたことが分かる。しかし、ESDによって社会を変えるという視点は今回では約半数の活動が想定していたようである。学習の方法としては2つの項目しかないのだが、学内外で学び続けることは約7割の活動が考慮されていたこともわかる。

5つの構成概念を平均した比率は前後で表1のように変化した。中でも「協働」は活動後に大きくなっており、協力しながら活動した、あるいは協力する姿が見られたことがうかがえる。しかし、「批判的思考・問題解決」は減少しており、短期間の活動で社会に積極的に関与するまで根柢を見出すまでには至らなかったことが想像される。ただし、批判的思考と問題の発見と解決は一つの概念として常にまとめられるものではない点は留意すべきであろう。それよりむしろ、この減少は、ESD実践において取り組みを深めるほどに問題の大きさや複雑さなどに直面し、さらに奥深い学習活動が求められ、短期間では限界があると認識されたとの解釈もできる。

他の分類では有意差は見られず、微増減にとどまった。ここでも、全国一律で扱うべきと捉えられがちな教育内容である「システム思考・相互依存」よりも、それぞれが内容に工夫の余地を担保でき、地域性に寄らないアプローチとなる「協働」が強かったと判断できる。

表1：活動の教育目標と成果の回答比率

構成概念	事前 (%)	事後 (%)	図7中の模様
システム思考・相互依存	69.3	65.6	
協働	64.6	70.3 *	
批判的思考・問題解決	51.0	42.2 *	
未来指向・行動変容	65.4	67.5	
学習方法	55.2	55.2	

* P<0.05

6 「事前」段階で示されたESDのビジョン

質問項目ではESDに関して自由に記述をするパートを用意し、それは48校

中35校の申請校が「事前」で、48校すべてが「事後」に回答を寄せた。それらすべてを紹介することはできないが、いくつかの傾向を読み取ることができる。ここでは「事前」の記述に注目し、「事後」については次節でまとめていく。

最も多く見られたのは、ESDの基本概念である「つながり」に関するものであった。教員同士、保護者と教員、地域や海外の人と生徒、外部関係者と学校、他校と申請校といった、人と人とのつながりが多く記された。同時に地域性を高めた教材、つまり従来の各教科や標準化された教科書・カリキュラムではなく、子どもたちの生活や地域文脈に合わせた教材の有益性も示唆された。包括的アプローチが求められるESD活動で特徴的な教科間の連携も重視されたが、同時に「総合的な学習の時間」との違いとして教科の中における持続可能性についての記述も見られた。

第2に、教員自身の研修に加え、教員間の交流や連携による研修効果について記したのも少なくなかった。例えば、校内研修でESDが扱われ、学校の運営方針に関して話し合いが展開された。予算がつくという点において、今回の活動は校内でも説得力を持つ立場を作ることを可能にしたようである。

第3に、学力に関連する内容であった。各教科学習で培った力を具現化する教育をESDとして捉えていたり、教科を学ぶ意味や教科間の接続を保証するものであるとし、子どもたちの総体としての力を育むことを意図が見られた。他にユニークな指摘としては、行動を決断する際に持続発展性を道徳的尺度と捉える立場やユネスコスクールにおける人権や平和の拡充を求めるものが見られた。

ユネスコスクールの今後に向けて：4つの成果と1つの課題

では、活動を終えた後、各学校ではどのような成果があったのか、また課題として捉えられたのであろうか。本節では、前節までで扱った「事後」報告における選択式項目への回答を補足しつつ、主に自由記述の内容を扱い、活動の成果と課題をみていく。

「事後」の報告ではすべての質問項目において自由記述部を用意したことから、様々な意見が寄せられた。一つの項目で2000字を越える記述もあり、すべての報告を取り上げることは不可能であるが、類似の内容やポイントだけに絞ると、今回の活動による教育・学習成果としては大きく4つ、課題として1つ特

徴が見られた。その他、1点だけ重要な指摘を取り上げる。以下では、これら6つの点を整理する。また、引用は中略する場合があるが、学校名を除きそのまま転記してある。

1 成果1:学校内外の協働・連携

まず挙げられることは、学校内における教員同士の連携、学校外の地域の人々や専門家と学校の連携、また保護者からの支援が記された。これは、「事前」の「つながり」にも該当することから、当初の計画通りの成果を得ることができたと捉えられる。

例えば、「職員全員がESDを理解し、様々な教科・領域において新たな実践が積み上がってきた…」ことや、「学校全体のプロジェクトとして進めており…交流参加の教員や生徒がさまざまな場で発信することにより、他の教員や生徒への広がりのある活動」へと発展したことは、学校内における連携を促進したことを意味する。前節の生徒の様子が最も前向きに変化した点として、協働・協力が挙げられており、これは教員においても同様であったことが考えられる。

また、「口では簡単に人とのつながりが大切だと言う…改めてそれを心から実感させられた。校内の先生方の協力はもとより…地域の方々、その道の専門家の協力なしには成し遂げられなかったものばかり」、「学校でどんな取組をしているのかということ発信し、地域に広く受け止めてもらい、地域ですべきことは何かを真剣に考えていく社会づくりまで発展していかなければ、今までの学校教育と何ら代わりがなくなってしまう」、「今回新たに実施したESDの活動を発表会や地元紙などを通して知り、学校に対する信頼がより深まった」という学校の外との連携を記したものが多かった。「県外就業率が非常に高く過疎化がすすむこの地区において、伝統文化の継承と同時に地域の活性化を目指して学校と地域が連携して取り組むことの大切さを強く意識するようになった」とのように、地域社会の持続可能性にまで想いを馳せる実践もあったようだ。

さらには、「保護者は、子どもの変容から親の私たちも変わらないわけにはいかないと感想をいただいた」と、自らを振り返る機会を得たという場合もあったようである。こうしたことが保護者からの支援を得るきっかけとなったことが想像される。

2 成果2:教科間の連携と包括的な取り組み

学校内における連携には成果1のような運営面でのものが指摘されていた

が、中学校より上の学校では教科に関する連携についても回答が寄せられた。これについても「事前」の記述で教科を越えた連携が重要だと記されていたように、活動内で実際に行われていたことが分かる。

例えば、「…多くの教科の先生に校正をしていただき…意見のすり合わせをする良いきっかけとなりました」や、「先生方も各教科で大切にしなければならない教科の特性を追求していくと同時に、教科の横断や合科ということも柔軟に適応していかなければ成立しないのではないかとということもより明確になってきたのではないか」、また「ユネスコ・スクールならではの国際システムの理解が本活動を通し、深まっている。地域・保護者の関心も高く…ともに考えていく題材である。本校の取り組んでいる総合的な学習の時間、生活科学習と他教科・領域とのリンクを更に検討し、深めていきたい」、「米国との交換学習／平和学習というどうしても英語／戦争を取り扱うイメージがあるが、日本史、世界史のみならず国際クラス、商業情報科、書道科、数学科や美術科なども参加、それぞれの教科の特色を活かし、斬新な切り口で広くテーマに迫ることができた」といった指摘がなされた。特に、活動に対して教科の視点から内容的に深めることは、それぞれの教科の強みを発揮しつつ、担当教員の参画を高めるきっかけとなるため、重要である。

3 成果3: ネットワークの強み

ユネスコスクールはネットワークに強みがある。これは、「学校が違えば文化も違う⁽¹⁰⁾」と言われるように、同じ地域に位置する学校の間でも異なる視点や手法が存在するため、ネットワークによって国内外の異なる文化から刺激を受ける可能性が高いことを指す。OECD生徒の学習到達度調査(PISA)の知見として、世界的な教育改革の動向には学校組織は規定的・階層的なものから水平的・平等なシステムへの流れが見られる⁽¹¹⁾ことから、本来、水平構造を持ち、経験を共有しやすいユネスコスクール・ネットワークは、その流れに従っている。

「ESDを実践する上で、大切なことは『連携』であるということ。本校は同じユネスコスクールのA商業高校と連携し、国際理解についてA商業高校から学んだ。環境教育からスタートした本校であるが、ESDを実践していくと、環境教育＝ESDではなく、国際理解やエネルギー等も学ぶ必要があるということを感じた」といった例が典型的である。また生徒同士も経験を共有することによってネットワークの恩恵を受ける。例えば、「相手のことをしっかりと考え、それをま

た自分たちの活動に取り入れること。そのためにはコミュニケーションが欠かせないことを一番学んだ」ことが指摘された。また、「実際に英語を話す機会があったことで、英語活動での会話と異なることに気付き、海外に伝えるためにはどうすればよいかを考えることができた」という外国語学習への動機付けにもネットワークは機会を多く提供する。

4 成果4:教員の生涯学習

最後に、教員自身が学ぶ機会を得たことが挙げられる。例えば、「…とはいえず、一番学習し、身に付けたものが多かったのは、主担当だった私自身而言えよう」や、「ESDカリキュラムは全教育課程の根底に脈々と流れるものであり、私自身のESDへの理解と行動が深まるにつれて、子どもたちの理解と行動も深まっていきます。ESDは子どもたちをより人間らしく豊かにし、子どもと子ども、子どもと大人、大人と地域を結んでもくれます。ESDは特別な取り組みではなく、毎日のあらゆる教科の授業の中に存在しています。そのことに気がつくようになると、ごく自然にESDを実践できるようになります」という内省的な視点を記述した回答が見られた。

「持続発展教育についての生徒・保護者の認識は想像以上に高まっている。それに比較すると教師の認識は著しく遅れている。今後は、指導する側の教師の育成が必要だろう」や、「これまでの学校の実践をESDの視点で捉え直すことで、自分たちの教育実践を再評価することができた」といった今後の方向性について気づきを得た回答も見られた。

教師教育はDESD開始当初からUNESCOで扱われ⁽¹²⁾、OECDも教師を常に「専門的知的労働者」として捉えるなど教員養成の重要性を指摘してきている⁽¹³⁾。だがここでいう「専門的」あるいは「知的」が意味するところは、教員養成にかかる高等教育を延長することで得られる知識と技能ではなく、子どもや保護者とのコミュニケーションと、教師として、さらには大人としての経験や暗黙知を活用し、必要に応じて共有できるという高度な専門的技能のことを意味する⁽¹⁴⁾。生涯学習という観点からユネスコスクール・ネットワークは教師も育てる機能が見られる。従来の学習の機会であるプログラム化された教員研修や養成過程では当然であるが、このネットワークではよりダイナミックに水平的でインフォーマルな情報共有がなされることで、時に教師としての成長に大きく寄与する。このことは、例えばバルト海プロジェクト(BSP)でも頻繁に見られる⁽¹⁵⁾ことから、日本においても今後大いに期待される。

5 課題:行動変容と高次の思考能力獲得に必要な時間

以上のような成果と同時に課題も存在した。いくつかの回答で見られたのは、当初に計画した「子どもたちが持続可能な社会に向けた行動を取るようになる」ことは、活動を通じて必ずしも達成できなかったという趣旨の記述であった。これは純粋に活動期間が限られたプログラムであったことが最大の背景にあるが、記述の中には行動を起こすことをより強調すべきとの指摘もあったことから、少なくとも行動の変化を生み出す方向で活動が展開される可能性が存在したことを意味する。

例えば、「本校の目指す『広い視野』と『主体的な行動力』が育ちつつあるが、価値観やライフスタイルを変えるまでにはもう少し時間がかかりそうである」と直接的に記したものや、「参加に似ているが、ESDにおいて最も重要な「行動」を入れるべきだと思います」という質問紙に対する指摘もあった。他にも、「当初の目的を達成することができたと思うが、学んだことを実際の行動に移すところまで、今回の授業では行かなかった。授業での学びをどのように今後、生徒の生活で活かすかが課題である」や、「『社会がこうなるべき』とか『国がこうすべき』とかという考え方になっていました。学習を始めてから他人事ではなく、自分の身の回りの行動が社会や世界や地球のことにつながっていることを感じました」といった重要性が記された。教育によって得られる個人の能力などは常に即効性を伴うわけではないものの、学校教育という一定の条件下で明確化したい教育成果を想定する場合、ESD実践による成果、特に行動変容については把握が困難である制限もある。

また、この課題は前節の表1及び図7で示された「未来指向・行動変容」の増加傾向とは完全に一致するわけではないが、活動後に想定していた「批判的思考・問題解決」は減少したと関係することが想像される。行動することは社会に対してより参画することであり、自分自身の生活と学習を連動させ問題意識を高めた上で行動へとつながるためである。その行動の動機や方法を支えるものが、問題の解決を想定した自らの批判的な分析である。こうしたESD実践を通して育成されるメタ認知を伴う高次の思考能力⁽¹⁶⁾については、今回のような短期間の活動だけでなく、学年や学校段階を越えた教育の取り組みの中でみていく必要があろう。さらには教育政策の一貫性も問われることでもある。

しかしながら、行動変容が見られた場合もいくつか存在した。例えば、「自分たちが変われば世界も変わるといったコメントがでてきたことから態度や価

値観の変容が見られた」や、「生徒の中には、すでに里山の保全活動や、カブトガニの保全活動に参加ようになった者もあり、生徒が主体的に環境問題に関わり、行動するようになった」という例もあり、多くの制限の中でも行動変容に近づけることも可能であることが分かった。

6 その他、重要な指摘

上記5つの点の他に、重要と思われる指摘について1点だけ取り上げる。それはコミュニケーション能力が今の若者が身につけておく重要な力とされている中、表面的な技能を身につけることで終わっていないかという趣旨の指摘である。つまり、「…活動してきたことに一定の理解を持ってはいたが、プレゼンテーションやリーフレットづくりに目が行き、活動の目的があいまいな部分があった」のである。このことは、コンピュータを使ってプレゼンテーションを作成、それをを用いて発表するという行為が重視されるだけではコミュニケーションとは呼べないという解釈ができ、学校における実践のみならず、ESD活動を支える研究者や行政担当側にも、高次の思考能力と本質的な理解⁽¹⁷⁾が求められることを示唆する。学校の子どもと教員だけでなく、ESDに関わる者がいかなる立場にあっても、内省的に問いかけ、自らの行動変容が求められていると言えるのではなかろうか。

以上、成果と課題についてまとめてみた。本稿ではあくまでも全体像を捉えたに過ぎず、各活動の詳細を把握するには当然のことながら、それぞれ詳しく見ていく必要がある。例えば、計画書と活動報告書で寄せられた回答をさらに詳しく分析し、活動をより良くするにはどのような要因（例：実施体制）が強く影響するのかなどを見ていく必要もあろう。

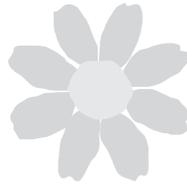
最後に、著者の見解を1つだけお許しただけなら、成果1～3に見られた協働・連携には、それに関わる意図を持つ者に対して開かれた状態がより良い条件として求められる。つまり、同質的な文化を共有する集団内部（例：教室内だけで完結する活動、ルーチン作業だけこなす行政担当部局、異なる意見を受け入れない研究集団）において、協働・連携は発生しても、持続性が低いことがある。それに対して、異なる集団間ではダイナミックに発生するため、ESDにおいては開かれた関係性の構築を重視する視座が重要である点が指摘できる⁽¹⁸⁾。

注

- (1) UNESCO (2009). Review of Contexts and Structures for Education for Sustainable Development (『国連持続可能な開発のための教育の10年中間年レビュー：ESDの文脈と構造』国立教育政策研究所翻訳)
<http://www.nier.go.jp/DESD2009.pdf>
- (2) Delors, J. et. al. (1996). Learning: the Treasure Within [Report to UNESCO of the International Commission on Education for the Twenty-first Century], UNESCO Pub. (ユネスコ編 (1997) 『学習：秘められた宝ーユネスコ「21世紀教育国際委員会」活動報告書』天城勲監訳, ぎょうせい)
- (3) しかし著者はユネスコスクールが所謂エリート養成を目指す学校とは捉えていない。
- (4) 永田佳之編 (2010) 「東アジアにおける『持続可能な開発のための教育』の学校ネットワーク構築に向けた研究」科学研究費補助金中間活動報告書
- (5) 観察時期は2010年8月20・21日、11月5日、11月26日、2011年1月29日であった。「学び合い」ESD活動には、異学年・学校種の子どもたちがグループを作り、対話を通して交流を深めた。教材作りは参加者が持ち寄って、話し合いを通じて完成させていくなどの参加型アプローチが取られ、それを使用する際も教員は問いかける立場に徹し、授業展開は子どもたちの主体的な参画に委ねられていた。また、生活経験を共有する合宿の教育成果は大きいようである。
- (6) 科学研究費補助金「東アジアにおける『持続可能な開発のための教育』の学校ネットワーク構築に向けた研究」(代表者：永田佳之)
- (7) 丸山英樹 (2010) 「ドイツのユネスコスクール：時間をかけた認定制度、教員の長期的責務、行政からの支援」『教育研究報告』2010 (1) 教育研究報告会
<http://innovative-education-research.com/IER/IER201003Maruyama.pdf>
- (8) UNESCO (2004). Educating for a Sustainable Future. p.29.
- (9) ACCU (2009) 『ESD教材活用ガイドー持続可能な未来への希望』p.62.
- (10) 2011年1月29日、大阪ユネスコスクール・ネットワーク行事における教員からの発言。
- (11) OECD事務総長教育政策特別顧問アンドレア・シュライヒャー氏の講演「PISAから見る、できる国・頑張る国」(2011年2月28日、於文部科学省)では、これ以外に、説明責任の当事者は行政当局から同僚や利害関係者へとシフトしていることが指摘された。
- (12) UNESCO (2005). Guidelines and Recommendations for Reorienting Teacher Education to Address Sustainability. (『持続可能性に向けた教師教育の新たな方向づけ：ガイドライン及びبيان』国立教育政策研究所翻訳)
<http://unesdoc.unesco.org/images/0014/001433/143370e.pdf>
- (13) OECD (2005). Teachers Matter: Attracting, Developing and Retaining Effective Teachers (『教育の重要性：優れた教員の確保・育成・定着』国立教育政策研究所監訳) 等
- (14) 本稿では教師を専門的思考と複雑なコミュニケーション能力を備える知識ワーカーと捉えている。知識ワーカーについては、Levy, F. & Murnane, R.J. (2004). The New Division of Labor: How computers are creating the next job market. Princeton Univ. Pr.を、それをもとにした学力論は丸山英樹 (2009) ESDではぐくむ「学力」『ESD教材活用ガイド』ACCU, pp.110-130.を参照。
- (15) BSPにおいても、活動を始めた第一世代が高齢になり退職が近づき、後継者探しが課題になっている。著者の観察 (2008年11月6～7日及び2010年10月27～30日)によると、若手や新任教員をBSP活動に連れてきて、共に学ぶ姿が見られた他、Facebookなどのソーシャル・ネットワー

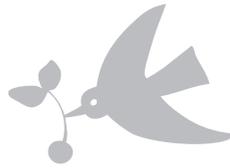
クを用いてベテランが新来者にモラル支援を展開している。

- (16) UNESCO (2005) . United Nations Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014) : International Implementation Scheme.
- (17) これは本書で成田喜一郎氏が指摘している「本質的で根源的な問い」に深く関係する。
- (18) 丸山英樹 (2008) 「つながりから見るESD研究：社会関係資本論を用いた「持続可能な発展のための教育」への視座」『国立教育政策研究所紀要』第137集, pp.219-231
<http://www.nier.go.jp/kyoutsu2/kiyou137-18.pdf>



第2部

ユネスコスクール
発展のために



ESDとユネスコスクール

—活動継続のためのヒント—

上原有紀子（国立国会図書館）

はじめに

この事例集では、学校＆みんなのESDプロジェクト協力校によるESDの実践を48事例、紹介してきました。このプロジェクト自体が、ESDの推進拠点としてのユネスコスクールを支援する事業でしたので、いずれの協力校も、このプロジェクトに参加する時点で既にユネスコスクールの認定を受けていました。

ESDの活動は、ユネスコスクールにならなければ出来ないわけではありません。そもそも、ESDの実践は、学校教育の現場に限られるものではなく、あらゆる場の、あらゆる世代の人々による、持続可能な社会の実現を目指す学びと行動は、すべてESDといえます。しかし、ここでは、学校におけるESDの実践、なかでも、ユネスコスクールとしてESDを実践するというのはどういうことなのか、考えてみたいと思います。

ユネスコスクールとしてESDを実践するということは、日本に279校（2011年1月現在）、世界に9000校以上（2011年2月現在）ある、ユネスコスクールのネットワーク加盟校の1校として、ESD推進の担い手になるということです。国内外に志を同じくする仲間を感じつつ、その仲間たちと様々な情報交換や人材交流を行いながら、自校の取組みを展開することができます。こうした内外の情報や人材等を活用できることは、ユネスコスクールになることの最大のメリットといえます。

特に、自校の活動で何か困難に行きあたったとき、他校の経験から打開策を見つかることができれば、活動継続のための確かな支えになるでしょう。たとえば、2010年10月に行われた第2回ユネスコスクール全国大会に筆者も参加

したのですが、その大会は、全国各地のユネスコスクールでESDを実践する先生、研究者や関連団体、企業の社会的責任（CSR）の活動に取り組む方々が参加し、それぞれの経験から学びあう場となっていました。

ここでは、第2回ユネスコスクール全国大会で得られた声を中心に、活動継続のためのヒントをご紹介したいと思います。活動を続けてきて困難を感じている学校はもちろん、活動を始めたばかりの学校も、いずれ、考える必要が出てくるかもしれないからです。

1. ユネスコスクールによるESDとは

本題に入る前に、ユネスコスクールによるESDについて、歴史的文脈も含めて簡単にまとめておきます。ユネスコスクールとは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を学校現場で実践するためのネットワーク“ASPnet (Associated Schools Project Network)”に加盟する学校です（「ユネスコスクールとは」本書p.198～199も参照）。ユネスコがこの取組みを始めたのは1953年に遡ります。当初、15加盟国33機関であった加盟校は、2011年2月現在、180国・地域に9000校以上を数えるに至っています。就学前教育の段階から教員養成大学に至るまで、各学校は、①地球規模の問題に対する国連システムの理解、②人権、民主主義の理解と促進、③異文化理解、④環境教育等の研究テーマに取り組んでいます。

ユネスコスクールの研究テーマは、ESDにおいても取り組まれているものです。しかも、日本政府がNGOとともに提案した「国連ESDの10年」というESD推進キャンペーンが2005年に始まって以来、ユネスコはESD推進の主導機関になっており、以前より存在したユネスコスクールの取組みを通じてESDを推進しようという動きが生まれました。2007年の第34回ユネスコ総会における、ESDのさらなる推進のための決議にも、ドイツと日本の共同提案により、ユネスコスクールによるESD推進が盛り込まれました。

日本はもともと、ユネスコスクールのネットワーク設立当初からこのネットワークに参加していました。ただし、1953年以来、ユネスコ協同学校（UNESCO Associated Schools の訳）と呼ばれてきた加盟校は、2007年までは多いときでも20校台に止まり、活動が盛んとは言い難い状況でした。しかし2008年2月、日本ユネスコ国内委員会は、ユネスコ協同学校の呼び名を「ユネスコ・スクー

ル」に(また2010年3月には表記を「ユネスコスクール」に)改め、ユネスコスクールを通じてESDを推進していく方針を明確にしました。こうしてESD推進政策とセットになったことが追い風となり、ユネスコスクールのネットワーク加盟校が近年急激に増えてきています。

国際社会におけるESD推進の「言い出しっぺ」ともいえる日本は、ESD推進のお手本となることが期待されています。ユネスコスクールによるESDの推進は、その良いお手本の一例ということもできるでしょう。

2. 活動現場からの声 —ユネスコスクール全国大会に参加して—

第2回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育 (ESD) 研究大会「ESDで育てる“生きる力”」は、2010年10月30日、日本の民間ユネスコ活動発祥の地、仙台にある、宮城教育大学を会場に開催されました。パネルディスカッションを含む2つのシンポジウム、企業によるCSR活動紹介のランチタイム、ユネスコスクールの教職員を中心とした課題別研究協議会と盛りだくさんのスケジュールに、参加者の熱意と熱気で厳しい寒さを吹き飛ばす一日となりました。

とりわけ、活動現場から出された課題について、テーマ別に学びあう機会となったのは、午後に2時間の設定で行われた課題別研究協議会でした。全体のテーマは、「ユネスコスクールとしての実践を深めるために」とされ、ユネスコスクールの教職員を中心として、7つの小グループに分かれて議論が行われました。参加者がいずれか1つに事前登録をした各グループのテーマは、(1) ESDの浸透、(2) 校内連携、(3) 教科とのリンク、(4) 活動の継続性、(5) 環境整備、(6) 地域連携、(7) 学校間交流、の7つでした。

筆者が参加した、(4) 活動の継続性の研究協議会では、次のような問題提起がありました。

1 教員の異動による入れ換わりについて

ある小学校の先生は、せっかく良い活動ができて、教員の異動という問題が常にあり、活動を継続している教員と新しくきた教員とでモチベーションに開きがあることもある、という課題を示されました。これに対し、使う教材、内容を吟味して、その時の担任の先生の思いの入ったカリキュラムにすることが大切という意見が出ました。確かに、いくらよいカリキュラムであれ、単に前任

者のしたことを続けること自体が目的になってしまうのでは本末転倒です。ESD推進というユネスコスクールとしての目的は共有するとしても、個々の実践は、携わる先生本人が納得の上、興味を持って推進できるものである必要があります。そのためには、校内のESDに取り組む先生方の中での連携と学びあいにより、中心となる教員と新しく加わった教員との意識を合わせつつ、それぞれの得意な取組みができるような体制を作ることがのぞましいと考えられます。

2 カリキュラムの継続性について

教員の異動による交代のみならず、子どもたちも代が替われば中身も変わり、全く同じカリキュラムを実践すればよいかといえばそうはいかない面もあるが、さりとて、カリキュラムの優れた部分は継続したい、というような問題提起もありました。この点については、大学や地域による、学校外からのサポートの重要性が指摘されました。たとえば、カキの養殖を体験する小学校の学習活動について、諸般の事情により数年休んだ後に再開したところ、サポートしてくれる地域の人々は、「また来たね」といって新たな子どもたちを迎えてくれたとのことでした。

3 体験学習のイベント化について

ESDのカリキュラムの内容について、いわゆる体験学習を重視するあまり、単なるイベントや行事の計画になってしまい、継続するということが、毎年定番のように繰り返すだけになる場合がある恐れも指摘されました。この点については、活動に参加する子どもたちにどんな力をつけたいか、という視点が欠かせないという意見で一致しました。どんな体験学習に取り組む場合でも、単に楽しませることで終わらせず、考える力や批判する力を子どもたちにつけたい、というような視点を忘れてはいけないということです。

4 ESDの評価について

活動を長く続けるためには、ESDの評価の手法を模索していく必要があるという意見も、ある高校の先生から切実な課題として提起されました。この点については、ESDのカリキュラムの内容を考えるとときに必要な、子どもたちにどんな力をつけたいか、という視点が評価でも役立つという意見が出ました。まず子どもたちにつけたい力を考え、ストーリー性のある学習内容の流れにそれらの力を位置付けてみて、評価の道筋を考えるということです。他方、ESDは短期

的に評価しないほうがよいのではないか、先生自身が次のアイデアを出しやすくするような評価なら良いが、先生自身が自分を苦しめるような評価をしてはいけな、エネルギーが出てくるような評価をすべきといった様々な意見も出されました（ESDにふさわしい評価のあり方等については、成田喜一郎「ESDの質的保証とHOPE評価の可能性」本書p.181～p.190も参照）。

5 連携協力体制の構築について

小中高といった学校種を超えて、地域における学校間連携協力の体制を作ることが活動継続のためには有効という指摘もありました。また、こうした連携協力体制を作ったら作りっぱなしにするのではなく、ことあるごとにその体制を活用していくことで、その体制を強靱なものにできるという意見も出されました。こうした学校間連携は、単に同じ地域内の学校ということだけでなく、ユネスコスクールであるということが共通点になれば、連携の話がしやすくなる面も出てくるように思われます。

3. 活動継続のための“つながり”のサポーターを見つけよう

以上の声に共通するのは、活動継続のために、様々な“つながり”が必要になるということです。先生の入替わりを超えて、ESDのカリキュラムの内容とそこに込める思いをつなげていく、そのためには学校内の先生方のつながりが必要です。カリキュラムの内容や評価手法を開発・継続するのが難しい場合、地域や大学、CSR活動を重視する企業など、学校外のつながりに助けられるでしょう。学校間連携は、まさに学校間のつながりを必要とするものです。

こうした“つながり”を作り、維持するためには、ユネスコスクールのネットワークをはじめとするネットワークを活用して、サポーターを見つけることが重要になってきます。学校により、得意とする取組みは異なるでしょうし、アイデア不足で専門家に助けてほしい場合もあれば、プログラムの案はあるけれども資金不足という場合もあるでしょう。現在ではこうしたニーズに応えるサポーターが様々な存在します。特に、ユネスコスクールに未加盟で、これから加盟したいという学校の場合でも、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）の大学や、財団法人ユネスコ・アジア文化センター、社団法人日本ユネスコ協会連盟等の支援を受けられます（参考文献（1） p.7,19,23.

も参照)。

ESDの実践は、分野横断的な知識や物事のつながりを学び、またそうした学びを継続するために、様々な人々のつながりを必要とする、言い換えれば、人々の間に新たなつながりを作り出していくものです。ユネスコスクールのネットワークを活用すれば、それを国内だけでなく、世界にもつなげていきやすくなります(ユネスコスクールによるESD活動の成果に見られる、つながりの大切さとネットワークの強みについては、丸山英樹「ユネスコスクールにおけるESD活動の成果と課題に関する一考察」(本書p.148～p.166)も参照)。

おわりに

様々な実践事例は、このような活動を継続すること、そしてこれらの活動継続をサポートすること自体も、人々の間のつながりを作りながら、持続可能な社会を構築する道のりになっている、と思わせてくれます。

この事例集を手にとってくださいあなたも、ユネスコスクールによるESD実践の担い手として、あるいはサポーターの一人として、是非その道のりを一緒に歩いてください!

主な参考文献

- (1) 日本ユネスコ国内委員会『ユネスコスクールと持続発展教育(ESD)について』2010.12.
http://www.unesco-school.jp/?action=common_download_main&upload_id=4299
- (2) 『第2回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育(ESD) 研究大会「ESDで育てる“生きる力”」抄録集』2010.10.
http://www.jp-esd.org/img/con_abstracts101228.pdf
- (3) 上原有紀子「地域からはじまるESDの可能性—我が国の実践事例から—」『持続可能な社会の構築 総合調査報告書』2010.3, pp.239-254. (国立国会図書館調査及び立法考査局刊行物)
<http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/document/2010/200904/16.pdf>
- (4) UNESCO “The UNESCO Associated Schools Project Network”
<http://www.unesco.org/new/en/education/networks/global-networks/aspnet/>

「学校と地域の連携」で育む 未来の市民

村上千里（認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議）

はじめに

ESD-J⁽¹⁾は、ESDにつながる教育や活動を展開しているNPO・教育機関・事業者などの団体と、研究者・教員・学生などの個人からなるネットワーク組織です。2003年春、ESDの10年のスタートに先駆けて発足し、ESDにつながる学びの場が全国各地に広がっていくための普及活動と、ESDを推進する仕組みづくりに取り組んでいます。

学校教育においては、2009年度より、文部科学省の日本／ユネスコパートナーシップ事業を受け、多摩市教育委員会および東京都教育庁生涯学習課と連携し、教員や地域の協力者を対象としたESD（持続発展教育）研修事業を企画・実施しています。本稿では、この取り組みおよび全国各地の実践者の声をベースに、学校教育におけるESDで有効かつ大切とされている「学校と地域の連携」について、なぜ重要なのか、どうやって実現するのか、などについてヒントとなる話題を提供できればと思います。

ESDは子どもたちの「今」と「未来」にとって必要な学び

『2050年の大人づくり』をキャッチフレーズに掲げている多摩市教育委員会は、2009年、全市を挙げてESDに取り組む方針を打ち出しました。その理由を以下のように説明しています。（太字・筆者）

「現代社会は、地球規模の環境破壊や貧困や紛争などの問題や、一方で多摩

という地域に目を向けても急速に高齢化を迎えようとしているニュータウンの問題など、持続不可能な問題が山積です。将来日本、そして多摩市で暮らす子どもたちには、その延長線上の社会において、自らの考えを持って新しい社会秩序をつくり上げることが求められるのです。だからこそ、**地球的な視野で、身近な暮らしを変え、地域に参加する市民を育成するための教育が必要です。**その教育こそがESDです。

一方、今子どもたち置かれている状況に目を向けても、聞く力、考える力、問題解決する力、表現する力、学ぶ意欲などの低下が指摘されています。また不登校、いじめ、学級崩壊など学校・家庭が抱える問題や、フリーター、ニート、衝動的犯罪など地域・社会の抱える問題（特に青少年）など多くの課題があります。**それらの原因のひとつとして、子どもたちが自然・家族・地域・社会から隔離され、実体験や多様な立場の人とのコミュニケーションが不足していることなどが考えられます。体験や関係性を補完するESDは、まさにそのような子どもたちの諸問題の解決策としても有効です。**（中略）

このように、すべての学校が地域と一体になってESDに取り組むことで、子どもたちの未来を創造する能力を育むことができます。そしてさらには地域住民や保護者の意識にも変化が生まれ、地域社会をも変えていける可能性があるのではないのでしょうか。⁽²⁾

多摩の未来を担う市民を育成したい、という地域社会のニーズ（＝子どもの未来への期待）だけでなく、子どもたちが抱えている孤独感や閉塞感、考える力や学ぶ意欲の低下などを打開したい、という学校や保護者のニーズ（＝子どもの今の環境改善）にも応えられるという期待が、“学校と地域が一体となってESDに取り組むこと”に込められています。このふたつのニーズは、ESDに取り組んでいるところも、取り組んでいないところも、全国変わらない共通のものに違いありません。ESD的な学びが、このふたつのニーズに応えられることが示せば、ESDが学校に課せられた新たな荷物としてではなく、地域社会と学校にとって本当に必要な学びのあり方として、受け入れられていくのではないかと期待しています。

価値観を育む「ほんものとの出会い」 地域の中で学ぶ意味

わたしたちの生活は、かつては地域の自然（生態系や生物多様性）や産業、

文化に非常に色濃く根ざしていましたが、グローバル経済の発展に伴ってそのつながりが世界中に広がると同時に、地域とのつながりは希薄になりつつあります。自分たちが日々食べているもの、着ているもの、使っているものが、誰が、どこで、どのようにして作り、運び、自分のところに届けられているのか、知らないことばかりです。そしてその過程で知らないうちに環境破壊や児童労働などの人権侵害にも加担してしまっているかもしれない、そんな社会で私たちは暮らしています。

でも自分たちの地域や暮らしが世界とつながっている以上、世界の持続不可能な動き（戦争、貧困、差別や抑圧、環境破壊など）に加担しないためにも、また翻弄されないためにも、そのつながりのありようをよく知り、その影響などをよく吟味し、どうあるべきかを構想できる力をつけることが必要になります。それは単に「知っている」だけではなく、何を大切に考えて「判断する」かが問われるということです。これは「知識」の問題ではなく、「人間観・価値観」の問題である、とも言い換えることができるでしょう。

ただ、人の価値観は誰かから教えられて簡単に身につくものではありません。さまざまな体験の積み重ねの中で徐々に形成されていくものです。だからこそ、子どもたちには多様な意見、多様な世界と出会う機会をつくるのが大切なのです。

地域は、人と自然のつながりや、人と人のつながりがもっとも体験しやすい場になります。そこには農林漁業者、商工業者、施設の学芸員等の専門家、NPO、行政職員など、多様な人々が暮らしており、多様な仕事、施設、行事、自然があります。バーチャルな世界ではなく、「ほんもの」の世界で実体験をし、生身の人の話を聞き、感じ、考え、行動することで、地域の魅力や地域が抱える課題とのかかわりを生みだすことができます。

例えば身近に流れている川も、橋の上から見ているだけでなく、水辺に下りて川のゴミを拾ったり、近所のおじいさんから昔その川で魚を採って食べたことを聞いたり、その川の上流を訪ねたり、そんな関わりを持ちながら考え、行動し、感じたことを仲間と話し合うことで、その川は「私の川」になり、「私たちの川」になっていく、それはその川に関する知識だけでなく、愛着や責任といった感情も育むことになるでしょう。「君たちのおかげで川がきれいになった、大人もがんばらなくちゃね」と声をかけられれば、世の中のためになることの喜びを体感することにもなります。このように、小さな社会参加の体験ができることも、地域で学ぶことの大きな意味なのです。

多摩市ESD研修のアプローチ 既存の取組みをESDの視点で組み立て直す

地域の協力を得ながら総合的な学習の時間や特別活動を活用して、体験的な学習を展開している学校は、既にたくさん存在しています。でも、“学校と地域が一体となってESDに取り組む”となると、とても難しく大変なことを行わなくてはならないように思え、心理的なハードルがぐっと高くなってしまっているのではないのでしょうか。このハードルをどのようにして下げ、ESDを学校の実践に取り入れていけるようにするのか？ この課題に取り組んだのが、ESD-Jと多摩市教育委員会で2009年度から実施している小中学校の教員対象の「ESD研修会」です。

2009年度は、小学校教員7名、中学校教員6名が集まり、地域の協力者の参加も得て、以下の3点を目標に、研修に取り組みました。

- ①参加した教員が「ESD」の視点と意義を学ぶ
- ②すでに実践している授業をESD的に発展させるための“視点”と“手法”を学ぶ
- ③学校のESDを支える地域とのつながりを強化する

全5回のプログラム・各2.5時間

- 第1回 ESDの基礎を学び、ESD的な学校の活動を出しあう
- 第2回 ESDの視点で、授業・活動の発展に向けたアイデアを出しあう
- 第3回 小中学校それぞれでモデルプランをつくる
- 第4回 ESDの視点を再整理し、モデルプランをブラッシュアップする
- 第5回 研修の成果を公表する（研究主任研修会として実施）

ESDという新しい何かを生み出さなくてはならないのではなく、「すでに行われている活動をESDの視点で組み立て直す」というアプローチで、小・中それぞれにモデルプランが作られました。小学校チームは、多くの学校が取り組んでいる食育や農業体験をベースに、残菜による土づくり、野菜づくり、郷土料理「多摩そば」づくりなどを地域のNPOや農家の方と取り組み、最後は世界の食料事情へと発展させる内容となりました。中学校チームは、すべての中学校で

行われている職場体験を取り上げ、事前学習や事後学習で、その仕事につながる社会の課題への取り組みを学ぶ視点を加えました。

2010年度は実際にそれぞれの学校でESDの視点を取り入れた授業に取り組み、その実践を研究授業として教員同士が学びあっています。多摩市立東愛宕中学校および多摩永山中学校では、「職場体験＋ESD」が実践されました。これまでの職場体験の目的は、「キャリア教育として、自分探しを目的に、将来の職業選びとそのためになにが必要かを考える機会とする」でしたが、これにESDの視点を導入することで、「仕事を体験して終わるのではなく、働くことの意義を広い視野で考える機会とする。会社は営利目的以外に、何とどのように関わりを持っているかを学ぶ」を加えました。そして、「自然とのつながり、人とのつながり、世界とのつながりという三つの視点で職場体験のインタビューをしよう」という授業が行われました。

ESDの視点とは？ 地域×地球×未来×共に生きる力

学校でのESDについてご紹介するとき、よくいただく質問がふたつあります。ひとつは「総合的な学習の時間とESDは同じですか?」です。子ども達の主体的な学びを支援し、コミュニケーション能力や問題解決能力を育むという意味では、総合的な学習の時間とESDが目指すところは同じです。でも、ユネスコスクールで先駆的事例として名高い気仙沼市面瀬小学校の実践を組み立ててきた及川幸彦先生はその違いをこう指摘しています。「総合的な学習の時間は、個人がよりよく生きるための力をつけることが主たる目的。ESDはそれに加え、社会の中で共に生きる力を育もうとしている点が特徴」と。

そしてもうひとつの質問は「ふるさと学習とESDはどう違うのですか?」です。これも共通点ばかりのように思えますが、日本ユネスコ協会連盟理事として、ユネスコパートナーシップ事業による教員対象のユネスコスクール研修会の講師をされている帝塚山学院大学の米田伸次先生は、「未来へのビジョンとコミットメントを育てているかどうかポイント」とおっしゃいます。多摩市の研修で講師をつとめていただいたNPO法人エコ・コミュニケーションセンターの森良さんはESDを「ふるさと未来学習」と呼んでおり、先述の及川先生は「ふるさと地球学習」と呼んで、地域に根差しながらも国際的な視座の重要性を語られます。

地域の中で多様な人々と出会い、多様なほんもの体験をし、ひとり一人が社

会の中で他者と共に生きていくための価値観を育み、スキルを身につけていく。地域や地球が直面している課題を自分ごととして考え、よりよい社会のビジョンを描ける力をつける。そんな教育目標を持って今行っている授業を見直し、地域に目を向けてみると、ESDの糸口が見えてくるのではないのでしょうか。

ESDを推進する仕組み 学校と地域をつなぐコーディネーター

ところで、地域にどんな魅力的な自然や文化、産業があるのか、どんな人に協力してもらえれば子どもたちの学びを支援できるのか、ゼロから探し始めるのはとても時間もかかります。また、学校には地域から様々な提案が持ち込まれることもありますが、互いに理解をし、一緒に授業をつくっていくパートナーになってもらえるまでには、やはり多くの時間が必要です。したがって、地域との連携があまり行われていない学校では、このような取り組みを始めるのは非常に難しいという状況があります。そんなとき、学校区にひとり、学校をよく知り、地域をよく知っている人がコーディネーターとして活躍してくれると、地域との連携によるESDはぐっと始めやすくなるでしょう。

ESD-Jと東京都教育庁生涯学習課で取り組んだ研修は、学校地域支援本部のコーディネーターや学校教育に関心のある保護者や地域の人々と一緒に、ユネスコスクールの実践やESDの考え方を学ぶというものでした。地域の人が、教育現場の課題や目指している方向を知り、地域の「魅力」や人々の「得意」を活かして子どもたちにかかわる場をつくっていく、そんな取り組みを支援することもESDを推進する有効なアプローチだと考えています。

おわりに

多摩市教育委員会も、東京都教育庁生涯学習課も、どうしたら“学校と地域の連携によるESD”のハードルを下げられるかをともに考え、学校から、地域から、それぞれ取り組み始めたところです。このような挑戦が、多くの学校や教育委員会の皆さまのヒントになり、「うちでもやってみよう」と一歩を踏み出すきっかけにしていだけたら嬉しく思います。

注

- (1) ESD-J：認定NPO法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議
<http://www.esd-j.org>
- (2) 学校と地域がつくる「希望への学びあい」（教員＆地域編／教育委員会編）：H21年度文部科学省委託日本/ユネスコパートナーシップ事業より
<http://www.esd-j.org/j/book/book.php?catid=136>

ESDの質保証と HOPE評価の可能性

—子どもと教師のためのエスノグラフィー—

成田喜一郎（東京学芸大学大学院）

1 はじめに

ユネスコスクールは、2011年1月現在、279校を超え、今も刻々と増え続けています。

ここで注目しておきたいことが2つあります。

ひとつは、量的な変化についてです。

この量的な変化は、明らかに学校園におけるESDへの理解が急激に広がっていることを示しています。ESDへの理解の広がり、黙示的なESDを明示的なESDへと変えていく可能性を秘めています。

ふたつ目は、質的な変化についてです。

量的に拡大したユネスコスクールの加盟校⁽¹⁾をよく見ていくと、保育園・幼稚園⁽²⁾・小学校・中学校・中等教育学校・高等学校・大学まで0歳の乳児から20歳代の青年までが通っている学校園が加盟していることが分かります。

また、国・公・私立の学校園だけではなく、NPO法人を設置者とする京田辺シュタイナー学校・横浜シュタイナー学園・東京賢治の学校⁽³⁾なども加盟していることです。

この事実は何を物語っているのでしょうか。

それは、ESDがまさに“ESD for All”、持続可能な未来に向かう年齢や世代を超えた取り組みであり、子どもたちや青年の成長と発達に寄り添い関わる Educator / Educator⁽⁴⁾のいるすべての学びの場で営まれているということの意味しています。

こうした多様で異なる年齢や世代、多様で異なる学校園や地域で営まれる

ESDは、どのような手法で成果や課題を確かめ、未来への展望を切り拓いたらよいか。

本章では、この本質的で根源的な問いへのレスポンスとして、各学校園や地域において取り組まれるESDの質を保証する視点を見出し、新しい評価手法を探ることを目的にしたいと思います。

2 ESDの学びの質を保証する4つの視点

学校園や地域におけるESDの学びの質を保証するには、計画・実施・評価・改善を包括するカリキュラム・マネジメントとそれを実施するための組織マネジメントが不可欠です。どんなに優れた魅力的なプログラムがあっても、また、どんなに優れた実践者(Educator/Educer)がいたとしても、具体的なカリキュラムや実施・実践する組織をマネジメントする人々がいなければ、学びの質を保証し、持続継承可能な学校園や地域の文化の構築は困難でしょう。

ESDの学びの質を保証するカリキュラム及び組織マネジメントを行うにあたって、筆者は、以下に挙げる4つの視点を有し行動する人々で構成されていることが重要だと考えています。この4つの視点は自らの視点や行動を振り返るときの指標に据えたいと思います。

1 「賢き従者のごとく導くことのできる〈管理〉人であるか」 Servant leadership

学級担任、学年主任、各分掌主任、校長など組織の長は、組織の大小にかかわらず〈管理〉の多義性を踏まえているか。〈管理〉するということは、日常的①援助Care、②責任Charge、③指導Direction、④監督Supervision、⑤運営Administration、⑥経営Managementすることであり、危機管理を必要とする非常時には⑦統制Controlすることが加わります。しかもその立ち位置は、自らを「トップ」に身を置くのではなく、「川上」にいる児童生徒や同僚(教職員)の学びや仕事を常に「川下」で受け止める⁽⁵⁾「ボトム」に身を置く「賢き従者のごとく導くことのできる〈管理〉人」であるか。

2 「本質的で根源的な問いを抱き、応答し続けようとする人である」 Essential question

「戦争はいけないとわかっているのになぜしちゃうの?」(ある小学生からの問い)、「地球にやさしくなんて、ほんとにできるのかな?」(ある中学生からの問い)、「なぜ、持続可能じゃないといけないのか?」(ある高校生からの問い)など、正解は1つではなく、永続的な理解・思考を促す本質的で根源的な問い⁽⁶⁾を自ら抱きながら、教科・領域・専門性を超えてつながることに努め、実践に生かそうとしているか。

3 「多様で異なる人々や組織間の〈結び目〉をつくる人であるか」 Knot working

異なる教科・領域・専門性、組織や個人の境界・限界を超えて協働⁽⁷⁾する意味を理解し、実際にその〈結び目〉knotをつくったりほどいたり⁽⁸⁾、持続可能な教育文化を構築するために臨機応変の連結や離脱の自由を大切にしているか。多様で異なる人々と協調的な行動を行い、相互作用的で循環的な教育活動を通じて形成される関係性や信頼、緩やかな結びつき weak ties など社会関係資本 Social capital⁽⁹⁾を大切にしているか。

4 「他者の潜在能力を引き出しながら教えることのできる人か」 Educator / Educer

他者に知識や概念・スキルを教えることの意味を考えつつ、こよなく思考力や表現力・想像力⁽¹⁰⁾など潜在的な能力を引き出すことを楽しみとする、常にそうした Educator / Educer であろうとしているか。

組織やグループのサイズを問わず、常にこの4つの視点を持ち、実践や研究を創成・生成していくことが重要です。もちろん、ある時点で、これらの視点の有無(1か0か)、A・B・Cのどの段階かを判定することがあっても常にこの視点の深まりを求め、持続的継続的に省察 reflection しつづけていくことが不可欠です。

3 HOPE評価の可能性

1 HOPE評価とは何か

HOPE評価とは、2008年、ユネスコ・アジア文化センター（以下、ACCUと略す）が開発・実践した評価手法で、当初、「ホリスティック⁽¹¹⁾ (Holistic) で、参加を促し (Participatory)、力づける (Empowering) 手法」として提案・実践されました。

すなわち、「共に考え、共に働く過程での困難や工夫、そして達成した成果を、『評価者－被評価者』の垣根を超え、学び合い、次に活かしていく」、「『虫メガネ』をもつように物事を微細に観察しその結果を伝えるのではなく、評価チームの存在を通して、現地の人々が『鏡』を見るように主体的に自らの活動を振り返るきっかけに」し、「プロジェクトの対象者、現地コーディネーター、関係者、そして評価チームの人々にとって学びの機会⁽¹²⁾」とした評価です。

ACCUがアジア太平洋地域の7か国で行ったHOPE評価は、ESDを実践している400名以上の村人へのインタビューを行い、その後、公開フォーラムを開催し、評価内容に対する現地NGOの職員や学習者の声にふたたび傾聴するという対話⁽¹³⁾を重ね、「形成的アセスメント⁽¹⁴⁾」的な評価が実施されました。

さらに、2009年8月、東京で開催された国際会議「アジア太平洋ESD教育者フォーラム2009」で、ホリスティック (Holistic) かつ活動主体本位 (Ownership-based) で、参加を促し (Participatory)、勇気づける (Empowering) 評価手法へ深化しました。⁽¹⁵⁾

ESDを実践する活動主体が、評価を受けることでびくびくハラハラ、一喜一憂するのではなく、昨日以上、今日以上、今以上の活動や成果をめざす希望を育む評価です。

また、評価者自身にとっても「虫メガネ」だけではなく「鏡」を用いて、評価対象者はもちろん評価者自らのESD実践を振り返ることになります。

HOPE評価とは、「試験管」の中で教育内容を伝達・提供された児童生徒の反応を評価者が客観的に観察・評価する手法ではなく、むしろ「試験管」の中で教育内容と児童生徒との関わりやつながりを授業者や評価者がともに反応しながらそれぞれ自らを評価し合う新しい評価手法です。

もし、このESDカリキュラムに対するHOPE評価が広がり深まりを見せたと

き、これまでの教育観や評価観を根幹から変えてゆくのではないかとの予感さえします。

しかし、学校教育の場ではおそらく日常的にこうした形式のHOPE評価は時間的にも組織的にも行うことは困難です。

そこで、学校教育の場で児童生徒や教職員が教育活動として持続継続的に見えるHOPE評価の手法を探る必要があります。

2 HOPE評価としての「子どもと教師のためのエスノグラフィー」

さて、エスノグラフィー ethnography⁽¹⁶⁾という言葉聞いたことがあるでしょうか。

エスノグラフィーとは、元々は文化人類学などで行われていた「民族誌」という手法です。研究者がフィールド・ノーツを手にとり研究対象となる村に移り住み、ともに生活しながらひたすら記録・記述をしていき、そのフィールド・ノーツをもとにその村の住民の意識や行動様式を明らかにしていく質的研究法の一種です。最近では、教育学や経営学などでもこの手法が用いられるようになりました。

エスノグラフィーとは、原則として第三者的な立場の研究者が観察記録・分析していくものですが、自叙伝やライフ・ヒストリーのように、自分が関わった行為や体験を相対化し記述するオート・エスノグラフィー auto-ethnography (自己＝民族誌) という手法もあります。

筆者は、このオート・エスノグラフィーをHOPE評価の手法として援用し、大学・大学院や地域における講義やワークショップで「子どもと教師のためのエスノグラフィー」を提案・実践しています。

「子どもと教師のためのエスノグラフィー」とは、たとえば、自らの学びや授業・観察の履歴の中の「事実・体験」に自らの「想像力」という試薬を加え、化学反応させて作られた「創作叙事詩⁽¹⁷⁾」とそれを書いた理由や根拠を「解題⁽¹⁸⁾」として書くというメタ認知⁽¹⁹⁾を促す方法です。

そして、書かれた「創作叙事詩」と「解題」を教室等の中の仲間・同僚と交換し、コメントを書き合います。そのコメントを読み合い、さらにメタ認知を深めていきます。

この「子どもと教師のためのエスノグラフィー」は、①児童生徒や学生に自らの学び＝事実をもとに創作叙事詩と解題を書かせる、②教室という「試験管」の中に児童生徒一緒に入り込みながら授業者自らがその学びのプロセス＝事

実をもとに書く、③参観者が教室や学校の中の学びのプロセス＝事実の観察をもとに書くなど、多様なアプローチが考えられます。

ここでは、岡山大学と岡山市環境保全課との協働によるESD実践として、4か月にわたり産業廃棄物に関する調査・研究を行ってきた環境理工学部学生・石川智樹さんが書いた作品を紹介します。(アプローチ①)

創作叙事詩「ごみと私」⁽²⁰⁾

ごみと私は身近なもの
ごみは捨てられ
私は死ぬ
ごみはどこにでも捨てられ
私はきちんと埋葬される
このちがいはなんなのか
それは未だにわからない

解題「様々な不法投棄の現場を見て感じたごみと私の間柄」

この作品は、最終調査研究報告会の1週間前に、「このESDの授業では、体験から学ぶ、互いから学ぶということを大事にしてきました。次回のプレゼンとレポートでは、みんながどんな調査をして、どのようにそれを論理的に考察し、人にわかりやすく伝えられるかというところを見せてもらいます。でも今回の授業ではそれに加えてもうひとつ大事なこと、何を心で感じたかということ振り返ってほしいので、今日は創作叙事詩とその解題を書いてもらいます。これまでの4ヶ月間の講座を通して学んだことや感じたことに自分の想像力を足して書いてみてください。題は『ごみってなあに?』か『ごみと私』です」との指示を受け、大学生たちが約30分で書き上げた作品の一つです。解題は、詳細な事実に基づいた理由や根拠にこそなっていませんが、短いながらごみと学習者との関係性を見事に描き出しています。4か月にわたって同じ調査・研究活動を行ってきた学生たちがそれぞれの思いや考えたことを表現した作品ですが、参加者全員の作品は一つとして同じものはありませんでした。

この「創作叙事詩」と「解題」を書かせた岡山市環境保全課の原明子氏⁽²¹⁾は、「この学生は不法投棄ゴミ回収の場では一言もしゃべらず、女子ばかりの中で無然としていた男子学生です。13人の叙事詩を読んで、人は外から見

て、言うことを聞いているだけではわからないとつくづく感じました。(この学生の問いて〈本質的で根源的な問い〉ではないでしょうか・・・?)⁽²²⁾と述べています。

「子どもと教師のためのエスノグラフィー」(創作叙事詩と解題)は、ESD実践の中で活動主体の内面に生じた〈本質的で根源的な問い〉を引き出し、指導者の新たな気づきを引き起こしています。

まさに、ホリスティック(Holistic)かつ活動主体本位(Ownership-based)で、より深い参加を促し(Participatory)、学習者と指導者とを勇気づける(Empowering)新しい評価手法であると言えるのではないのでしょうか。

そして、この「子どもと教師のためのエスノグラフィー」(創作叙事詩と解題)は、単にESD実践の確かな記録・記憶として残されるだけでなく、ESDがめざす「価値観や行動の変革への期待」、「人格の発達や人間性」、「他者や社会・自然との関わりやつながりの認識」、そして、潜在カリキュラムを含む学校園の教育活動と児童生徒・学生の学びの履歴の総体を表現した生成評価物(成果物)をもたらす新しい評価手法としての可能性を秘めているのではないのでしょうか。

ESDカリキュラムがいかなる成果をあげたのか、もちろん、チェックリストを用いた量的な調査研究を通して数値の変化を明らかにすることは重要です。しかし、それだけではなく、学習者や指導者の内面に形成された変化・変容の質を明らかにするHOPE評価「子どもと教師のためのエスノグラフィー」(創作叙事詩と解題)は、ESD実践自体を学校の文化として持続継承させていく上で、重要な取り組みであり評価手法となる可能性を秘めています。多くのESD実践校や地域・大学で「子どもと教師のためのエスノグラフィー」にチャレンジされることを願っています。

4 むすびにかえて

最後に、「各学校園や地域において取り組まれるESDの質を保証する視点を見出し、HOPE評価—子どもと教師のためのエスノグラフィー—のあり方について、整理しておきたいと思います。

(1) ESDを推進する教職員・市民・教育委員会・大学・関係する省庁などすべてが、ESDの学びの質を保証する4つの視点として、①賢き従者のごと

く導くこと Servant leadership、②本質的で根源的な問いを持つこと Essential question、③他者との関係性や信頼関係など社会関係資本を活用し、人々や組織間の〈結び目〉をつくること Social capital / Knot working、④他者の潜在能力を引き出すことを楽しみ、その可能性への期待や新たな気づきを抱きながら関わる Educator / Educer の視点に立つこと。

そして、その教師やおとなが4つの視点を持ち行動する姿を児童生徒・学生たちに見せ、近い将来、自らが4つの視点を持った教師やおとなを目指せるように、あらゆる学びや仕事の場で取り組む必要があります。

(2) ESD につながり関わるあらゆる年齢・世代、多様で異なる学校園・地域で「学びのためのエスノグラフィー」法を活用し、「創作叙事詩」と「解題」を作り集めて、ACCU や各学校園などホームページなどで ESD の生成評価物 (成果物) として公表していきたい。ESD でいかなる本質的で根源的な問いや諸相に出会い、何をどのように学んできたのかを可視化・言語化していくことが重要です。

今後の課題としては、より多くの年齢や世代、学校園・地域で「子どもと教師のためのエスノグラフィー」の手法が展開されることと同時に、文字・活字だけではなく多様な表現方法—絵画・彫刻、音楽など—を活用した「創作叙事絵画と解題」「創作叙事彫刻と解題」「創作叙事音楽と解題」など新たな「子どもと教師のエスノグラフィー」の手法も考えられます。ESD は、環境・経済・社会と文化の持続可能性をめざす教育です。さらに、文化的多様性を持続可能とする芸術活動 Arts for Sustainable Development の創造にもつながっていくことに期待したいと思います。

[付記] 「ESD カレンダー」を創案した ESD 実践校であるユネスコスクール・東京都江東区立東雲小学校について、筆者 (筆名: 寺澤満春) が訪問したときの観察記録をもとに書いた「子どもと教師のためのエスノグラフィー」(アプローチ③)、創作叙事詩「東雲から吹き上げる風—ESD・持続可能な文化のある学校—」とその解題があります。ぜひ、一度、以下の URL にアクセスしてみてください。

創作叙事詩: 寺澤満春「東雲から吹き上げる風」 <http://bit.ly/h31HqJ> (参照 2011/03/14)

解題: 寺澤満春「東雲から吹き上げる風」作品解題 <http://bit.ly/hAuwTO> (参照 2011/03/14)

注

- (1) ユネスコ・アジア文化センター『ユネスコスクールへようこそ!』の「ユネスコスクール加盟校一覧」を参照されたい。

http://www.unesco-school.jp/?page_id=19 (参照: 2011/02/20)

- (2) 保育園(3歳児以降)や幼稚園には、教科はなく「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」という5領域がある。小学校以降は教科・領域・専門性に分化していくが、ESDは細分化された教科・領域・専門性を再び横断・包括していく。
- (3) これらNPO法人設置の学校園は、学校教育法第1条の規定外のオルタナティブ・スクールである。
- (4) Educationには、educate(知識や概念・スキルを教える)という営みと、educer(思考力や表現力・想像力など潜在的な可能性を引き出す)という営みがある。ESDでは特に後者の営みが重視されることから、「子どもたちの思考力・表現力・想像力などを引き出す人」という意味で‘Educer’という概念を使うことにしたい。
- (5) 「賢き従者のごとく導くことのできる〈管理〉人」については、拙稿(2010)「子どもと教師等の〈和み安らぎ〉ための教育の再構築に向けて—ホリスティック・アプローチを中心に—」『警察政策学会資料』第59号, pp.62-65の「(2)「水の思想・川の組織論」の構築と実践: 学校における新しい管理運営論の展開」を参照されたい。

<http://www.asss.jp/report/59.pdf> (参照: 2011/02/27)

- (6) 本質的で根源的な問いEssential questionは、ESDにとって重要概念である。予定調和的な答えを導く内容質問Content questionとは異なり、子どもたちだけではなく専門性を超えて教師やおとなたちと共に深い思考力や判断力・想像力を働かせる必要のある問いである。問いを探し(探Q)、問いを抱き愛し(愛Q)、問いへのレスポンス(レスQ)を行うプロセスが重要である。
- (7) 協働とは、共同や協同とは異なり、「同じ目的のために、対等の立場で協力して共に働くこと」(大辞泉)である。英語では、collaboration, partnership, cooperationの他に、近年では、coproduction(同じ目的をめざし共に何かを生み出していくこと、共創)という概念も使われるようになってきている。荒木昭次郎(1990)『参加と協働: 新しい市民=行政機関関係の創造』ぎょうせいを参照されたい。
- (8) ESDにおいては、デジタルな情報ネットワークだけではなく、アナログな人的なネットワークづくりが重要である。特に、刻々と変化する対象や状況に応じて緩やかな「連結」と「離脱」の自由を保障する柔軟な〈結び目〉をつくる力Knot workingが求められる。山住勝広、ユーリア・エンゲストローム編(2008)『ネットワークング: 結び合う人間活動の創造へ』新曜社を参照されたい。
- (9) 丸山英樹(2009)『ESDで育む『学力』』『ESD教材活用ガイド: 持続可能な未来への希望』ACCU, pp.119-121を参照されたい。
- (10) 想像力には、①生きる力を与える、内面的なよりどころとなる、②新しいものを創造する、③破壊的なものをも生み出す、④破壊的な想像力を見通し変革する、危機を克服する術となると4つの働きがある。内田伸子(1994)『想像力: 創造の泉をさぐる』講談社現代新書を参照されたい。
- (11) ホリスティックholisticとは、「つながり」「つりあい」「つつみこみ」、「つづける」というキーワードを軸とする全人全連関的な営みのことを意味する。詳細は、日本ホリスティック教育協会「ホリスティック教育の理念」を参照されたい。

<http://www.holistic-edu.org/rinen.html> (参照: 2011/02/27)

- (12) 座波圭美(2008)「持続可能な未来へ、希望(HOPE)をもたらず評価」ACCUNews370。
http://www.accu.or.jp/jp/accunews/news370/370_06.pdf (参照: 2011/02/27)
- (13) 永田佳之(2009)「動きはじめた、持続可能な未来へのESD評価手法」ACCUNews371。
http://www.accu.or.jp/jp/accunews/news371/371_05.pdf (参照: 2011/02/27)
- (14) 形成的アセスメントとは、「生徒の学習ニーズを確認し、それに合わせて適切な授業を進めるための、生徒理解と学力進歩に関する頻繁かつ対話型(インタラクティブ)のアセスメント」である。

OECD教育研究革新センター編著、有本昌弘監訳(2008)『形成的アセスメントと学力：人格形成のための対話型学習をめざして』明石書店、p.7。

- (15) 「東京HOPE宣言」
[http://www.accu.or.jp/esd/mt-static/news/topics/Tokyo_Declaration_of_HOPE\(English_version\).pdf](http://www.accu.or.jp/esd/mt-static/news/topics/Tokyo_Declaration_of_HOPE(English_version).pdf)
(参照：2011/02/27)
- (16) エスノグラフィーについては、金井壽弘・佐藤郁哉ほか(2010)『組織エスノグラフィー』有斐閣を参照されたい。
- (17) 拙稿(1997)「社会科『叙事詩』論序説：事実認識と想像力をつなぐ試み」『東京学芸大学附属大泉中学校』No.38、pp.39-54。
<https://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/5851> (参照：2011/02/27)
ここでは中学校社会科の授業の中で中学生が学習した事象・事実をもとに「叙事詩」を書いている。ぜひ、参照されたい。創作叙事詩は、学んだ知識・概念スキルを具体的な思考力・判断力、感性や直観、想像力などを経て表現された作品である。自ら解題を書くことで作品の背景や意図を論理的、客観的に表現することになる。まさに、創作叙事詩+解題は、感性和理性、直観と論理とをつなぐメタ認知活動である。
- (18) 文学作品では他者(批評家)が解題を書くことが一般的だが、「子どもと教師のためのエスノグラフィー」という教育実践・研究の手法としては、「なぜ、この叙事詩をかいたのか」その理由や根拠を書かせることで、自分が書いた作品を一旦相対化し、省察 reflection させ、メタ認知させるところに意味がある。
- (19) メタ認知 metacognition とは、自分自身の認識したことや考えたこと、行動したことそのものを対象として、自ら客観的につかみ認識することである。
- (20) 「おかやまESDな日々」
http://blog.goo.ne.jp/aprilcome_2010/e/5c40188e6eb452b57bcc2a42fd1f2fe0 (参照：2011/02/27)
- (21) 原明子氏は、岡山大学ESDリレーセミナーで、筆者が行った講演・ワークショップ「持続可能な未来のための教育・研究は可能なのか—教科・領域・専門性の「壁」を超えて—」で、大学1年生～大学院生、小中高の先生方、校長・教頭、大学教員など約30名が参加し、「創作叙事詩と解題」づくりを体験している。この取り組みを通じて原氏は自ら Educuer であることに気づいた。
- (22) 前掲(20)「おかやまESDな日々」を参照されたい。

ESD 普及における ユネスコスクールの役割と 指導行政上の課題

～ユネスコスクール、ESDの全国展開のために～

渡辺一雄（玉川大学）

1. はじめに（問題意識の背景）

平成23年1月現在、ユネスコスクールは、全国で279校登録されている。地域的偏在は解消される方向にあるが、方針通りにいくか予断を許さない（或いは地域的偏在はESDの特質かもしれないが…）。

ESDとは何ですか？ この問いは一般の人たちからは勿論学校現場からもよく聞かされる。ESDにより達成できる力＝教育評価に関する疑問であろう。換言すればESDは受験勉強に役立つのか（教科力とは異質の問題）というのが保護者及びその意向を反映した教師の根深い疑問に基づく。更には、環境教育や国際理解教育なら、総合的学習の時間、特別活動、課外活動で実際に取り組んでいる、理科や生活科、地理、英語でも取り上げてます。それでは不足なんではないか？ との問いかけもこれに類する。

どうにも「ESD」の説明は難解すぎる、との声を学校現場ですら多々耳にする実情（或いは教師自身に理解しようとする意欲、関心自体に希薄さが介在するのか？）を看過できない。

さてここで平成20年4月22日付各都道府県・指定都市教育委員会教育長及び各都道府県知事あて文部科学省国際統括官・同初等中等教育局長連名通知に改めて目を通してみよう。

通知本文で先ず「ユネスコ・スクール」（従来は「ユネスコ協同学校」と呼称したものをより親しみやすいものにするため改称）への申請窓口を各教育委員会（市町村教育委員会は都道府県教育委員会を経由）及び私立学校は各都道府

県私立学校主管課とすることとし、それぞれ文部科学省国際統括官に提出するとの公式チャンネルが敷かれた。

そして、同通知にはその根拠となる日本ユネスコ国内委員会(教育小委員会)からの提言「持続発展教育(ESD)の普及促進のためのユネスコ・スクール活用について」(平成20年2月)が添付されている。

これによれば、

(1)「持続可能な開発のための教育(以下「ESD」という)」は、日本政府が国連の場で国際的にリードする立場を宣言、ユネスコ主導により2005年から10年間を「ESD10年(国連決議)」とし、「持続可能な開発の原則、価値観、実践を教育と学習のあらゆる側面に組み込むこと」(ユネスコ指針)とされたこと、

(2)こうした国際動向に対し国内的には各学校が特色ある教育活動として「ESD」が包含する横断的・総合的な学習のための「総合的な学習の時間」の創設だけでは不十分とし、「環境教育、ものづくり教育といった教科等を横断した改善が欠かせないとの考え方に基づき、社会、地理歴史、公民、理科、技術・家庭等の各教科・科目等の改善に際して「ESD」に言及する中央教育審議会答申(2008年1月)がなされた。その直後に公表された幼稚園教育要領案、小学校学習指導要領案、中学校指導要領案にはこの「ESD」が明確に位置づけられたこと、

(3)「ESD」には環境教育、国際理解教育、人権教育等多岐にわたる分野をつなげた総合的な取り組みが必要とされ、ユネスコ協同学校ネットワーク事業(1953年発足、その後176カ国で約7,900校、2008年当時日本には僅かに24校)を有効活用すること、

が謳われている。

やや引用が長くなったが、それは今回の事例集策定にあつて、上記(1)から(3)の事項を再確認し、地方教育行政機関における指導行政にきちんと受け止められているのかどうか、個々の事例に即して検証することが必要と考えたからである。このこと抜きには弛むことなく「ESD」が将来もその成果を積み上げていけるかどうかを占うことは難しいとの危惧を禁じえないからである。

2. ユネスコスクールの地域的偏在を克服し全国展開へ(地域的偏在と指導行政の充実)

ユネスコスクール公式ウェブサイトによれば、平成23年1月現在でユネスコ

スクールは279校にのぼる（国はESD10年の最終年度の2014年度には500校の登録を目標としている）。

これを都道府県別にみると宮城県52校と最多であり、以下東京都34校、石川県27校、奈良県27校等となっておりこの4都県で31都道府県に分布する学校の半数を超えている。また、市町村単位では気仙沼市（33校）、金沢市（26校）、奈良市（26校）、多摩市（14校）が抜きん出ている。

しかし、学習指導要領に準拠し上記通知に示されているようにESD関連の教育活動を何らかの形で行っている学校は、基本的には全国に一樣に分布していると考えてよい。

ではこのギャップをどのように考えればよいのだろうか。

1 地域特性と地方教育行政の役割（責任）

先ず「地域特性」とは、学校を取り巻く自然、経済、文化、歴史（これ自体「ESD」の教育資源、素材であるが）や後述する(2)や(3)の事項から導かれるESD推進の原動力と定義したい。

次に文部科学省が行った「ユネスコスクール（公立学校担当）の窓口」調査の結果（平成23年1月11日現在）によると、①指導行政担当部署と答えたものが28都府県（前年8月調査では30府県）、②生涯学習（社会教育、文化担当を含む）担当部署が19道県（同じく17県）となっている。

僅かに指導担当部署から生涯学習担当部署への移行が伺えるが、従来の社会教育を基盤とする「ユネスコ」の担当部署へ動く傾向が見て取れる。また、「ユネスコスクール」の登録数が比較的多数を占めるか増加しているところは①の地域に、そうではない地域は、北陸の一部や中・四国ブロックを除き、②の地域に見られる。それは、北関東、東海、九州ブロックや大都市圏の一部に顕著である。

確かに所管部署をどうするかは、「ESD」の教育理念をどう理解するか、どのように具体化すればよいのかとの観点から、上記通知を受けた段階で教育行政側として悩ましい問題と映ったことは容易に想像がつく。そして、その選択に既述した「地域特性」が影響したものと推測される。

極端な例としては担当部署が不明確なためユネスコスクール公式ウェブサイト等で初めて「ESD」、「ユネスコスクール」という情報に触れ、申請手続きを所管教育委員会に行き半年以上も盤回しにされ、直接文部科学省に照会したという話も巷間聞かれるところである。

学校&みんなのESDプロジェクトに応募したユネスコスクールからの応募用紙(兼事業計画書)(本書p.200～p.203)によれば、活動の実施体制として「教育委員会が支援してくれている」とする学校が半数以下しかない。

各学校は、今回のプロジェクトのように事業支援(委託方式)により財源調達が可能なのもある。また、民間による支援のプログラムも存在するが、将来の独自財源による活動継続を想定すれば、教育行政当局の支援は深刻な問題となろう。

このことは財政難の最中、国自体が上記通知の中で、活動資源を民間企業のCSR活動との連携に求めようとする方向性にも伺われる。

ユネスコスクールの地域的偏在は何を意味するのか、教育行政側が上記通知を何処まで理解し実施に移そうとしているのか、このことは継続性のあるESD活動の行政関与(支援)が不可欠であることを想定すれば容易に理解できるのではなかろうか。

もっとも、学校教育の国の指導基準としての学習指導要領の実施は最終的には各学校が編成する教育課程に委ねられるものであることを考慮しながらも、今回の改訂を踏まえ今後500校の全国のバランスのとれた登録を目指すのであれば、教育委員会の指導行政部署が確信を持って機動的に機能し、結果的にユネスコスクール活動が顕在化するという“流れ”をきちんと押さえておく必要がある。こうした“流れ”を経験則として重要視したい。

(参考1)「多摩市方式」

東京都多摩市では、何ゆえに所管全校がユネスコスクール加盟を始めとするESD推進体制が一挙に整備され教育活動が進展しつつあるのか？

- “2050年の大人づくり”を視野に多摩市将来像の中核を担う人材養成を学校の統一スローガン(首長、市議会の理解と支持、独自の予算措置)
- ESD推進による持続発展が期待できる教育活動の展望への確信、地域の人材・教材を活用することで循環型学校活性化＝地域の再生原理
- NPOと協同した集中的教員研修、指導者養成という“先行投資”(準備活動)
- 火の玉となる中核(アイデア溢れるコーディネータ)の存在、人材としての教育委員会職員の確保(養成)
- 世界や全国に支援協力者がいるという確信

(参考2) 我が国の学習指導要領等教育課程の基準の見直しに実質的に大き

な影響力を持つようになった国際的な学力調査「PISA」の評価基準（理念）とも照合しながらESDにより育つ「力」を吟味することにより「教科力涵養＝受験対策」という狭い教育観からの脱却を図りうる一つの有力な手掛かりを見出すことが期待される。

2 ユネスコスクール支援大学間ネットワークメンバー大学の役割

前記“流れ”の中でユネスコスクール支援大学間ネットワーク（以下「ASPUivNet」）はどのような役割を担っているのだろうか。これが次の問題である。

2008年12月に発足したASPUivNetは、大学の知見を生かしESD推進の立場からユネスコスクール支援（カリキュラム開発、研修、ネットワーク構築その他）を行うことを目標に13大学が自主的に参加し、独自の研究・教育活動の一環として活動している。

先述したユネスコスクール申請に当たって、専門・学術的知見を生かす方法で結果的に学校数の増加、ネットワーク構築に力を貸している。しかし、ユネスコスクールのESD活動の質的担保が新たに国レベルでも大きな関心事項になってきたことをASPUivNetはどのように受け止めればよいか慎重に検討する必要があると考える。

ASPUivNetが現在行っているユネスコスクール申請時の書類チェックのみならずその後の活動においても助言を行っていくことになると、所管する教育委員会による本来の指導行政とどのように役割分担を行い、連携していくのが新たな問題として浮上することになる。これは、ユネスコスクールの登録申請をパリのユネスコ本部との間で取り持つ「ユネスコ国内委員会事務局」である文部科学省国際統括官と初等中等教育局との新たな連携の枠組みをどうするのかという問題と関連している。

この点は、既に第1回ユネスコスクール全国大会（2009年12月）でも一部の学校から指摘されたことがあり、爾来明確なポジションを示さないまま今日に至っていることと合わせ考慮して、国レベルでも問題の整理、回答を願いたいところである。

3 戦略的展開の方向性で押さえるべき幾つかのポイント

2014年の国連ESDの10年を締めくくる国際会議の日本誘致が決定している。国は500校を目標に掲げているが、全国の小中高等学校だけでもその規模

は全体数僅か1%台と極めて小さく、地域的偏在を合わせ考慮すると「ESD」の教育理念と具体的成果、地域社会への影響力を全国規模で実証することは難しいだろう。

そこで、仮に全国規模でバランス良く普及させる方向で戦略性を考察すると、以下のように整理でき、留意・改善すべきではないだろうか。

①前記「多摩市方式」(参考1)の例にあるように、ESDの切り口が広範であり、学校を取り巻く地域や他国を含む連携を視野に入れ、地域特性を生かした多面的な展開が可能とする重要な要素である。

その場合、ユネスコや環境保護、平和・人権に係る民間の団体等自生的な形で地方において展開している民間グループとの交流、連携を図ることにより、特色ある地域人材の活用の道がみつき、継続的な取り組みが可能となる。

②国際協力キャンペーンに学力論を重ね、最終的な教育評価にどのようにつながっていくのかについて、指導行政部署での突っ込んだ検討が不可欠であろう。

換言すれば、少なくとも学習指導要領において明確な位置づけを得ただけでは不十分であり、受験指導を主軸とする従来型の学力論を越える、保護者をも納得させる実践的成果が検証されない限り、ESDの普遍的教育価値を全国的に定着させることは難しい。

その場合、(ア)環境問題の解決・国際理解の推進・平和・人権などユネスコキャンペーンの学校教育上の意義、(イ)開かれた関係を築く複雑なコミュニケーション能力の涵養を主題とするESDで育む学力論、(ウ)養われる教科力を主軸とする教育評価の三つの要素が地方教育(指導)行政機関において体系的、総合的に議論されることが重要であろう。

③かつてのユネスコ活動の教育現場における意義は、十分認知されては来なかったことに対して、まずは国レベルでの初等中等教育行政、地方教育委員会の指導行政にしっかりと首座を設けるべきと考える。

これは、近年とみに著しい教員の校務の多忙化、総合的学習の退潮現象などもあって、既存の国際理解教育すら伸び悩みというのが現状である(「グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実証的研究」日本国際理解教育学会、平成15～17年)との指摘に明らかである。

④ユネスコスクール加盟のメリット

フルブライト・ジャパン（日米教育委員会）が日米両国の共同出資により、米国のInstitute of International Educationとユネスコ・アジア文化センター（ACCU）の協力で昨年来実施している「ESD日米教員交流プログラム」の機会提供が大きな意義を持っている。米国以外にも中国、韓国との教員交流も同様、国際交流の機会を有効に活用することが大きなメリットである。

とりわけ米国訪問のプログラムを通じて訪問した米国州政府が所管する地方教育行政、学校現場で目撃した学校・教員の個性ある活動、これを支える自律性の担保、権限と責任の保有は、多くの参加者に少なからぬインパクトを実際に与えていることに注目したい。日米教員交流により実地に学校経営、カリキュラム開発と具体化の根本的あり方を問い直す格好の機会を得たことは、ESD推進を契機とするユネスコスクール支援のためのプロジェクトの効果と評してよいだろう。

ESDがしっかりと地域に根を下ろし、創造性のある豊かな教育活動を展開するには、我が国の学校経営のあり方自体の革新抜きには考えられないことを参加者は帰国後異口同音に語っている。学習指導要領におけるESDの理念の明確な位置づけがなされた今、学校が編成する教育課程に生きるためには、学校長を中心とする学校経営の革新と連動することが必要である。

ユネスコスクールとは

「戦争は人の心の中でうまれるものであるから、
人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」(ユネスコ憲章前文より)

ユネスコスクールとは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校です。世界180カ国で約9,000校が活動をしています。日本からは、2011年1月現在、279校の幼稚園、小・中・高等学校及び教員養成学校が参加しています。日本政府では、ユネスコスクールを中心にESDを推進するよう様々な活動を支援しています。

なにをするの？

ユネスコスクールでは、以下の4分野を基本テーマとして活動しています。



上記以外の分野でも、ユネスコの理念に沿ったものであれば、各参加校がテーマ(世界遺産教育など)を設定することができます。

ユネスコスクールに参加すると…

- ユネスコから認定証が送られてきます!
- 世界中の約9,000の参加校との交流が実現!
- ユネスコスクール(国内)ウェブ上で情報交換が可能に!

このグローバルなネットワークへの参加に関心のある方は、ユネスコスクールウェブサイトにて詳細をご覧ください。

ユネスコスクールウェブサイト

ユネスコスクールのウェブサイトでは、ESDに関するイベントや各校の実践、役に立つ教材、ユネスコスクールをサポートする団体・機関などの情報が得られます。この冊子の実践事例48もウェブサイト上で日本語と英語にて一部紹介をしています。ユネスコスクール参加校には、ログイン・ID、パスワードが発行され、グループベースでユネスコスクールの活動などについての情報交換を行うことができます。

ユネスコスクールウェブサイト（日本語） <http://www.unesco-school.jp/>

ユネスコスクールウェブサイト（英語） 上記URLからリンク

The screenshot shows the Japanese homepage of the UNESCO School website. At the top, there is a navigation bar with 'English' and 'サイトマップ' (Site Map). Below that is a search bar labeled 'サイト内検索' (Search within site) with a '検索' (Search) button. A 'メニュー' (Menu) section lists various categories: 'ユネスコスクールとは' (What is UNESCO School?), '持続発展教育(ESD)' (Sustainable Development Education), '加盟校一覧' (List of member schools), '加盟申請方法' (Application method), 'グッズ・プラクティス' (Goods/Practices), '教材ルーム' (Material Room), 'イベントのお知らせ' (Event notices), '学校あみんなのESDプロジェクト' (School Aminnano ESD Project), 'リポーター情報' (Reporter information), 'サイトについて' (About the site), and 'ASPnet in Japan'.

The main content area features a large banner with the text 'ユネスコスクールへようこそ!' (Welcome to UNESCO School!) and 'ユネスコスクールはユネスコの理想を実現する学校です' (UNESCO School is a school that realizes UNESCO's ideal). Below the banner, there are several news items:

- ユネスコスクール TOPICS**
 - サイトを更新しました** (Updated site): Information about updates to the website content.
 - 2011年国際理解教育ベスト・プラクティス発表 締切4月5日(火)** (2011 International Understanding Education Best Practices Announcement, Deadline April 5th): Announcement of the award ceremony.
 - 2011年度 国際ユース作文コンテスト テーマ『私をよめた世界』締切6月30日(木)** (2011 International Youth Writing Contest, Theme 'The World that Accepted Me', Deadline June 30th): Announcement of the writing contest.
 - ユネスコスクール事業ESD国際交流プログラム開始のお知らせ** (UNESCO School Project ESD International Exchange Program Start Notice): Announcement of the international exchange program.
 - ユネスコスクールのロゴをご活用ください** (Please use the UNESCO School logo): Information about using the logo.

At the bottom of the page, there are four buttons: 'ユネスコ・スクール' (UNESCO School), '持続発展教育(ESD)' (Sustainable Development Education), 'グッズ・プラクティス' (Goods/Practices), and '教材ルーム' (Material Room). The footer includes the '文部科学省' (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) logo and the '日本ユネスコ国内委員会' (Japan National Committee for UNESCO) logo.

文部科学省委託事業 学校&みんなのESD プロジェクト協力校
応募用紙(兼 事業計画書)

財団法人ユネスコ・アジア文化センター 設

提出日 2010年 月 日

1. 学校基本情報 (英数字は半角で入力してください)

ふりがな						
住所	〒 - 番地					
連絡先	TEL	-	-	FAX	-	-
	E-MAIL			HP		
ふりがな						
学校名	立					
ふりがな			印			
学校長名			役職			
ふりがな						
担当教員名						
連絡先	TEL	-	-	FAX	-	-
	E-MAIL					
学校で他に実施中のプロジェクト	有 具体名：()					
	無					
ASP申請時期	年	月	*可能であれば申請書コピーを添付			
ASP加盟時期	年	月				

2. プロジェクト協力校としてのESD活動企画 【概要】

タイトル (30字以内)			
目的 (300字以内)			
対象学年・ 対象者		対象人数	
教科・ 課外活動			

内容 (スペースは自由に広げてください)	
スケジュール	月 月 月 月 月
経費計画	合計 円 (内訳、詳細は別紙「経費計画書」に記入し提出してください。)

3. プロジェクト協力校としてのESD活動企画 【実施体制と予測される効果】

活動の実施体制	<p>該当するものすべてにチェック（または塗りつぶし）を入れてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 地域の人たちが協力してくれている <input type="checkbox"/> 外部の専門家がサポートしてくれている <input type="checkbox"/> 国内の他の学校と協力体制にある <input type="checkbox"/> 海外の学校と協力体制にある <input type="checkbox"/> 校長先生が支援してくれている <input type="checkbox"/> 学校内で約1割以上の同僚が協力してくれている <input type="checkbox"/> 担当者自身の担当教科以外の教科の先生が協力してくれている <input type="checkbox"/> 教育委員会が支援してくれている <input type="checkbox"/> その他（具体的に：_____）
活動のインパクト	<p>このESD活動は、次の観点からどれくらいのインパクトを学校・地域社会に与えようですか。（それぞれひとつチェック（または塗りつぶし）を入れてください）</p> <p>環境面 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p> <p>社会面 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p> <p>経済面 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p> <p>文化面 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p> <p>その他（具体的に：_____） <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p>
教科の連携	<p>どの教科との連携が考えられますか。 （それぞれ該当するものすべてに○をつけてください）</p> <p>（中学・高校の先修のみに該当ください） ご自身の担当教科： 国・数・社・理・英/外・音・美・技家・保健・道・総・特 連携できる教科： 国・数・社・理・英/外・音・美・技家・保健・道・総・特</p>
子どもたちへの影響	<p>この活動は、参加する子どもたちに、どれくらい影響を与えようですか。 （それぞれひとつチェック（または塗りつぶし）を入れてください）</p> <p>ライフスタイル <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p> <p>行動 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p> <p>価値観 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p>
大人たちへの影響	<p>この活動は、参加する大人（教員・保護者・地域の人）たちに、どれくらい影響を与えようですか。（それぞれひとつチェック（または塗りつぶし）を入れてください）</p> <p>ライフスタイル <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p> <p>行動 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p> <p>価値観 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p>

活動で重要なキーワード	<p>この活動で重要なキーワードを次の中から4つチェックを入れてください。</p> <input type="checkbox"/> 異文化への理解 <input type="checkbox"/> 協力 <input type="checkbox"/> 共感 <input type="checkbox"/> 正義 <input type="checkbox"/> 相互理解 <input type="checkbox"/> 規範 <input type="checkbox"/> 参加 <input type="checkbox"/> 啓蒙 <input type="checkbox"/> 尊敬 <input type="checkbox"/> 寛容 <input type="checkbox"/> 信頼 <input type="checkbox"/> 価値 <input type="checkbox"/> その他 (具体的に：)
活動の目標	<p>活動の目標として何を重視していますか。 (該当するものをすべてにチェック (または塗りつぶし) を入れてください)</p> <input type="checkbox"/> 環境問題、社会問題などにおける複雑な状況を理解すること <input type="checkbox"/> 学校周辺と地域だけでなく、世界的な課題について知ること <input type="checkbox"/> 自分たちの生活と他の国の人たちの生活の関係を知ること <input type="checkbox"/> 問題や現象の背景を理解したり、多面的かつ総合的なものの見方を重視する体系的な思考力を育むこと <input type="checkbox"/> データや情報の収集・分析力を育むこと <input type="checkbox"/> 「多様性の尊重」「人間の尊重」「非排他性」「機会均等」「環境の尊重」といった持続可能な開発に関する価値観を培うこと <input type="checkbox"/> コミュニケーション能力の向上を重視すること <input type="checkbox"/> 何かを決める時、話し合いを経て決めること <input type="checkbox"/> 現状に対して疑問を持つこと <input type="checkbox"/> 見つけた疑問に対して、意見を発信すること <input type="checkbox"/> 困難な状況を把握した上で、それに対して何ができるかを検討すること <input type="checkbox"/> 批判力を重視した代替案の思考力を育むこと <input type="checkbox"/> 未来に希望を持つこと <input type="checkbox"/> 自らをふりかえり、自分を変えようと努力すること <input type="checkbox"/> 身近な社会・環境を変えようと努力すること <input type="checkbox"/> 市民として参加する態度や技能を育むこと <input type="checkbox"/> 学校内外で学び続けること <input type="checkbox"/> 学んだことを実際の行動に移すこと <input type="checkbox"/> 活動者とおして、協力することを学ぶこと <input type="checkbox"/> その他 (具体的に：)
学部指導要領とESD活動の実施	<p>学部指導要領はESD活動の実施にあたり、役立ちそうですか・役立っていますか。 (次のいずれかにチェック (または塗りつぶし) を入れ、可能であれば理由もご記入ください。)</p> <input type="checkbox"/> はい (理由：) <input type="checkbox"/> いいえ (理由：) <input type="checkbox"/> どちらでもない (理由：)
地域社会との関係	<p>この活動は、次の関係に影響を与えそうですか。 (それぞれひとつチェック (または塗りつぶし) を入れてください)</p> <p>「学校周辺の地域社会 (子どもが居住する地域) の・・・」</p> <p>・若い世代と年上の世代との関係 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い ・伝統的生活様式と新しい生活様式 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い ・伝統的技能と近代的技術との関係 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p>
担当教員について	<p>担当教員につき、次の項目にひとつずつチェック (または塗りつぶし) を入れてください。</p> <p>年齢： <input type="checkbox"/> 20代 <input type="checkbox"/> 30代 <input type="checkbox"/> 40代 <input type="checkbox"/> 50代 <input type="checkbox"/> 60代以上 教員歴： <input type="checkbox"/> 5年未満 <input type="checkbox"/> 5-9年 <input type="checkbox"/> 10-19年 <input type="checkbox"/> 20-29年 <input type="checkbox"/> 30年以上</p> <p>現在、ESD実践に深く関わっていますか。 <input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> その他 ()</p> <p>ESD、本プログラムについてご自由にお書きください。(あなたにとってのESDとは 等)</p>

文部科学省委託事業 学校&みんなのESD プロジェクト協力校
 応募用紙（兼事業計画書）添付資料（経費計画書）

財団法人ユネスコ・アジア文化センター 殿

提出日 2010年 月 日

ふりがな			
学校名	立		
ふりがな		印	
学校長名			
ふりがな		号	
担当教員名			

※見積書がある場合は添付してください

	項目	支出予定日	積算			0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	
諸謝金		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
	小計					0 円
交通費		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
	小計					0 円
消耗品費 (上乗せ分用まで)		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
	小計					0 円
印刷費		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
	小計					0 円
通信費		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
		/ 日	円 ×	名 ×	目 =	0 円
	小計					0 円
合計						円
見積添付	有・無					

活動報告書(1)

財団法人ユネスコ・アジア文化センター 様

提出日 2011年1月 日

平成22年度「日本/ユネスコパートナーシップ事業」ユネスコスクールにおけるESD普及促進活動(学校&みんなのESDプロジェクト)委託事業完了に関し、経費報告書を添えて下記の通り報告します。

○ ○立 ○ ○ ○学校
校長 ○ ○ ○
 印

活動報告

活動ごとに活動内容を表してください。(委託期間開始以前に既に開始している活動に関しては、活動の開始前からの内容をお願いします。)

1	活動名【	】対象学年【	】対象人数【	人】
	活動内容(スペースは自由に記入してください)	活動概要(スペースは自由に記入してください)		
	月			
	月			
	月			
	月			
	<small>※活動内容の記載事項</small>			

2	活動名【	】対象学年【	】対象人数【	人】
	活動内容(スペースは自由に記入してください)	活動概要(スペースは自由に記入してください)		
	月			
	月			
	月			
	月			
	<small>※活動内容の記載事項</small>			

3	活動名【	】対象学年【	】対象人数【	人】
	活動内容(スペースは自由に記入してください)	活動概要(スペースは自由に記入してください)		
	月			
	月			
	月			
	月			
	<small>※活動内容の記載事項</small>			

*上記様形をコピーして、活動報告書を以下スペースに続けてご記入ください。

活 動 報 告 書 (2)

財団法人ユネスコ・アジア文化センター 殿

提出日 2011年1月 日

平成22年度「日本/ユネスコパートナーシップ事業」ユネスコスクールにおけるESD普及促進活動(学校&みんなのESDプロジェクト)委託事業完了に関し、経費報告書を添えて下記の通り報告します。

○ ○ 立 ○ ○ 学校

校長 ○ ○ ○ ○ 印

1. 活動全体を振り返って

プロジェクト協力校としてのESD活動全体を振り返ってご回答をお願いします。
2つ以上の活動を実施された学校はすべての活動を振り返って項目ごとにチェックしてください。

活動全体の 実施体制	<p>該当するもの「<u>○</u>」にチェック(または塗りつぶし)を入れてください。</p> <p><input type="checkbox"/> 地域の人たちが協力してくれた</p> <p><input type="checkbox"/> 外部の専門家がサポートしてくれた</p> <p><input type="checkbox"/> 国内の他の学校と協力体制のもと実施することができた</p> <p><input type="checkbox"/> 海外の学校と協力体制のもと実施することができた</p> <p><input type="checkbox"/> 校長先生が支援してくれた</p> <p><input type="checkbox"/> 学校内で物1箱以上の品物が協力してくれた</p> <p><input type="checkbox"/> 担当者自身の担当教科以外の教科の先生が協力してくれた</p> <p><input type="checkbox"/> 教育委員会が支援してくれた</p>																				
	自由コメント欄																				
活動全体の インパクト	<p>このESD活動は、次の観点からどれくらいのインパクトを学校・地域社会に与えたでしょうか。 (それぞれ\squareにチェック(または塗りつぶし)を入れてください)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 25%;">環境面</td> <td style="width: 10%;"><input type="checkbox"/> 強い</td> <td style="width: 10%;"><input type="checkbox"/> やや強い</td> <td style="width: 10%;"><input type="checkbox"/> やや弱い</td> <td style="width: 10%;"><input type="checkbox"/> 弱い</td> </tr> <tr> <td>社会面</td> <td><input type="checkbox"/> 強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや弱い</td> <td><input type="checkbox"/> 弱い</td> </tr> <tr> <td>経済面</td> <td><input type="checkbox"/> 強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや弱い</td> <td><input type="checkbox"/> 弱い</td> </tr> <tr> <td>文化面</td> <td><input type="checkbox"/> 強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや弱い</td> <td><input type="checkbox"/> 弱い</td> </tr> </table>	環境面	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い	社会面	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い	経済面	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い	文化面	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い
環境面	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い																	
社会面	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い																	
経済面	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い																	
文化面	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い																	
	自由コメント欄																				
教科の連携	<p>ご自身の担当教科: (チェック(または塗りつぶし)を入れてください)</p> <p><input type="checkbox"/> 国 <input type="checkbox"/> 数 <input type="checkbox"/> 社 <input type="checkbox"/> 理 <input type="checkbox"/> 英/外</p> <p><input type="checkbox"/> 音 <input type="checkbox"/> 美 <input type="checkbox"/> 技芸 <input type="checkbox"/> 保健 <input type="checkbox"/> 道 <input type="checkbox"/> 総 <input type="checkbox"/> 特</p> <p>どの教科との連携が対応可能ですか: (該当するもの\squareにチェック(または塗りつぶし)を入れてください)</p> <p><input type="checkbox"/> 国 <input type="checkbox"/> 数 <input type="checkbox"/> 社 <input type="checkbox"/> 理 <input type="checkbox"/> 英/外</p> <p><input type="checkbox"/> 音 <input type="checkbox"/> 美 <input type="checkbox"/> 技芸 <input type="checkbox"/> 保健 <input type="checkbox"/> 道 <input type="checkbox"/> 総 <input type="checkbox"/> 特</p>																				
子どもたちへの 影響	<p>この活動は、参加する子どもたちに、どれくらい影響を与えましたか。 (それぞれ\squareにチェック(または塗りつぶし)を入れてください)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 25%;">ライフスタイル</td> <td style="width: 10%;"><input type="checkbox"/> 強い</td> <td style="width: 10%;"><input type="checkbox"/> やや強い</td> <td style="width: 10%;"><input type="checkbox"/> やや弱い</td> <td style="width: 10%;"><input type="checkbox"/> 弱い</td> </tr> <tr> <td>行動</td> <td><input type="checkbox"/> 強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや弱い</td> <td><input type="checkbox"/> 弱い</td> </tr> <tr> <td>価値観</td> <td><input type="checkbox"/> 強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや弱い</td> <td><input type="checkbox"/> 弱い</td> </tr> </table>	ライフスタイル	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い	行動	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い	価値観	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い					
ライフスタイル	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い																	
行動	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い																	
価値観	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い																	
	自由コメント欄																				
大人たちへの 影響	<p>この活動は、参加する大人(教員・保護者・地域の人)たちに、どれくらい影響を与えましたか。 (それぞれ\squareにチェック(または塗りつぶし)を入れてください)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 25%;">ライフスタイル</td> <td style="width: 10%;"><input type="checkbox"/> 強い</td> <td style="width: 10%;"><input type="checkbox"/> やや強い</td> <td style="width: 10%;"><input type="checkbox"/> やや弱い</td> <td style="width: 10%;"><input type="checkbox"/> 弱い</td> </tr> <tr> <td>行動</td> <td><input type="checkbox"/> 強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや弱い</td> <td><input type="checkbox"/> 弱い</td> </tr> <tr> <td>価値観</td> <td><input type="checkbox"/> 強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや強い</td> <td><input type="checkbox"/> やや弱い</td> <td><input type="checkbox"/> 弱い</td> </tr> </table>	ライフスタイル	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い	行動	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い	価値観	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い					
ライフスタイル	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い																	
行動	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い																	
価値観	<input type="checkbox"/> 強い	<input type="checkbox"/> やや強い	<input type="checkbox"/> やや弱い	<input type="checkbox"/> 弱い																	
	自由コメント欄																				

活動で重要なキーワード	<p>この活動を通して、子ども達ほどのようなものを身につけてほしいか。 (次の中から4つ選んでください)</p> <p><input type="checkbox"/> 互への理解 <input type="checkbox"/> 協力 <input type="checkbox"/> 共感 <input type="checkbox"/> 正義 <input type="checkbox"/> 相互理解 <input type="checkbox"/> 規範 <input type="checkbox"/> 参加 <input type="checkbox"/> 協議 <input type="checkbox"/> 尊敬 <input type="checkbox"/> 寛容 <input type="checkbox"/> 信頼 <input type="checkbox"/> 価値</p> <p>自由コメント欄</p>
活動の目標	<p>活動の目標として達成したのは何ですか。(当初の目標以外のものも含む) (該当するものすべてにチェック(または塗りつぶし)を入れてください。)</p> <p><input type="checkbox"/> 環境問題、社会問題などにおける適切な状況を理解すること <input type="checkbox"/> 学校周辺と地域だけでなく、世界的な課題について知ることに <input type="checkbox"/> 自分たちの生活と他の国の人たちの生活の関係を知ること <input type="checkbox"/> 問題や現象の背景を理解したり、多面的かつ総合的なものの見方を重視する体系的な思考力を 育むこと <input type="checkbox"/> データや情報の収集・分析力を育むこと <input type="checkbox"/> 「多様性の尊重」「人間の尊厳」「非排他性」「機会均等」「環境の尊重」といった持続可能な開発 に関する価値観を培うこと <input type="checkbox"/> コミュニケーション能力の向上を重視すること <input type="checkbox"/> 何かを決めるとき、話し合いを経て決めること <input type="checkbox"/> 現状に対して疑問を持つこと <input type="checkbox"/> 身につけた疑問に対して、意見を発信すること <input type="checkbox"/> 困難な状況を把握した上で、それに対して何ができるかを検討すること <input type="checkbox"/> 批判力を重視した代替案の思考力を育むこと <input type="checkbox"/> 未来に希望を持つこと <input type="checkbox"/> 自らをふりかえり、自分を変えようと努力すること <input type="checkbox"/> 身近な社会・環境を変えようと努力すること <input type="checkbox"/> 市民として参加する態度や技能を育むこと <input type="checkbox"/> 学校内外で学び続けること <input type="checkbox"/> 学んだことを実際の行動に移すこと <input type="checkbox"/> 活動をとおして、協力することを学ぶこと</p> <p>自由コメント欄</p>
地域社会との関係	<p>この活動は、次の関係にどのような影響を与えましたか。 (それぞれに2ヶチェック(または塗りつぶし)を入れてください)</p> <p>「学校周辺の地域社会(子どもが居住する地域)の…」</p> <p>・若い世代と年上の世代との関係 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い ・伝統的な生活様式と新しい生活様式 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い ・伝統的技術と近代技術との関係 <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> やや強い <input type="checkbox"/> やや弱い <input type="checkbox"/> 弱い</p> <p>自由コメント欄</p>

2. コメント

このESD活動を通して、先生が発見したこと、生徒の感想や保護者、地域の方々の声、先生のご感想などを教えてください。

経費報告書

財団法人ユネスコ・アジア文化センター 様

提出日 2011年 1月 日

平成22年度「日本/ユネスコパートナーシップ事業」ユネスコスクールにおけるESO普及促進活動（学校&みんなのESOプロジェクト）にかかる支出経費を下記の通り、報告申し上げます。

校長 副校長 教員 生徒 保護者 関係者
 学校 地区 市町村 県 国 その他

記

合計 円

経費種別	経費番号 No.	支出日	依頼先	科目	金額	備考
			日 日			円 × 円 × 円 =
		日 日			円 × 円 × 円 =	円
		日 日			円 × 円 × 円 =	円
		日 日			円 × 円 × 円 =	円
	小 計					円

経費種別	経費番号 No.	支出日	依頼先	科目	金額	備考
			日 日			円 × 円 × 円 =
		日 日			円 × 円 × 円 =	円
		日 日			円 × 円 × 円 =	円
		日 日			円 × 円 × 円 =	円
	小 計					円

経費種別	経費番号 No.	支出日	依頼先	科目	金額	備考
			日 日			円 × 円 =
		日 日			円 × 円 =	円
		日 日			円 × 円 =	円
		日 日			円 × 円 =	円
	小 計					円

経費種別	経費番号 No.	支出日	依頼先	科目	金額	備考
			日 日			円 × 円 =
		日 日			円 × 円 =	円
		日 日			円 × 円 =	円
		日 日			円 × 円 =	円
	小 計					円

経費種別	経費番号 No.	支出日	依頼先	科目	金額	備考
			日 日			円 × 円 =
		日 日			円 × 円 =	円
		日 日			円 × 円 =	円
		日 日			円 × 円 =	円
	小 計					円

以上

事業委員

新井 紀子	国立情報学研究所社会共有知研究センター センター長・教授
上原 有紀子	国立国会図書館総務部企画課評価係 主査
中西 久枝	同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科 教授
成田 喜一郎	東京学芸大学大学院教育学研究科教育実践創成講座 教授
丸山 英樹	国立教育政策研究所国際研究 協力部 主任研究官
村上 千里	認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J) 理事・事務局長
渡辺 一雄	玉川大学 教育博物館長・教育学部教育学科 教授

外部評価者

鈴木 克徳	金沢大学 環境保全センター 教授
見上 一幸	宮城教育大学 副学長

50音順・敬称略

本冊子中の学校情報は活動報告書提出時、事業委員など役職名は発行時のものです。

ひろがりつながる ESD 実践事例 48

本冊子は、平成22年度文部科学省委託「日本／ユネスコパートナーシップ事業」の一環として制作されました。

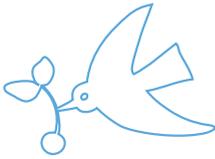
発行日 2011年3月15日

発行 財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)
〒162-8484 東京都新宿区袋町6 日本出版会館内
TEL : 03-3269-4435 FAX : 03-3269-4510
URL ACCU : <http://www.accu.or.jp/>
ESD : <http://www.accu.or.jp/esd/>
ユネスコスクール公式ウェブサイト : <http://www.unesco-school.jp/>
E-mail : esd@accu.or.jp

デザイン・印刷・製本 有限会社サザンカンパニー

© ユネスコ・アジア文化センター 2011
ISBN 978-4-946438-90-5
C0037

© 2000



E d u c a t i o n f o r
S u s t a i n a b l e
D e v e l o p m e n t